

50th Anniversary

長崎県技術士会 創立50周年記念誌

～ 技術の歩み、未来への架け橋 ～



APREN 長崎県技術士会

Association of Professional Engineering-Nagasaki

表紙写真 女神大橋・長崎らしさを象徴する風景

長崎港小ヶ倉柳埠頭から望む女神大橋（ヴィーナスウイング）は、長崎市南部と西部を結び、市内交通の円滑化を実現するとともに、地域の産業・経済・文化の発展を支える象徴的な架け橋として建設されました。

平成17年(2005)に竣工・開通した女神大橋は、令和7年(2025)に竣工20周年を迎え、その雄大な姿は単なる交通インフラにとどまらず、長崎の高い技術力を象徴する存在として深い印象を残しています。

橋の背後には、長崎の経済を長年支えてきた三菱重工業長崎造船所等の施設が広がり、さらに市民に親しまれる稲佐山の緑豊かな姿が調和をもって映えています。これらが一体となって、長崎らしさを象徴する独自の景観を形づくり、歴史と自然、産業と文化が交錯する都市の姿を鮮やかに描き出しています。

女神大橋は、国内で6番目の長さを誇る斜張橋として知られ、夜間には幻想的なライトアップが施されます。その光景は訪れる人々に深い感動を与え、平成25年(2013)には「日本夜景遺産」に認定されました。世界的に評価される長崎市の夜景を構成する重要な要素として、観光資源としての価値を高め、文化的魅力を国内外へ発信し続けています。

本誌の表紙に採用したこの一枚は、長崎の歴史と未来を結ぶ象徴的な風景を映し出すものであり、技術と文化の調和を体現する記念すべき写真です。女神大橋の雄姿は、技術者の情熱と高い専門性が結実した成果であり、未来への希望を託す架け橋として、長崎県技術士会創立50周年の節目を飾るにふさわしい象徴的存在です。

（長崎県道路公社ホームページより一部引用）

表紙写真：令和7年(2025)11月29日 長崎港小ヶ倉柳埠頭にて撮影
（撮影者：長崎県技術士会 浦瀬俊郎）

【目 次】

【１】 会長挨拶		P 1
長崎県技術士会会長	山口 和登	 P 2
【２】 祝 辞		P 3
長崎県知事	平田 研	 P 4
長崎大学総合生産科学域長	木村 正成 教授	 P 5
長崎地盤研究会会長	蔭 宇静 教授	 P 6
産業基盤維持管理技術研究会代表	中村 聖三 教授	 P 7
【３】 長崎県技術士会創立の経緯と背景		P 8
【４】 日本技術士会本部（現在統括本部）及び		
九州支部（現在九州本部）と長崎県技術士会の関係		P 14
【５】 歴代役員一覧と草創期に活躍された方々		P 21
【６】 50年間の各種記録		
主要行事、会員数推移、初期合格者、入退会記録等		P 32
【７】 平成から現在までの各種活動		P 41
【８】 会員寄稿		P 52
旧役員		P 53
現役員		P 58
初期の合格者		P 74
現会員		P 79
【９】 長崎県技術士会の将来像、今後への期待		P 91
長崎県技術士会会長 山口和登		P 92
日本技術士会九州本部長崎県支部 支部長 山口昭光		P 93
【10】 機関誌APRENの軌跡・目次一覧		P 94
【11】 機関誌APREN全号		P107
【12】 協賛広告・寄付金		P307

ページ番号（P○）をクリックすると、該当ページへジャンプします。

会長挨拶

長崎県技術士会会長

やまぐち かずと
山口 和登（応用理学）



長崎県技術士会は、この度創立50周年を迎えることができました。これもひとえに先輩諸氏のご努力、現会員のご協力、長崎県や各自治体、長崎大学、関係諸団体、そして地域の皆様の温かいご支援、ご鞭撻によるものと、心から感謝申し上げます。また日ごろから長崎県技術士会運営についてご指導、ご支援を頂いております関係者の皆様には改めて感謝申し上げます。

長崎県技術士会は、1951年に創立された日本技術士会、1965年に発足した日本技術士会九州支部（2011年7月より九州本部）に続き、当時長崎県内に在住していた黒瀬正行氏をはじめ約10名で、1975年に長崎県技術士会が創立されました。その後会員数は25年後の1990年には51名、40年後の2015年には127名、そして50年後の2025年には209名となっております。

当初の20年間は、長崎県技術士会会員の親睦や情報交換を中心とした内部活動が主でした。外部との交流は、日本技術士会九州支部の行事参加に限られていました。その後の30年間は、4代目会長犬束洋志氏の指導のもと、県内外への情報発信や技術士活動の推進、知名度向上活動などの外部活動が盛んに行われ、会員増加にもつながりました。

主な活動は、長崎県技術士会機関紙の定期発行、長崎県技術士会独自のホームページの開設と随時更新、長崎大学との連携した活動や県内外の学会等の技術関連団体及び他県技術士会との交流などです。また、県内技術士や関係技術者のCPD活動の一環として、県内でのCPD研修会や見学会の定期開催を行っております。特に10年前の日本技術士会九州本部長崎県支部創立後は県支部と研修会・見学会を共催とし、内容の充実化を図っております。

長崎県技術士会、さらには技術士全体の知名度は、まだ十分に高いとは言えません。県内の技術士登録者数は2025年3月末現在482名で、長崎県技術士会の会員数は増加傾向にありますが、現在会員数209名と登録者数の43%とまだ不十分であります。この為、会員数の拡大に今後も積極的に取り組んでいきたいと思っております。

長崎県技術士会の過去50年の歴史をふり振り返り、次の50年に向かって、地域の発展に貢献するために様々な技術士活動を展開し、地域に必要とされる技術士会となる為の一助としての記念誌となることを願いたします。

【2】祝 辞

長崎県知事	平田 研		P 4
長崎大学総合生産科学域長	木村 正成 教授		P 5
長崎地盤研究会会長	蔣 宇静 教授		P 6
産業基盤維持管理技術研究会代表	中村 聖三 教授		P 7

祝 辞

長崎県知事

ひらた けん
平田 研



このたび、長崎県技術士会が、創立50周年という記念すべき節目を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

貴会におかれましては、昭和50年の発足以降、平成17年には100名を超える会員数となる中、年4回のCPD研修会の実施や長崎地盤研究会の勉強会への参加、長崎大学における講義の実施などにより、技術力の向上に努めてこられました。

貴会会則第2条に「本会は、技術士の使命及び職務に鑑み、技術士業務の進歩並びに技術の向上及び会員の品位の保持を図り、もって我が国の科学技術の向上に寄与するとともに地域に貢献することを目的とする。」とありますが、まさに貴会員の皆様が常に自己研鑽に励まれ、あらゆる分野で技術力を支える中核として活躍し、地域の発展・活性化に貢献されてきたことに心から敬意を表します。

さて、令和7年は、西海橋開通70年をはじめ、長崎空港開港50年、女神大橋開通20年など、様々な節目の年となりました。また、三菱長崎造船所ジャイアント・カンチレバークレーンをはじめとする県内8施設が「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として世界文化遺産に登録されて10周年を迎えるなど、県内には当時の最先端の技術で整備されたインフラが数多く存在しております。

一方で、離島・半島などの条件不利地域が県土の7割を占め、土砂災害警戒区域の箇所数が全国で2番目に多く、地形的に厳しい状況である中、高規格道路の約3割がミッシングリンクとして残っており、土砂災害の要対策箇所の多くが整備未着手、台風から港を守るための防波堤強化が道半ばであるなど、まだまだ整備が必要なインフラが数多くあり、本県にとって大きな課題となっております。

このため、令和8年度から始まる「第1次国土強靱化実施中期計画」の予算などを最大限活用し、今後も継続して、インフラ整備を鋭意進めてまいりますので、貴会、そして会員の皆様方におかれましては、卓越した技術力を存分に発揮いただき、引き続きお力添えいただきますようお願いいたします。

結びに、貴会が末永く発展されますよう祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

祝 辞

長崎大学執行役員 総合生産科学域長 き むら まさなり 木村 正成



長崎県技術士会が創立50周年を迎えられましたこと、心より厚くお慶び申し上げます。半世紀にわたり技術士の使命である「高度な専門知と倫理に基づく社会貢献」を体現し、地域の発展に尽くしてこられた貴会の歩みに深甚なる敬意を表します。

科学技術は人類の進歩の礎であると同時に、社会の信頼と倫理の上にこそ真価を発揮するものです。技術を単なる経済活動の手段とせず、公共の福祉に資する「知の営み」として位置づけ、次代の人材育成と地域課題の解決に結びつけてこられた貴会の姿勢は、まさに現代の科学技術者教育が目指す理想像にほかなりません。

長崎大学は、プラネタリーヘルス「地球の健康」を理念に掲げ、地域に根ざし、かつ世界に開かれた知の拠点として、教育・研究・社会連携の三位一体による人材育成を推進しております。その中で、長崎県技術士会の皆様には、技術者倫理教育や外部評価へのご協力、産業界との協働事業など、多方面にわたりご支援を賜っております。こうした協働は、実社会の課題に学び、知を循環させる「実践知の大学」の理念を具現化するものであり、改めましてここに厚く御礼申し上げます。

今日、世界はカーボンニュートラル、デジタル変革、レジリエンス強化など多層的課題に直面しています。こうした変革期にあって、科学技術を人と社会の幸福に結びつけるためには、学理の深化とともに、俯瞰力・倫理観・協働の精神を備えた技術者の存在が不可欠です。長崎県技術士会が築いてこられた知のネットワークと実践の蓄積は、地域社会の持続的発展にとってかけがえのない財産であり、次の半世紀に向けた新たな知的共創の礎となることでしょう。先般、高市内閣におきましては、「危機管理投資」を成長戦略の中核に据え、半導体、造船、AI、量子、バイオ、宇宙、サイバーセキュリティなどの戦略技術分野を国家的に支援する方針が示されました。加えて、国土強靱化、防災・減災、エネルギー・食料安全保障、デジタル基盤の強化に向けた官民連携の先行投資が進められています。これらの政策は、大学・技術士会・産業界が一体となり、「知を社会に還元する」ための新たな契機であるといえます。長崎の地においても、半導体や造船をはじめとする製造業の再興、AIによる地域課題の解決、防災・エネルギー分野での社会実装など、技術士の知見が果たす役割は一層重要です。今後とも、長崎大学と長崎県技術士会が連携し、「知の共創拠点」として新たな産学官協働の礎を共に築いてまいりたいと存じます。

最後になりましたが、創立以来のご尽力に深く敬意を表し、長崎県技術士会のさらなるご発展と会員の皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。

祝 辞

長崎地盤研究会会長 ジャン イジン 蔣 宇静

長崎大学大学院工学研究科教授



このたび、長崎県技術士会が創立50周年をお迎えになるにあたり、長崎地盤研究会を代表して、心よりお祝い申し上げます。半世紀にわたり、長崎県の産業発展と社会基盤の整備に多大な貢献をされてきたことに、深く敬意を表します。

長崎県技術士会は創立以来、単に技術の向上を図るだけでなく、若手技術者の育成や技術相談を通じた地域産業支援、さらには防災・減災への取り組みなど、県民の安全と安心を支える重要な役割を大いに果たされております。この50年の歩みはまさに長崎県の近代化とともにあり、その功績は計り知れません。

長崎地盤研究会は平成8年4月に発足以来、「内から内、内から外へ、外から内へ」の情報交換を目指し、地盤に関わる技術者や研究者、さらには一般市民の方々も交えたオープンな学びの場を提供してきました。主な活動である「ジオラボ」は、2か月に1度の頻度で開催する勉強会として、これまで140回以上継続し、地盤にまつわる専門的な話題から、皆さんが高い関心を持たれる事象をテーマにした幅広い内容を取り上げてきました。

ご承知のように、長崎県は、地盤に関して特異な課題を数多く抱えています。県北では「北松型地すべり」があり、県南の長崎市を中心とした地域では、昭和57年の長崎大水害で顕在化した土石流や斜面崩壊の危険性が潜在し、雲仙普賢岳の噴火災害の記憶も生々しく残っています。このような複雑な地盤環境において、地域に根差した技術団体としての役割は極めて重要と認識しております。

長崎地盤研究会と長崎県技術士会との協力関係は、平成20年4月に貴会を後援団体としてお願いして以来、実に17年近くにわたって続いております。特に、平成23年からは、山口和登会長に当研究会の副会長をお引き受けいただくなど、人的な交流も深めてきました。この連携により、貴会会員の皆様には研究会への参加や講師としてのご協力を賜り、専門的な知見に基づく貴重なご意見を数多く頂戴することで、研究会の活動内容の質的向上につながっております。また、貴会の持つ人的ネットワークと豊富な経験は、当研究会が取り組む地域課題の解決において、大きな力となっております。

今後は、急速に変化する社会環境や気候変動に対応するため、両組織の連携をさらに強化して参りたい所存です。特に、地盤災害の調査評価・対策検討や、維持管理による強靱な社会基盤づくりに向けた取り組みにおいて、相互の知恵と経験を結集できるものと確信しております。

長崎県技術士会のこれまでのご功績に心から敬意を表すとともに、今後も両会が緊密に連携し、長崎県の安全と発展に貢献し続けることを願い、長崎県技術士会の益々のご発展と会員の皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

創立50周年おめでとうございます

産業基盤維持管理技術研究会代表 なかむら しょうぞう 中村 聖三

長崎大学大学院工学研究科教授



長崎県技術士会が本年、記念すべき創立50周年を迎えられましたことに対し、心からお祝いを申し上げます。

今回祝辞を執筆する機会をいただきましたので、改めて会のホームページを拝見したところ、会報49号に「会の設立と歩み」に関する記事を見つけました。それによると、昭和50年（1975）6月に開催された第1回総会時の会員は「10名弱だったようである」とのことです。先日いただいた令和7年度の名簿には、会員として199名、準会員として10名のお名前がありましたので、発足時から20倍程度になっていることになります。貴会がこのように発展できたのは、その活動を支えてこられた多くの方々のご尽力の賜物であると思います。そのご尽力に対し、改めて敬意を表します。

貴会の会則第2条には、会の目的として、「技術士の使命及び職務に鑑み、技術士業務の進歩並びに技術の向上及び会員の品位の保持を図り、もって我が国の科学技術の向上に寄与するとともに地域に貢献すること」が謳われています。また、第3条には目的達成のため、「技術士業務の普及及び技術士会の啓発」「行政施策に関する協力」「技術に関する調査研究及びその指導」「技術力向上のための研究・講習」などの事業を行うことが規定されています。

発足からの50年、本規定に則った活動が精力的に行われてきたものと拝察いたします。実際、私が代表を務めている産業基盤維持管理技術研究会には後援団体としてご参加いただいていますし、本学工学部社会環境デザイン工学コースに対しては学生への出張講義や外部評価委員会でお世話になっています。一方、私自身の貴会への貢献はこれまで十分であったとは言えません。今回を機に貢献度を高めたいと考えていますので、「技術に関する調査研究」など私でお役に立てることがあれば、遠慮なくご相談いただければ幸いです。

SDGs、DX・GX、カーボンニュートラルなど、社会から求められるものが近年激変しています。その速度も極めて速いものです。技術士の皆様がそれぞれの立場でこれらの課題に取り組まれ、その解決に貢献されることが期待されています。貴会がこれまで同様、そうした会員各位の技術的な交流の場としてさらに発展されること、ならびに会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、私からの祝辞とさせていただきます。

【3】長崎県技術士会創立の経緯と背景

1. はしがき

長崎県技術士会の歴史についての調査は、平成26年(2014)から平成27年(2015)に創立40年の行事の一環として実施し、今まで、長崎県技術士会の機関紙等に、下記が報告されています。

- 1) 平成26年10月10日発行の機関紙APRENだより第47号に大橋義美元監事(当時)「長崎県技術士会の設立と歩み」
- 2) 平成27年4月10日発行の機関紙APRENだより第49号に川村昭宣副会長(当時)「長崎県技術士会の設立と歩み(その2)」
- 3) 平成27年発行の長崎県技術士会名簿兼長崎県技術士会設立40周年記念誌に川村昭宣副会長(当時)「長崎県技術士会の歴史」

今回これらの資料と共に、更に色々調査を進め、長崎県技術士会の50年間の歴史を取りまとめました。

2. 創立の背景

昭和26年(1951)に日本技術士会が発足し、昭和40年(1965)には九州支部も発足しましたが、長崎県内在住の技術士が活動するには、本部のある東京や、支部のある福岡まで行く必要があり、十分な活動が出来ず不便な状況でした。

昭和46年頃より長崎県内在住の太洋技術開発(株)黒瀬正行社長、大栄開発(株)野々下金社長、藤永地建(株)藤永勝之社長の3人と田中武熊氏が中心になって、長崎県内技術士の活躍の場を設けようとして、長崎県技術士会の発足に奔走されました。

昭和50年(1975)6月11日、長崎市の公会堂前の「松楽」にて、第1回の総会が開催されました。令和7年(2025)は長崎県技術士会創立50周年という節目の年ということになります。

3. 創立時期特定等についての調査方法

長崎県技術士会創立時期については、発足時の会員の方の多くが故人となり、調査は難航しましたが、平成13年(2001)6月15日発行の日本技術士会創立50周年記念誌や、月刊技術士の増刊号として発行された45年史、40年史、35年史、30年史等を調査致しました。

長崎県技術士会の名簿は、昭和56年(1981)から平成22年(2010)までの長崎県年鑑に掲載されていて、長崎県立図書館に保存されているので、これを参考とさせていただき、昭和56年の長崎県技術士会の名簿に記載されている会員の方々から、創立当時の事を伺わせていただきました。

まず、長崎県技術士会創立初期に技術士として活躍されていた犬東洋志前会長、永濱伸也元副会長、城石高弥元代表幹事、柏原公二郎元副会長、吉田強技術士に下記について、問い合わせ致しました。

- 1) 長崎県技術士会創立の年月日と創立経緯
- 2) 長崎県技術士会創立時の会長名
- 3) 会長が黒瀬正行氏から田中武熊氏に代わった時期
- 4) 昭和50年(1975)創立時の会員数と会員名
- 5) 昭和56年(1981)の長崎県年鑑の名簿の名称が長崎県技術士会ではなく、財団法人日本技術士会長崎県支部となっている理由
- 6) 昭和61年(1986)からは財団法人日本技術士会九州支部長崎県技術士会に変更された理由
- 7) 昭和56年(1981)の名簿に記載されている会員の技術士合格年度、登録番号、職歴・経歴、生年月日等について

更に、桐原敏元理事、松竹英雄技術士、高木辰治技術士から、長崎県技術士会創立の中心として活躍された黒瀬正行氏、野々下金氏、藤永勝之氏、田中武熊氏の事を教えていただきました。また、筒井光男氏、高村清氏、平井久義氏、宮村重範氏、松竹英雄氏、大橋義美氏から、長崎県技術士会創立当時に合格されていた技術士の方々の情報をいただきました。皆様のご協力に深く感謝し、御礼申し上げます。

4. 創立時期及び初代会長特定についての調査結果

上記の調査の結果を以下に示しますが、創立時の状況詳細については、よく覚えていない方がほとんどでした。その中で柏原公二郎元副会長は、数々の貴重なメモを保存しておられ、多くのことが明らかになりました。

1) 柏原公二郎元副会長の話（平成27年2月7日）

佐世保イオンの喫茶室で、柏原公二郎氏から長崎県発足当時の状況についてのお話を伺いました。同氏は手帳を持参して「昭和50年(1975)6月11日、長崎市の公会堂前の「松楽」にて、第1回の総会が開催された。」「その時の参加者は10人前後であった。」「創立時の会長は黒瀬さんだった。」「昭和50年頃の活動詳細はよく覚えていないが、会を引っばっていたのは黒瀬正行さん、藤永勝之さん、野々下金さん、田中武熊さんの4人だった。」と話されました。非常に信ぴょう性が高い内容でありました。

2) 永濱伸也元副会長の話（平成27年1月28日）

手紙で質問事項を連絡の上、電話で下記を伺いました。「黒瀬正行さん、藤永勝之さん、野々下金さんが中心となって長崎県技術士会を立ち上げた。」「昭和52年に合格し、53年に入会したが、創立時の詳細は分からない。初代の会長は黒瀬正行氏だったと思うが、昭和50年頃の活動の詳細は分からない。」「当時の上司の柏原公二郎さんは、昭和49年の合格で既に入会されていて、メモも良くとっておられた方なので、色々ご存知だと思う。」

3) 城石高弥元代表幹事の話（平成27年2月2日）

事前に手紙で質問事項を連絡の上、電話で下記を伺いました。「昭和35年に合格したが、その時は長崎県外に居り、昭和52年に長崎県技術士会に入会した。その時の会長は黒瀬正行さんだった。」「黒瀬正行さん、野々下金さん、藤永勝之さんが中心となって活動していて、総ての中心は黒瀬さんだった。1か月に1回位集まって打ち合わせしていた。」

4) 大橋義美元代表幹事による調査とその記述

機関紙 APREN 第47号に下記を記述されています。

「昭和50年頃には数名の技術士の方々が活動され会を立ち上げられたものと推察し、昭和50年(1975)を長崎県技術士会の創立年としてはとえます。」

「また、初代会長は黒瀬正行氏（推察）、続いて野々下金氏（推察）、昭和56年に田中武熊氏、平成5年に福岡辰義氏、平成7年に犬東洋志氏、平成23年に山口和登氏が就任されています。」

5) 田中武熊元会長による「技術士だより」の記述

九州支部の「技術士だより」平成2年(1990) 秋季号(11月発行)第6号の「声の広場 地区活性化だより-5-長崎地区」に「長崎県の技術士会について」と題して、次の様に記述されています。

「昭和46年4月に太洋技術開発（株）の黒瀬社長、大栄開発（株）野々下金社長、藤永地建（株）藤永勝之社長の3人で、長崎県の技術士会の組織についての話し合いが進められたようだ。最初の会合は昭和46年3月だったと記憶している。集まった技術士の先生は5～6人だった様に思いますが、この会合で会長、副会長を決めて、今後の発展を図ろうということで、会長を田中武熊、副会長は藤永勝之氏ということに決められた。当時は数名の会合であったことから役員の決定も簡単なものでした。」

この記事では初代会長は田中武熊氏となっていますが、他の3人の方のお話と食い違っています。田中武熊氏は既に故人となつて居られ、確認の方法が無いので、直接お話を伺う事が出来た3人の方のお話よりまとめる事に致しました。

6) 創立時期の特定について

上記1) から5) より、昭和46年(1971)頃から長崎県技術士会の創立の話合いがもたれ、関係者の会合がスタートし、昭和50年(1975)に正式に長崎県技術士会創立されたと特定致しました。

5. 会の名称と代表者の名称について

長崎県技術士会は任意団体であり、会の名称も長崎県技術士会が正確な名称ですが、創立初期の段階では種々名称が使用されております。

昭和56年(1981)から昭和60年(1985)発行の名簿では、「社団法人日本技術士会 長崎県支部」となっており、代表者の名称も支部長となっております。

昭和61年(1986)以後の平成11年(2009)までの名簿では、「(社) 日本技術士会九州支部 長崎県技術士会」となっており、代表者の名称も会長に変更されております。

平成23年(2009)以降の名簿からは長崎県技術士会となっております。

本会は任意団体であり、九州支部の正式の下部組織ではないので、「社団法人日本技術士会 長崎県支部」や「(社) 日本技術士会九州支部 長崎県技術士会」という名称は不正確な表現ですが、実質的には九州支部の下部組織の様な活動もしておりましたので、この様な表現を使用していたものと思われます。

混乱を招きますので、ここでは、本会の名称は長崎県技術士会とし、代表者も会長として統一して記述致します。

6. 初代会長と2代目会長について

柏原公二郎元副会長及び永濱伸也元副会長は、初代の会長は黒瀬正行氏であったと話しておられます。また大橋義美元代表幹事は「初代会長は黒瀬正行氏(推察)、続いて野々下金氏(推察)、昭和56年(1981)に田中武熊氏、平成5年(1993)に福岡辰義氏、平成7年(1995)に犬束洋志氏、平成23年(2011)に山口和登氏が就任されています。」と記述しておられます。

田中武熊氏は「初代会長が田中武熊氏だった」と記述していられますが、柏原公二郎元副会長、永濱伸也元副会長から直接伺った内容から、初代会長は黒瀬正行氏と推定決定いたしました。

2代目会長についてですが、野々下金氏は九州支部の支部長に就任しておられますが、長崎県技術士会の会長就任の情報はないので、2代目の会長は田中武熊氏と推定しました。昭和52年(1977)に城石高弥氏が入会した時の会長は黒瀬氏だったと伺っており、昭和56年(1981)の名簿で会長は田中武熊氏となっておりますので、この間の昭和54年(1979)に田中武熊氏に交代されたと特定致しました。

7. 創立時の会員

昭和56年(1981)版名簿の会員(敬称略)は、田中武熊会長、黒瀬正行、城石高弥、野々下金、藤永勝之、高村清、吉田強、五反田進、柏原公二郎、犬束洋志、野村幸平、永濱伸也、芳賀三千億、鯨坂卓之、岡崎勝、平井久義、渡辺悟、緒方勇、杉本徳博の19名です。

昭和50年(1975)以前の合格者は9名ですので、第1回総会時の会員は黒瀬正行氏、野々下金氏、藤永勝之氏、田中武熊氏、柏原公二郎氏といった方々で10名前後だったと考えられます。昭和56年版名簿記載の会員で、現在連絡先等確認出来ているのは犬束洋志氏、永濱伸也氏のお二人のみです。令和7年(2025)版の名簿掲載されている吉田強氏は、残念ながらご逝去されました。

【４】日本技術士会本部（現在統括本部）及び

九州支部（現在九州本部）と長崎県技術士会の関係

（文責：川村 昭宣）

1. 日本技術士会発足経緯と変遷、技術士制度の変遷 （日本技術士会創立 50 周年記念誌から抜粋）	…… P 1 5
2. 九州支部発足経緯	…… P 1 6
3. 九州地方技術士センター	…… P 1 6
4. 九州支部・九州技術士センターと長崎県技術士会の関係	…… P 1 7
5. 長崎地区幹事、長崎地区代表幹事	…… P 1 7
6. 九州本部、長崎県支部と長崎県技術士会の関係	…… P 1 7

表 1 長崎県技術士会と日本技術士会九州支部との関係、名称の変遷

…… P 1 9

【４】日本技術士会本部（現在統括本部）及び

九州支部（現在九州本部）と長崎県技術士会の関係

１．日本技術士会発足経緯と変遷、技術士制度の変遷

（日本技術士会創立５０周年記念誌から抜粋）

昭和２６年(1951)６月１４日に日本工業クラブで創立総会開催、正会員認定基準を定めました。昭和２６年度末の日本技術士会の会員数は総計２６０名（機械６７名、建設４６名、鉱山・金属２３名、電気３０名、一般産業１２名、農林３名、特別会員５３名）でした。

昭和２６年(1951)日本技術士会創立時には現在の様な試験はなく、それまでの(旧)日本技術士会会員は、無試験の資格審査のみで合格していましたが、その時の会員は、官庁の幹部、大学教授、大手企業幹部、旧軍の将官・佐官等の幹部、国会議員等、多彩な顔ぶれであった様です。

昭和３２年(1957)５月２０日に技術士法が制定され、昭和３３年(1958)第１回技術士試験が行われました。この時の試験では参考資料などの持ち込み自由無制限で、その時の受験者１，４６７人に対して合格者は９９１人、登録者は３４５名です。受験者に対する合格率は６７．７％という高率でした。

昭和３３年(1958)以後は旧会員も全員が技術士試験を受験し、合格者のみが新しい日本技術士会の会員となりました。当時の日本技術士会会長の井上匡四郎氏（元鉄道大臣）が受験しているのを目撃した方も居られます。

その合格者により昭和３３年(1958)１１月８日に技術士法に基づく、新しい日本技術士会が発足致しました。

昭和３４年(1959)２月２日に(旧)社団法人日本技術士会は解散し、同年３月１０日に(新)社団法人日本技術士会の創立が認可されました。

昭和３２年(1957)には旧会員数約６００名でしたが、昭和３３年(1958)(新)日本技術士会発足時の会員数は約２５０名となりました。

その後、昭和４０年(1965)まで合格率は毎年総て５０％以上です。その後毎年合格率は低下しましたが、昭和５０年(1975)までは２０％以上でした。昭和５１年(1976)から昭和６０年(1985)までの合格率は１８％～２０％とほぼ一定でした。この間の長崎県の合格者が毎年何人であったのかは、残念ながら不明です。

年会費は当初 24,000 円でしたが、平成１５年(2003)から 22,000 円、平成１８年(2006)から 20,000 円となっております。

その後、平成２３年(2011)に日本技術士会は公益社団法人に移行し、それまでの本部は統括本部と改称されました。

2. 九州支部発足経緯

九州でも昭和39年(1964)10月頃、長崎県在住の黒瀬正行氏(初代長崎県技術士会会長)が中心となって支部結成の動きが始まり、昭和40年(1965)5月29日の日本技術士会第7回総会で、九州支部創立が承認され、同年6月18日福岡市朝日会館で支部創立総会が開催されました。

九州支部は、九州地区に事務所・勤務先・住居を有する、社団法人日本技術士の会員及び準会員のみによって構成され、創立時の会員は25名です。その後昭和50年(1975)69名、平成7年(1995)259名、平成14年(2002)749名と増加しております。

日本技術士会を退会すると九州支部も自動的に退会となります。

平成23年(2011)日本技術士会は公益社団法人となり、同年7月九州支部は九州本部と改名されています。

3. 九州地方技術士センター

九州支部創立に先立って、昭和40年(1965)5月20日福岡市博多ステーションビルで、九州地方技術士センターの創立総会が開催されました。44名で発足し、平成7年(1995)1,569名と増加し九州支部会員より多い状態でしたが、平成14年(2002)年571名となり、九州支部会員数を下回っております。当初の会費6,000円を8,000円に増額されたことが影響していると思われます。

九州地方技術士センターは沖縄、山口を含む九州地区に事務所、勤務先、住所を有し、技術士第2次試験合格者(正員)、第1次試験合格者(準会員)、賛同する個人又は法人(賛助会員)となっており、日本技術士会の会員以外にも幅広く門戸を開いておりました。

九州地方技術士センターと九州支部は一体となって活動しており、九州地区ではこの様に、社団法人日本技術士会の会員と、日本技術士会に入会していない九州在住の技術士が一体となって活動を開始しておりました。

現在、長崎県には、長崎県技術士会と日本技術士会長崎県支部の2つがあり、一体となって活動しておりますが、これと同様の関係にあったと考えられます。

また、昭和40年(1965)創立の「九州地方技術士センター」は、平成10年(1998)に「九州技術士センター」と名称変更されており、名称を原則「九州技術士センター」と表示しております。

なお、九州技術士センターは平成19年(2007)に廃止され、(社)日本技術士会九州支部に一本化されました。日本技術士会の会員のみによる会となった事になります。

4. 九州支部・九州技術士センターと長崎県技術士会の関係

長崎県技術士会は任意団体であり、九州支部との直接的な関係はありませんが、九州支部からの要請で、長崎県在住の技術士が九州支部及び九州技術士センターの役員として参画し、その役員から九州支部の活動状況などは長崎県技術士会に報告されておりました。

平成26年(2014)長崎県支部創立までは、長崎県技術士代表として長崎地区代表幹事及び長崎地区幹事を選任し、九州支部との連携をしておりました。

また九州技術士センターにも、長崎県技術士の代表として理事を選任し、活動しておりました。

実質的には、九州支部の下部組織的な役割を長崎県技術士会が担当していたことになります。添付の表1にこの関係を示しております。

5. 長崎地区幹事、長崎地区代表幹事

長崎県から九州支部に参画していた技術士は長崎地区幹事と称しており、現在の長崎県支部幹事に相当します。また代表者を長崎地区代表幹事と称しており、これは現在の長崎県支部長に相当しております。

長崎県技術士会は、九州支部と密接に連携しながら活動してきており、日本技術士会主催の技術士全国大会への参加や、長崎での九州地区産官学合同セミナーなどの開催もして参りました。実質的には九州支部の長崎県支部的な動きもしていた事になります。

代表幹事で確認出来ているのは平成3年(1991)から平成26年(2014)迄で、田中武熊氏、福岡辰義氏、城石高弥氏、永濱伸也氏、山口和登氏、大橋義美氏、毎熊元氏が就任しております。

長崎地区幹事には平成3年から平成26年に、藤永勝之氏、永濱伸也氏、平原宏志氏、山口和登氏、桐原敏氏、山口昭光氏が就任しております。

6. 九州本部、長崎県支部と長崎県技術士会の関係（添付表1参照）

平成26年(2014)に九州本部の下部組織として長崎県支部が発足し、長崎県地区幹事・長崎地区代表幹事という名称は廃止されております。

長崎県技術士会の役員が立候補し、投票で信任されて長崎県支部幹事となっております。長崎県支部幹事は全員長崎県技術士会の役員を兼務しており、長崎県支部と長崎県技術士会は一体となって活動しております。

長崎県技術士会と日本技術士会や九州支部との関係を添付の表1に示しております。

長崎県支部が創立されてからは、九州本部や統括本部との折衝はすべて長崎県支部が担当しておりますが、長崎県支部創立以前は長崎地区代表幹事や長崎地区幹事を通じて、九州地区や本部の情報を入手し、長崎県技術士会が窓口とな

って日本技術士会と対応しております。

九州支部発行季刊誌「技術士だより」にも長崎県技術士会会員が毎回の様に投稿し、九州支部を支えています。

今後も、長崎県技術士会は長崎県支部をバックアップし、日本技術士会の発展に寄与して参ります

表 1 長崎県技術士会と日本技術士会九州支部との関係、名称の変遷

名 称		西暦	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
		和暦	S26	S27	S28	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	S36	S37	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61
日本技術士会	社団法人 日本技術士会		S26創立 (社) 日本技術士会																																			
	公益社団法人 日本技術士会																																					
日本九州支部 日本技術士会	九州支部 (社) 日本技術士会の下部組織																																					
	九州本部 (公) 日本技術士会の下部組織																																					
九州技術士 センター	九州地方技術士センター																																					
	九州技術士センター																																					
長崎県技術士会	九州支部長崎県支部																																					
	九州支部長崎県技術士会																																					
	長崎県技術士会																																					
九州本部長崎県支部	九州支部・長崎地区																																					
	九州技術士センター長崎地区																																					
	九州本部長崎県支部																																					

1987 S62	1988 S63	1989 H1	1990 H2	1991 H3	1992 H4	1993 H5	1994 H6	1995 H7	1996 H8	1997 H9	1998 H10	1999 H11	2000 H12	2001 H13	2002 H14	2003 H15	2004 H16	2005 H17	2006 H18	2007 H19	2008 H20	2009 H21	2010 H22	2011 H23	2012 H24	2013 H25	2014 H26	2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 R1	2020 R2	2021 R3	2022 R4	2023 R5	2024 R6	2025 R7	2026 R8	備 考	
S26年創立 (社)日本技術士会																																				S26年創立					
																										H23年名称変更 (公)日本技術士会										公益法人改革に伴い、公益認定の取得及び登記完了によりH23年に名称変更。					
S40年創立 日本技術士会九州支部																																				日本技術士会入会者のみの会 S40年創立					
																										H23年名称変更 日本技術士会九州本部										公益法人改革に伴い、公益認定の取得及び登記完了によりH23年に名称変更					
九州地方技術士センター																																				九州在住技術士の会 S40年創立					
																										H10年名称変更 九州技術士センター										H10年に名称変更 H19年廃止、九州本部に一本化					
																																				長崎県内在住技術士の会 S50年創立 九州支部長崎県支部と称					
S61年呼称変更 九州支部長崎県技術士会																																				S61年呼称変更 九州支部長崎県技術士会と称					
																										H23年呼称変更 長崎県技術士会										H23年呼称変更 長崎県技術士会と称					
H3年 九州支部・長崎地区																																				H3年以降長崎地区から役員を派遣し活動、H26廃止 長崎県技術士会より九州支部に代表幹事・幹事派遣、現在の長崎県支部相当					
H3年 九州技術士センター長崎地区 H19年廃止																																				H3年以降長崎地区から役員を派遣し活動、H19廃止 長崎県技術士会より九州技術センターに理事派遣					
																										H26年名発足 九州本部長崎県支部										日本技術士会入会者の長崎県内在住技術士の会 H26年発足					

【5】歴代役員一覧と草創期に活躍された方々

(文責：川村 昭宣)

1. 会 長		P 2 2
2. 長崎地区代表幹事		P 2 2
3. 副会長		P 2 2
4. 理 事		P 2 2
表 2 長崎県技術士会役員年表		P 2 3
表 3 日本技術士会本部及び九州支部役員		P 2 5
5. 監 事		P 2 7
6. 顧 問		P 2 7
7. 本部役員、九州支部役員、九州技術士センター役員		P 2 7
8. 創立時に活躍された方々		P 2 7
1) 黒瀬 正行氏		P 2 7
2) 野々下 金氏		P 2 9
3) 藤永 勝之氏		P 2 9
4) 田中 武熊氏		P 2 9
9. 草創期に活躍された方々		P 2 9
1) 城石 高弥氏		P 2 9
2) 永濱 伸也氏		P 2 9
3) 柏原 公二郎氏		P 3 0
4) 芳賀 三千億氏		P 3 0
5) 高村 清氏		P 3 0
6) 犬束 洋志氏		P 3 1
7) 福岡 辰義氏		P 3 1
8) 野村 幸平氏		P 3 1
9) 宮村 重範氏		P 3 1
10) 吉田 強氏		P 3 1
11) 大橋 義美氏		P 3 1

【5】歴代役員一覧と草創期に活躍された方々

長崎県技術士会の役員は、会長、副会長、理事、監事、顧問及び日本技術士会九州支部の幹事・長崎地区代表幹事、九州技術士センターの理事からなっております。一部推測のところがありますが、一覧を表2(P23・P24)に示しております。

1. 会 長

現在判明している最も古い名簿は昭和56年(1981)版で、その名簿では、田中武熊氏が会長(当時は支部長)となっておりますが、「創立時の会長は黒瀬正行氏だった」「昭和52年(1977)の会長は黒瀬正行氏だった」との情報がありますので、前述の様に長崎県技術士会が創立された昭和50年(1975)の初代会長も黒瀬正行氏と推測いたしました。会長が黒瀬氏から田中氏に変更になった年は不明です。

初代の会長は推察ですが黒瀬正行氏、その後、田中武熊氏、福岡辰義氏、犬東洋志氏、山口和登氏へと引き継がれております。

2. 長崎地区代表幹事

日本技術士会九州支部の長崎地区代表を代表幹事と称しておりました。現在の長崎県支部支部長に相当します。

平成3年(1991)以後、田中武熊氏、福岡辰義氏、城石高弥氏、永濱伸也氏、山口和登氏、大橋義美氏、毎熊元氏が務められておりました。(平成3年以前は不明です。)

平成26年(2014)日本技術士会長崎県支部発足に伴い、毎熊元氏が初代長崎県支部長に就任し、長崎地区代表幹事という名称・役職も廃止になりました。

3. 副 会 長

初代は藤永勝之氏、その後柏原公二郎氏、永濱伸也氏、山口和登氏、平原宏志氏、山口和登氏(再任)、毎熊元氏、川村昭宣、山口昭光氏、石瀬史朗氏と続いております。平成26年(2014)までは1人でしたが、平成26年に長崎県支部が創立されて以降、長崎県支部長は長崎県技術士会の副会長を務め、2人制となっております。

4. 理 事 (敬称略)

平成3年(1991)以後の長崎県技術士会の理事は(それ以前の理事の氏名は不明です。)、芳賀三千億、柏原公二郎、城石高弥、山口和登、永濱伸也、大橋義美、永田至孝、川村昭宣、松永光司、小松和彦、西村博宗、桐原敏、吉田強、久原俊之、清水正明、松尾稔、毎熊元、園田直志、松本守、山口昭光の各氏となっております。

平成26年(2014)に長崎県支部が創立されて以降、理事は原則長崎県支部の幹事と兼務となっており、氏名は省略致します。

表 2 長崎県技術士会役員年表

役 職	西暦	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
氏 名	和暦	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12
会長 & 顧問		創立																									
黒瀬 正行																											
田中 武熊																											
福岡 辰義																											
犬束 洋志																											
山口 和登																											
顧問 & 副会長																											
野々下 金																											
藤永 勝之																											
岡林 隆敏																											
副会長																											
柏原公二郎																											
永濱 伸也																											
平原 宏志																											
毎熊 元																											
川村 昭宣																											
山口 昭光																											
石瀬 史朗																											
理事・監事																											
芳賀三千億																											
松竹 英雄																											
城石 高弥																											
大橋 義美																											
永田 至孝																											
本田 圭助																											
松永 光司																											
桐原 敏																											
小松 和彦																											
西村 博崇																											
吉田 強																											
久原 俊之																											
松尾 稔																											
清水 正明																											
清水 富夫																											
園田 直志																											
松本 守																											
兒玉 英治																											
折田 定良																											
横山 知充																											
久原 正也																											
有吉 正敏																											
中村康一郎																											
安武 昭典																											
浦瀬 俊郎																											
田口美菜子																											
田嶋 博文																											
安井 広宣																											
山本 奉彦																											

【 凡 例 】

→ 会長

→ 顧問

→ 代表幹事

→ 副会長

→ 支部長

→ 理事

→ 監事

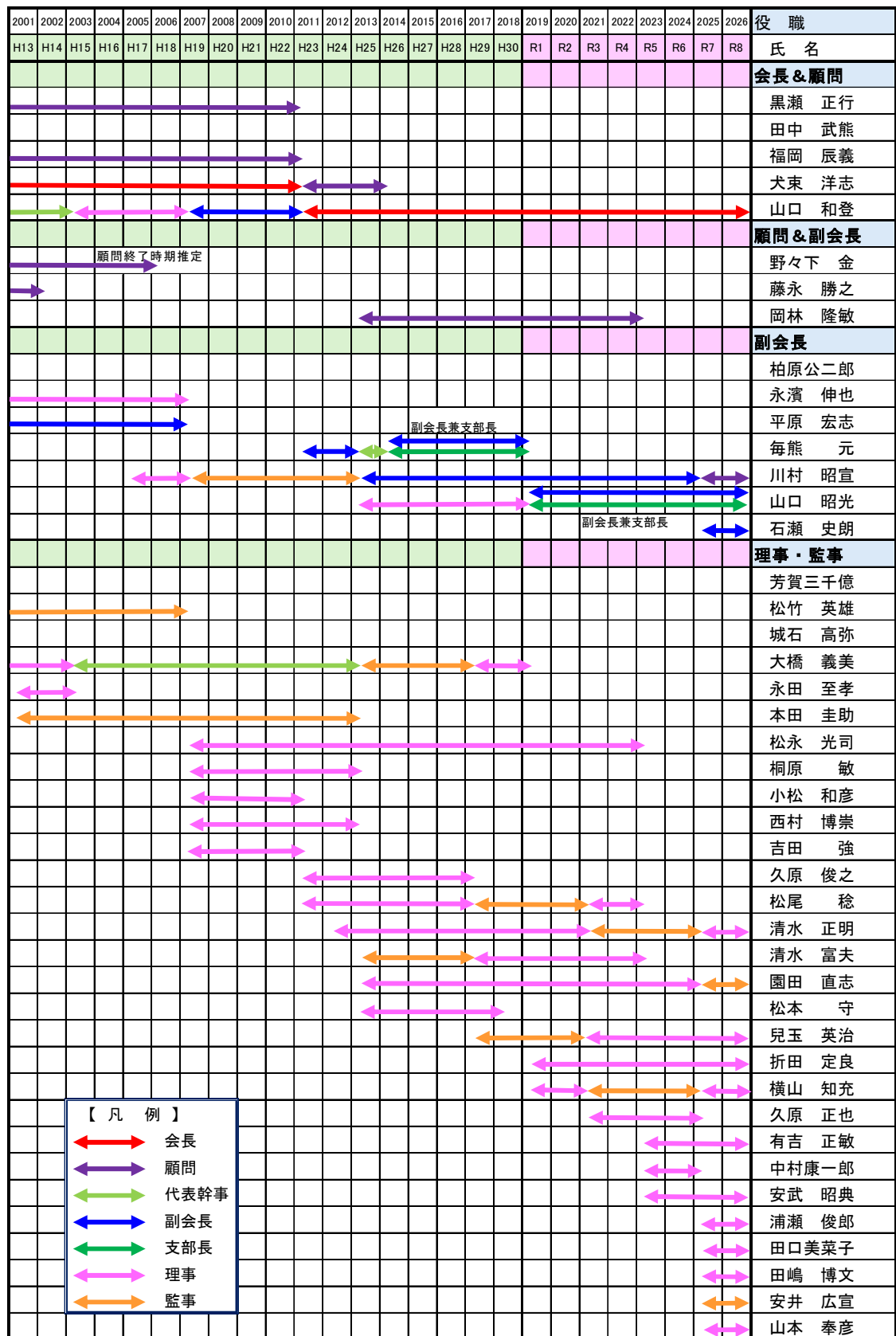


表3 日本技術士会本部及び九州支部役員

役 職	西暦	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
氏 名	和暦	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12
本部役員		【昭和26年発足、現在統括本部】																									
黒瀬 正行																											
九州支部役員		【昭和40年発足、現在九州本部】																									
黒瀬 正行																											
野々下 金																											
藤永 勝之																											
大橋 義美																											
長崎地区代表幹事		【平成26年に廃止】																									
田中 武熊																											
福岡 辰義																											
城石 高弥																											
永濱 伸也																											
山口 和登																											
大橋 義美																											
毎熊 元																											
長崎地区幹事		【平成26年に廃止】																									
藤永 勝之																											
永濱 伸也																											
平原 宏志																											
山口 和登																											
桐原 敏																											
山口 昭光																											
九州技術士センター理事		【昭和40年発足、平成19年に廃止】																									
芳賀三千億																											
福岡 辰義																											
柏原公二郎																											
大橋 義美																											
永田 至孝																											
山口 和登																											
永濱 伸也																											
川村 昭宣																											
長崎県支部支部長		【平成26年発足、従来の長崎地区代表幹事】																									
毎熊 元																											
山口 昭光																											
長崎県支部幹事		【平成26年発足、従来の長崎地区幹事】																									
長崎県技術士会役員とほぼ同じ																											

【 凡 例 】

本部副会長

九州支部支部長

九州支部副支部長

顧問

代表幹事

長崎支部長

理事

幹事

2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	役 職
H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	氏 名
																										本部役員
																										黒瀬 正行
																										九州支部役員
																										黒瀬 正行
																										野々下 金
																										藤永 勝之
																										大橋 義美
																										長崎地区代表幹事
																										田中 武熊
																										福岡 辰義
																										城石 高弥
																										永濱 伸也
																										山口 和登
																										大橋 義美
																										毎熊 元
																										長崎地区幹事
																										藤永 勝之
																										永濱 伸也
																										平原 宏志
																										山口 和登
																										桐原 敏
																										山口 昭光
																										九州技術士 センター理事
																										芳賀三千億
																										福岡 辰義
																										柏原公二郎
																										大橋 義美
																										永田 至孝
																										山口 和登
																										永濱 伸也
																										川村 昭宣
																										長崎県支部支部長
																										毎熊 元
																										山口 昭光
																										長崎県支部幹事
																										長崎県技術士会役員とほぼ同じ

5. 監 事

平成6年(1994)以降平成26年(2014)まで監事は、山口和登氏、松竹英雄氏、本田圭助氏、川村昭宣、大橋義美氏、清水富夫氏となっています。

平成26年(2014)以降、監事は2人制であり、原則として監事は2期(4年)で交代し、長崎県支部の会計幹事を兼務しております。氏名は省略いたします。

6. 顧 問

本会活動の中心であった黒瀬正行氏、及び野々下金氏が初期から長く顧問として本会の活動を支え、その後、藤永勝之氏、及び第3代会長の福岡辰義氏、第4代会長の犬束洋志氏、平成25年(2013)から令和5年(2023)まで長崎大学名誉教授の岡林隆敏氏が務め、令和7年(2025)からは川村昭宣が務めております。

7. 本部役員、九州支部役員、九州技術士センター役員 (P25・P26の表3参照)

黒瀬正行氏は日本技術士会本部の理事・副会長を務め、九州支部支部長も歴任し、その後九州支部の顧問を務めておりました。

野々下金氏は九州支部の理事・副支部長・支部長を歴任し、その後顧問を務めておりました。大橋義美氏は九州支部の理事・副支部長を務めておりました。(九州支部は平成23年(2011)九州本部と改称されています。)

九州支部の長崎地区代表幹事を田中武熊氏、福岡辰義氏、城石高弥氏、永濱伸也氏、山口和登氏、大橋義美氏、毎熊元氏が務めておりました。(現在の長崎県支部支部長に相当します。)

また、長崎地区幹事を藤永勝之氏、永濱伸也氏、平原宏志氏、山口和登氏、桐原敏氏、山口昭光氏が務めておりました。(現在の長崎県支部幹事に相当します。)

九州技術士センターの理事を芳賀三千億氏、福岡辰義氏、柏原公二郎氏、大橋義美氏、永田至孝氏、山口和登氏、永濱伸也氏、川村昭宣が務めておりました。(九州技術士センターは平成19年(2007)に廃止されました。)

8. 創立時に活躍された方々

長崎県技術士会設立時に活躍されたのは、黒瀬正行氏、野々下金氏、藤永勝之氏、田中武熊氏であり、その技術士活動の概略を紹介致します。

1) 黒瀬 正行 氏

大正10年(1921)のお生まれで、神戸製鋼勤務や陸軍少尉、地下工業研究所経営等の後、昭和47年(1972)から平成6年(1994)まで太洋技術開発社長、その後会長をされ、平成25年(2013)にご逝去されました。この間、科学技術庁長官表彰や黄綬褒章等も受章されております。

昭和35年技術士に合格された後、技術士会の発展に力を注がれ、長崎県技術士会会長、九州支部支部長、日本技術士会副会長に就任されるなど、日本技術士

会の発展に大きく寄与されました。

昭和49年(1974)から昭和53年(1978)まで九州支部の幹事、昭和54年(1979)から昭和56年(1981)まで本部の理事、昭和54年(1979)九州支部長、昭和56年・57年(1981・1982)九州支部顧問、昭和58年・59年(1983・1984)九州支部幹事、昭和60年(1985)から平成元年(1989)まで本部の副会長、昭和60年(1985)から平成3年(1991)まで九州支部の顧問を務めておりました。

雑誌土木施工43巻2002年11月号「この人に聞きたい第26回黒瀬正行(元日本技術士会副会長)」に詳しい記事が掲載されており、最初の頁をお示しします。

<雑誌土木施工43巻2002年11月号抜粋>

連載 土木施工 2002年11月号

この人に聞きたい 第26回

黒瀬正行

Masayuki KUROSE
太洋技術開発株式会社代表取締役会長、(元)日本技術士会副会長

聞き手
中村正博 工学博士、特別上級技術者(土木学会フォロー)
株式会社アイティーエルオー(NITLO)代表取締役

軍隊でのリンチ、原爆、ソ連での抑留生活…。
人間の極限を見たあの日々。
でも、めげずに、がむしゃらに生きてきた。
だから、学んだこともいっぱいあった。
そんな経験を活かすも殺すも自分次第。

軍隊で集団リンチも体験
若さの勢いで生きていた

中村◎青少年時代は、どんな青年でしたか？ 特に、戦前・戦中・戦後直後の体験を交えながら、お聞かせ下さい。

黒瀬◎私は広島県の出身なのですが、戦後何年か経って自分の父がどんなところで生まれたのかを探しに行ったことがあるんです。すると、岡山県の高梁町というところに父の戸籍がありました。そこには「雑民」という文字がありました。ただ、養子にもらわれた先が「芸能指導」という高梁城の城主の遊芸を指導をする家で、そこでの名字が「黒瀬」だったんです。もともと石井だったようです。私の父は写真屋をやっていたような記憶があります。昭和の初期の写真屋ですので、当時はあまり写真がなかったんです。つまり、こんな地方で新しい技術を仕入れていたということだったようです。その資料のなかに、ドイツ語をよく目にしました。そんな環境が、私とドイツの深い因縁のきっかけだったような気がします。

小学校に入る頃は、私の家庭は、決して豊かではな

かったようです。

その後、昭和8年に広島一中(現広島県立広島第一中学校)に入学したのですが、父が体を壊し、家庭環境が変わってきました。そんなこともあり、私は不良グループに入ってしまった。でも、硬派でした。弱い者いじめをする奴がいると、許せなかった気質がありました。ただ、私が中学4年の時、私を心配した、当時名古屋の神戸製鋼にいた兄から、学校の成績が悪い不良の私に、「愛知一中に移れ」という勧めがあり、試験を受けることとなったのですが、こんな不良はいらないと門前払いを受けてしまったんです(笑)。

その後、まじめに勉強しなかったこともあり、結局、卒業時の成績はビリ(笑)。ですが、卒業する際、名古屋高工を受けに行ったら、トップで合格してしまった(笑)。それから兄の大学進学のためもあり、毎年、名古屋の第8高等学校を受けることになりました。が、学科試験は通るのですが、口頭試験で落ちてしまう。そのうち、3年目に受ける時、8高を受けていることが学校にバレしてしまったんです。当時、官立から官立を受けてはいけなかったんですね。それで、退学させられることになってしまったんです。



2) 野々下 金 氏

野々下金氏は、大正7年(1918)のお生まれで、昭和43年(1968)から平成19年(2007)まで大栄開発(株)の社長、会長を務められ、平成19年(2007)88歳にてご逝去されました。この間、長崎県知事表彰「産業功労(建設)」を受賞されております。

昭和42年(1967)に技術士合格され、昭和54年(1979)から昭和57年(1982)まで九州支部の幹事、昭和58年・59年(1983・1984)に九州支部副支部長、昭和60年・61年(1985・1986)に九州支部支部長、昭和62年(1987)から平成3年(1991)まで九州支部顧問を務められておりました。

3) 藤永 勝之氏

大正3年(1914)のお生まれで、昭和27年(1952)から平成14年(2002)まで藤永建設・藤永地建(株)の社長、会長を務められ、平成14年(2002)87歳にてご逝去されました。この間、黄綬褒章、勲五等瑞宝章も受章されております。

技術士には昭和42年度(1967)合格、昭和60年(1985)から平成3年(1991)まで九州支部幹事、平成5年(1993)まで長崎県技術士会副会長を務められておりました。

4) 田中 武熊 氏

長崎県都市計画課長や長崎県土地開発公社常務理事などを歴任後、太洋技術開発技術顧問として、昭和50年(1975)の長崎県技術士会発足後、黒瀬会長の後任として第2代会長に就任され、平成5年(1993)までの長期間、会長として長崎県技術士会を大きく発展させてこられました。

私(川村昭宣)が合格した平成2年(1990)にも、合格直後に合格祝いの手紙や電話をいただき、入会を勧誘されました。会長であると同時に会計、総務、広報など総ての業務をほとんど1人で担当されておられた様に見え、惜しまれつつ平成5年(1993)にご逝去されました。

9. 草創期に活躍された方々(順不同)

1) 城石 高弥 氏

昭和35年(1960)合格で、長崎県技術士会では、黒瀬正行氏と並んで最も古い合格者です。県外から長崎に移住された昭和52年(1977)に長崎県技術士会に入会され、長崎地区代表幹事や長崎県技術士会の理事、更に長崎地区代表幹事として、草創期の長崎県技術士会の発展に寄与されております。

2) 永濱 伸也 氏

昭和52年(1977)に合格され、直ぐに長崎県技術士会に入会し、副会長や理事を務められ、更に長崎地区代表幹事としてご活躍なされました。現在は北九州市在住で、初期の長崎県技術士会活動をご記憶されている貴重な存在であります。

3) 柏原 公二郎 氏

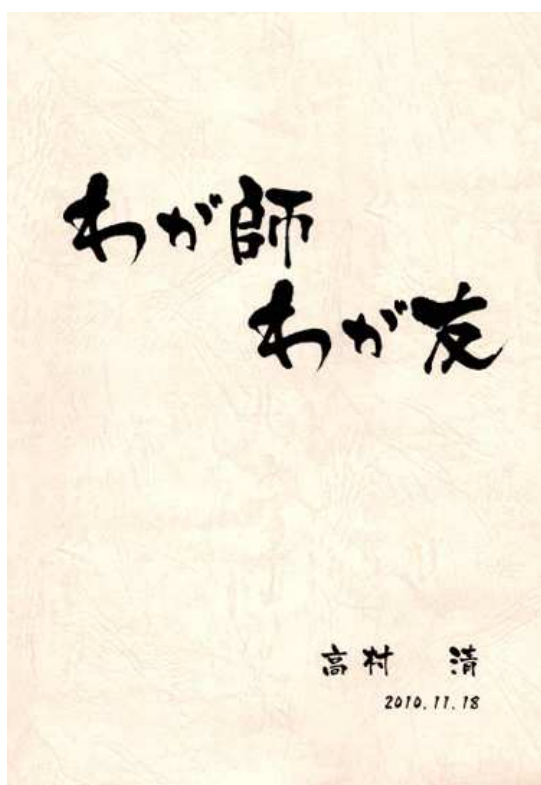
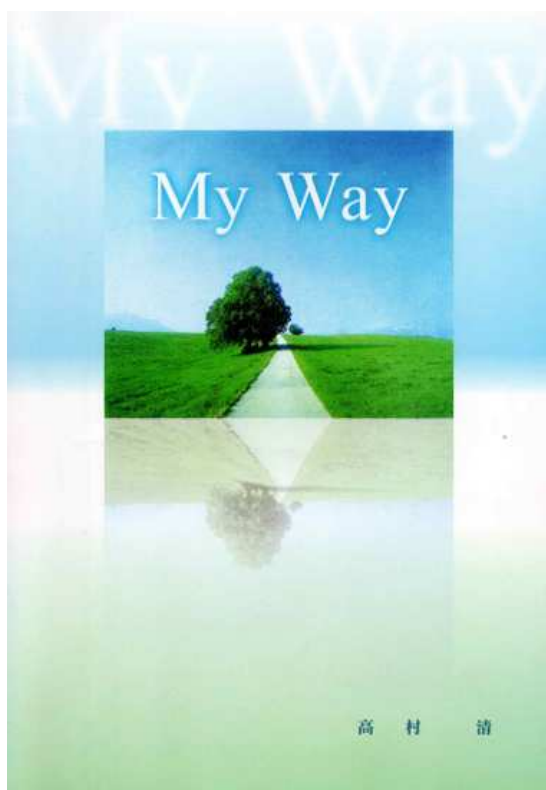
昭和49年(1974)の合格で、長崎県技術士会創立時からの会員で、その後理事や副会長としてご活躍されると共に、専門分野の土質や地下水調査、地滑り調査などで九州支部の委員会にも所属されて幅広くご活躍なされました。創立時期の事について手帳などに詳しくメモを残されておられ、柏原さんのおかげで長崎県技術士会の創立経緯等が色々判明いたしました。

4) 芳賀 三千億 氏

登録番号から昭和52年(1977)又は昭和53年(1978)の合格と推定され、長崎県技術士会初期からの会員であります。生産管理が専門で小集団活動やIE・QCの専門家として九州支部の下部委員会に所属されてご活躍なされました。

5) 高村 清 氏

昭和43年(1968)の合格で、長崎県では昭和35年(1960)合格の黒瀬正行氏・城石高弥氏、昭和42年(1967)合格の藤永勝之氏・野々下金氏に次いで合格年度の古い会員であります。佐世保重工(SSK)の鉄構設計部長、辻産業(株)の常務取締役を務められた後、県外に移られ昭和59年(1984)に一旦退会され、その後長崎に戻られ平成5年に再入会、豊福設計(現在のE-tecs コンサルタント(株))で顧問を務められ、社員への技術教育資料などをまとめて「My Way」という冊子を平成26年(2014)に発行されました。グリーン関数や複素関数等を使ったレベルの高い資料となっています。



6) 犬東 洋志 氏

昭和50年(1975)の合格で恐らく創立時からの会員ではないかと推察されますが、昭和58年(1983)には長崎県外勤務となって退会され、平成元年(1989)に再入会されております。長崎県土木部長や長崎市の助役、長崎県建設技術研究センター(NERC)の役員等を歴任され、三菱重工や大島造船所の顧問も務められておりました。その後、平成8年第4代会長に就任され、平成23年(2011)まで15年間、長崎県技術士会の発展に大きく寄与なされました。この間71歳で長崎大学より工学博士を授与されておられます。

長崎県内の交通圏計画を策定し離島架橋実現に尽力され、これらのご活躍に対して平成24年度(2012)に瑞宝小綬章を受章されておられます。

7) 福岡 辰義 氏

昭和62年(1987)の合格で、長崎県土木部河川開発課長等を歴任され、田中武熊氏が平成5年(1993)に急逝された後、第3代会長に就任し、平成8年(1996)からは顧問として長崎県技術士会を指導されてこられました。また、長崎地区の代表幹事としてもご活躍されました。

8) 野村 幸平 氏

昭和52年(1977)の合格で、大栄開発(株)の専務取締役や社長を歴任され、昭和56年(1981)の名簿に会員として記載されておられ、それ以前に入会されていると思われます。

9) 宮村 重範 氏

昭和54年(1979)の合格で、昭和58年(1983)に入会されています。佐世保重工業(株)の鉄構部長等を務められた後、郷里の熊本の会社に移られコンサルタント会社などでご活躍なされました。昭和63年(1987)2月6日に開催された「大村第2てんしん」での長崎県技術士会62年度総会時の集合写真を提供いただいております。

10) 吉田 強 氏

昭和48年(1973)の合格で、島原コンサルタントの代表取締役等をされ、平成19年(2007)から平成23年(2011)まで理事としてご活躍なされました。

11) 大橋 義美 氏

平成3年(1991)の合格で、同年に入会されています。平成10年(1998)から理事、平成15年(2003)から平成23年(2011)まで長期に渡って長崎地区代表幹事、平成19年(2007)から平成21年(2009)まで九州支部の副支部長を務められ、副支部長退任後も理事として九州支部の発展に尽力され、さらに長崎県支部創立にも大きく貢献されました。長崎県技術士会の会員で、九州支部の支部長や副支部長を務めたのは、黒瀬正行氏、野々下金氏、大橋義美氏の3人だけです。

【6】50年間の各種記録

主要行事、会員数推移、初期合格者、入退会記録等

(文責：川村 昭宣)

1. 50年間の主要行事		P 3 3
2. 会員数の推移		P 3 5
3. 部門別会員数		P 3 6
4. 初期の会員の入退会記録		P 3 7
5. 初期合格者一覧		P 3 8
6. 昭和62年度総会出席者の記念写真		P 3 9
参考文献		P 4 0

【6】50年間の各種記録

主要行事、会員数推移、初期合格者、入退会記録等

1. 50年間の主要行事

表4 長崎県技術士会の50年間の主要出来事

初代会長	黒瀬正行氏(1975年から1979年)
第2代会長	田中武熊氏(1979年から1993年)
第3代会長	福岡辰義氏(1993年から1995年)
第4代会長	犬東洋志氏(1995年から2011年)
第5代会長	山口和登氏(2011年以降)

和暦	西暦	主要行事他
S26	1951	日本技術士会創立
S40	1965	九州支部及び九州技術士センター創立
S50	1975	6月11日 長崎県技術士会創立（九州支部長崎県支部と称す） 初代会長黒瀬正行氏、創立時の会員数10人前後 黒瀬正行氏日本技術士会本部の理事就任
S51	1976	
S52	1977	昭和52年城石氏入会時、会長は黒瀬氏との事
S53	1978	
S54	1979	田中武熊氏第2代会長就任（時期は推定） 野々下金氏九州支部の理事就任、黒瀬正行氏九州支部の支部長就任
S55	1980	（S55年まで名簿不明で、会員数は10人前後で推移と推定
S56	1981	長崎県年鑑に氏名のみの名簿掲載開始（以後毎年掲載）、この年の会員19名 公益社団法人長崎県支部と表示し、代表者は長崎県支部長と表示
S57	1982	
S58	1983	野々下金氏九州支部副支部長就任
S59	1984	
S60	1985	黒瀬正行氏日本技術士会の副会長就任、野々下金氏九州支部の支部長就任
S61	1986	長崎県年鑑に写真付き名簿掲載開始（以後毎年掲載） S61年以後社団法人日本技術士会長崎県技術士会と表示・代表者は会長
S62	1987	野々下金氏九州支部支部長退任し顧問に就任
S63	1988	
H1	1989	黒瀬正行氏日本技術士会の副会長退任、九州支部の顧問就任
H2	1990	
H3	1991	
H4	1992	
H5	1993	7月31日総会、田中会長氏逝去、福岡辰義氏第3代会就任
H6	1994	5月21日総会
H7	1995	5月20日総会、途中で犬東洋志氏第4代会長就任 11月10日長崎厚生年金会館で官公庁職員との合同セミナー
H8	1996	5月31日総会
H9	1997	
H10	1998	6月12日総会
H11	1999	7月30日総会、長崎県技術士会の名簿現存（協賛広告付き） 長崎日独産業交流協会と共同でドイツ環境事業調査の報告会開催
H12	2000	6月2日総会
H13	2001	6月14日総会、長崎県技術士会の名簿現存（協賛広告付き）
H14	2002	6月7日総会、6月21日長崎県技術士会特別技術研修会

和暦	西暦	主要行事他
H15	2003	4月機関紙IPEJ-NAGASAK創刊号、事務局太洋技術開発(株)木下氏 6月13日総会と研修会 佐賀県NPO法人技術フォーラムとの交流開始 10月18日神の島四郎島大砲台場のシンポジウム開催 機関紙編集事務局長大橋義美氏に変更
H16	2004	1月31日臨時総会、NERCに事務局設置, 6月18日総会と研修会
H17	2005	6月23日総会と研修会、会則制定、NERC主催の長崎建設フェアの後援開始 長崎県技術士会の名称をAPRENと制定、特別会計基金創設 本田圭助技術士が長崎新聞文化賞受賞。ホームページ開設準備開始
H18	2006	6月9日総会 NERC内にHP開設、8月25日第1回ミニ研修会を佐世保で開催 機関紙の名称を4月発行の13号よりAPRENに変更、会員名簿作成 2007年版長崎年鑑への名簿掲載中止し半ページ程度の会紹介に変更
H19	2007	7月11日総会と研修会 九州技術士センター廃止・九州支部に一本化 大橋義美氏九州支部の副支部長就任、機関紙編集事務局桐原敏氏に変更 長崎県年鑑への全会員名簿掲載中止・役員名のみ掲載 1月31日長崎で研修会、12月7日島原で研修会
H20	2008	6月20日総会と研修会 11月7日と8日長崎大学で日本技術士会水産部会研究発表会 久保田英士氏81歳で工学博士取得、10月29日佐世保で研修会
H21	2009	5月29日総会と研修会 名簿を発行、6月12日佐世保高専で講演 6月20日諫早文化センターで九州支部防災実務者セミナー
H22	2010	4月23日総会と研修会 H23年3月公益法人日本技術士会となる 長崎年鑑への名簿掲載は2010年で中止
H23	2011	5月27日総会と研修会 山口和登氏第5代会長就任 7月東京本部は統括本部・九州支部は九州本部と改称 9月9日鹿児島で鹿児島県技術士会と意見交換会、長崎地盤研究会の後援開始 10月21日と22日ブリックホールで西日本技術士研究業績年次発表会
H24	2012	6月2日総会と研修会 犬東洋志前会長が瑞宝小綬章を受章(9月26日お祝い会)
H25	2013	6月8日総会と研修会 産業基盤維持管理研究会の後援開始 岡林名誉教授が顧問就任、機関紙APREN担当園田直志氏と松本守氏に変更
H26	2014	6月14日総会と研修会 公益社団法人日本技術士会九州本部長崎県支部創立 長崎地区代表幹事は支部長に変更、初代支部長毎熊氏就任
H27	2015	6月20日総会と研修会 長崎県技術士会創立40周年記念式典(総会と兼務) 2月7日針尾無線塔見学会
H28	2016	6月18日総会と研修会 ホームページをリニューアル 1月5日長崎大学工学研究科社会環境デザインコース3年生に講義開始 技術士制度やキャリア資格についての広報講義で、これ以降毎年講義実施
H29	2017	6月10日総会と研修会
H30	2018	6月2日総会と研修会
R1	2019	6月8日総会と研修会 長崎県支部の支部長交代(毎熊氏から山口昭光氏)
R2	2020	7月11日総会と研修会
R3	2021	6月5日総会と研修会
R4	2022	6月18日総会と研修会
R5	2023	6月17日総会と研修会 岡林顧問ご逝去 (公社)日本技術士会長崎県支部会員の長崎県技術士会会費免除とした
R6	2024	6月8日総会と研修会 長崎県支部創立10周年
R7	2025	6月7日総会と研修会 長崎県技術士会創立50周年

補足説明：会の名称及び会代表者の呼称推移

1975年から：社団法人日本技術士会長崎県支部と表示、代表者は長崎県支部長

1986年から：社団法人日本技術士会九州支部長崎県技術士会と表示し、代表者は長崎県技術士会会長

2011年以降：長崎県技術士会と表示し、代表者は長崎県技術士会会長

2. 会員数の推移

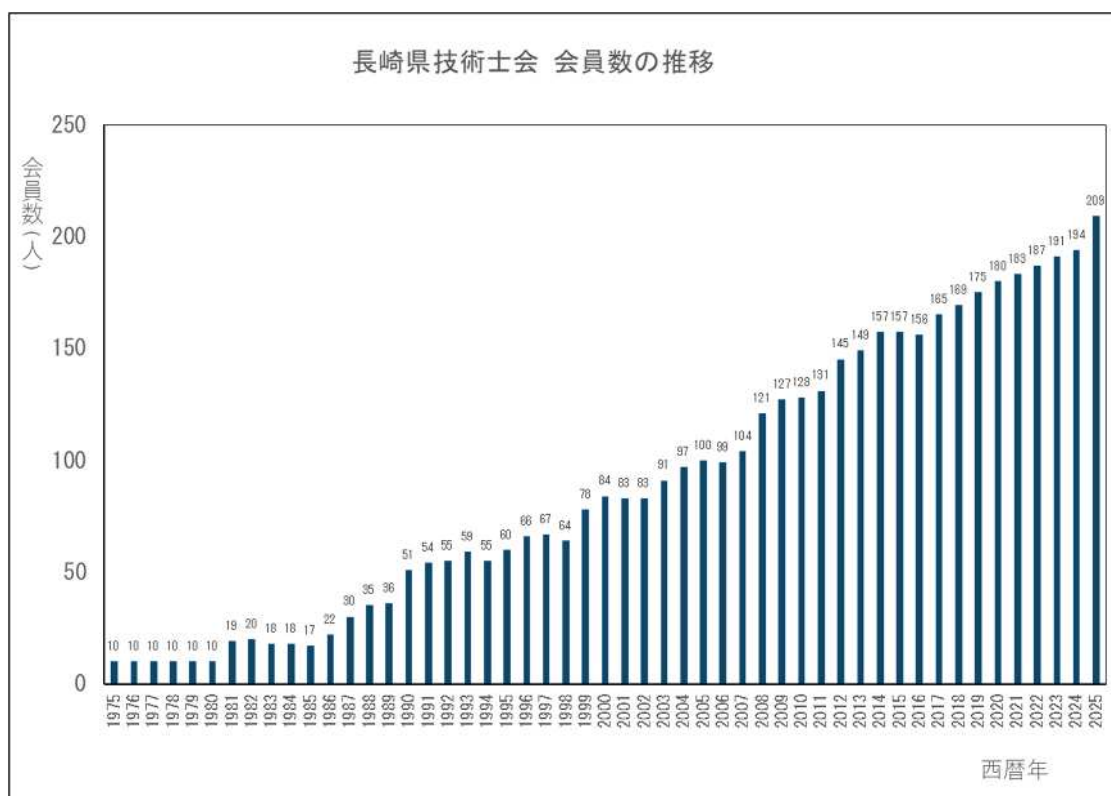
昭和50年(1975)から令和7年(2025)までの会員数を図1に示しますが、昭和50年から昭和56年(1981)までは名簿が現存しておらず、初期の会員からの情報により、創立時の会員数は約10人と推定されています。

その後、昭和56年(1981)からは名簿が残存しており、昭和56年の会員数は19人です。

創立10年後の昭和60年(1985)には会員の県外への転勤などのため、一時的に17人と減少していますが、15年後の平成2年(1990)には51人となり、20年後の平成7年(1995)は60人、25年後の平成12年(2000)には84人と順調に増加しています。

創立後30年の平成17年(2005)には100人と大台を超え、創立後40年の平成27年には127人、50年後の令和7年(2025)には209人と毎年増えています。

図1 会員数推移



3. 部門別会員数

表5に部門別の会員数と登録者数を示しますが、部門別で最も多いのは建設部門で118人と全体の50%以上となっており、第2位は農業部門、第3位は機械部門、第4位は応用理学部門、第5位は上下水道部門と森林部門が同順位です。

この表には登録者数も示しており、令和7年(2025)3月31日現在502人で、建設部門が233人と多いですが、第2位は機械部門の77人と全体の約15%となっており、他県と比較して、長崎県は機械部門の会員が多いのが特徴です。

表5 部門別会員数

		長崎県技術士会 会員数 (各年度の名簿作成時点)								登録者数
年	和年	S50	S56	H2	H12	H22	H27	R2	R7	2025. 3. 31
	西暦	1975	1981	1990	2000	2010	2015	2020	2025	R7. 3. 31
1	機械		1	4	5	8	7	10	14	77
2	船舶海洋		0	2	2	2	1	1	1	4
3	航空宇宙		0	0	0	0	0	0	0	0
4	電気電子		0	1	4	4	4	4	8	18
5	化学		0	0	0	0	0	1	1	2
6	繊維		0	0	0	0	0	0	0	0
7	金属		0	0	1	1	1	2	2	8
8	資源工学		0	1	0	0	0	0	0	2
9	建設		9	29	48	75	96	100	118	233
10	上下水道		1	0	4	8	11	11	10	19
11	衛生工学		0	0	0	2	2	1	2	5
12	農業		2	5	5	11	16	23	24	57
13	森林		0	0	0	3	7	9	10	17
14	水産		0	0	2	1	2	4	6	10
15	経営工学		0	0	1	2	2	2	1	4
16	情報工学		0	0	0	1	1	2	3	1
17	応用理学		5	8	12	7	10	12	12	32
18	生物工学		0	0	0	0	0	0	0	1
19	環境		0	0	0	2	3	5	7	12
20	原子力放射線		0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	10	19	51	84	127	163	187	219	502
21	総合管理					18	27	29	33	66

複数部門の合格者がいるため、登録者実数とは異なります。

4. 初期の会員の入退会記録

表6 長崎県技術士会の創立後20年間の会員推移（敬称略）

（1）昭和50年創立時及び昭和56年の会員

和暦	西暦	会員名（）内は合格年度と専門分野を示し空白は建設部門
S50	1975	創立時会員は黒瀬正行、野々下金、藤永勝之、田中武熊、柏原公二郎等10名前後と推定（S50年以前の合格者の鰐坂卓之、犬束洋志、五反田進、高村 清、吉田 強が入会と思われますが、詳細不明） 城石高弥及び永濱信也はS52年の入会
S56	1981	鰐坂卓之（S45）、犬束洋志（S50）、岡崎 勝、黒瀬正行（S35）、五反田進（S49）、城石高弥（S35）、高村 清（S43）、田中武熊、平井久義、吉田 強（S48）、渡辺 悟（水道）、緒方 勇（農業）、杉本徳博（農業）、野々下金（S42、応用理学）、藤永勝之（S42、応用理学）、柏原公二郎（S49、応用理学）、永濱伸也（S52、応用理学）、野村幸平（S52、応用理学）、芳賀三千億（経営工学）

（2）昭和57年以降の入退会記録 専門分野を（）内に示す。空白は建設部門

和暦	西暦	入会者名、*は技術士補	退会者名
S57	1982	武田秀雄（船舶）	
S58	1983	宮村重範	鰐坂卓之、犬束洋志 岡崎 勝
S59	1984	高山能博（機械）、五島一成（農業）	高村 清、渡辺 悟
S60	1985		五反田進
S61	1986	筒井光男、草野哲郎*、田中実雄*、平原宏志*、寺澤一憲*	
S62	1987	丸山誠一郎、福岡辰義、川岸國晃、永尾嘉孝（農業）、加藤邦雄（応用理学）、原口 強（応用理学）、松尾 晃（船舶）、清水富夫（機械）	
S63	1988	岡崎研児、小野 仁、大河澄雄、松竹英雄、久保田英士（機械）、徳永武雄（水産）	平井久義
H1	1989	犬束洋志、松永光司、西村利弥（応用理学）	大河澄雄、緒方 勇
H2	1990	松本敏行、浜田英治、川村昭宣、井上嘉郎（農業）、河瀬憲次（農業）、松村 昇（機械）、河田 忠（資源工学）、浅岡正彦*、金子 卓*、倉岡克行*、高山直樹*、林登志男*、宮崎東一*、戸泉康晴*、神尾健治*（電気）	
H3	1991	山岡義春、橋本隆男、大橋義美、竹岡伸一、矢野友一郎、山口和登（応用理学）、廣石 寛（経営工学）	浜田英治、丸山誠一郎 神尾健治、戸泉康晴
H4	1992	黒川正文、山喜秀昭（農業）、藤原英俊（応用理学）、柳井高弘*、杉山伸一郎*（衛生工学）	小野 仁、河瀬憲次 野村幸平、矢野友一郎
H5	1993	山田好之助（応用理学）、坂井繁雄、高木辰治、三重野秀信、平野 巖、高村 清、中川隆志*、幸野 茂、中山英樹（水道）、高田和年（水道）、原田敏彦（水道）、塩屋藤彦（応用理学）	高山能博、川岸國晃 山喜秀昭、原口 強 加藤邦雄、倉岡克行 杉山伸一郎、廣石 寛

5. 初期合格者一覧

表7 初期（昭和年代）の技術士合格者名と経歴（敬称略）

和暦	西暦	合格者名（数字は登録番号）
S35	1960	黒瀬正行（1323、初代会長、日本技術士会本部元副会長・理事）
S35	1960	城石高弥（3342、元代表幹事）
#	#	中瀬太一（船舶、元三菱長船、平成5年から平成9年まで本部の理事）
S42	1967	藤永勝之（5462、元副会長）
S42	1967	野々下金（5488、元顧問、九州支部元支部長）
S43	1968	高村 清（5508、元佐世保重工取締役 #、辻産業常務取締役）
S45	1970	鰺坂卓之7258
S48	1973	吉田 強（9352）
S48	1973	石崎勝義（28815）
S49	1974	柏原公二郎（10124、元副会長、九州支部元幹事）
S49	1974	五反田進10089、坂田宏人10307
#	#	田中武熊（第2代会長）
S50	1975	犬束洋志（32186、第4代会長、元長崎県土木部長、元長崎市助役）
S52	1977	野村幸平（11644、元大栄開発社長）
S52	1977	永濱伸也（12202、元副会長・理事）
#	#	芳賀三千億（12833、元九州支部幹事）
S54	1979	宮村重範（13878）
S55	1980	武田秀雄（14577）
#	#	岡崎 勝（佐世保市役所元土木部長）、渡辺 悟、緒方 勇、杉本徳博
#	#	平井久義（元辻産業鉄構設計部長）
S57	1982	高山能博（16340）
#	#	五島一成
S60	1985	小倉 驍（タケシ）（17771）
#	#	筒井光男
S62	1987	清水富夫（20298、元理事）
S62	1987	福岡辰義（19798、第3代会長）
#	#	丸山誠一郎、川岸國晃、永尾嘉孝、加藤邦雄、原口 強、松尾 晃
S63	1988	久保田英士（21563、三菱長崎技術士会初代会長、81歳で博士取得）
S63	1988	松竹英雄（21021、元監事）、安藤憲仁（21281）
#	#	岡崎研児、小野 仁、大河澄雄、徳永武雄、西村利弥

長崎県技術士会会員のうち、合格年度が明確に判明している方を記載しています。

（）内の数字は登録番号を示します。（一部関係者からの情報提供を含みます）

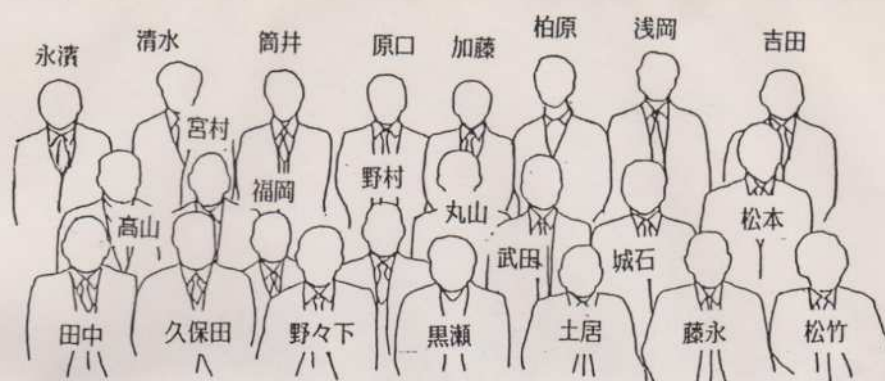
#印年度の合格者は、登録番号や入会記録からの推定によるものです。

#印の役職は、資料不足のため推定で記載しています。

6. 昭和62年度総会出席者の記念写真（宮村重範氏提供）



長崎県技術士会62年度総会 S 63.2.6 於 大村第2てんしん



参考文献

- 1) 日本技術士会創立50周年記念誌、平成13年(2001)6月15日発行
- 2) 月刊技術士増刊号の日本技術士会45年史、40年史、35年史、30年史
- 3) 長崎県技術士会名簿、中央人事通信社発行の「長崎県年鑑」(通称赤本)の昭和56年(1981)から平成22年(2010)まで
- 4) 長崎県支部創立10周年記念誌
- 5) 雑誌土木施工43巻11号「この人に聞きたい26 黒瀬正行(元日本技術士会副会長) 平成14年(2002年)11月
- 6) 高村清著「わが師 我が友」「My Way」
- 7) 平成26年(2014)10月10日発行の機関紙47号に大橋義美元監事(当時)「長崎県技術士会の設立と歩み」
- 8) 平成27年(2015)4月10日発行の機関紙第49号に川村副会長(当時)「長崎県技術士会の設立と歩み(その2)」
- 9) 平成27年(2015)発行の長崎県技術士会名簿兼長崎県技術士会設立40周年記念誌に川村昭宣副会長(当時)「長崎県技術士会の歴史」
- 10) 社団法人日本技術士会九州技術士センター 平成14年度会員名簿

【7】平成から現在までの各種活動		P 4 2
------------------	-------	-------

(文責：山口 和登)

1. 機関紙「APREN だより」		P 4 2
2. 長崎県技術士会のホームページ開設、 運用及び情報配信局の開設		P 4 3
3. 各種広報活動、研修活動		P 4 3
4. 寄付活動、会員の各種表彰受賞		P 4 5
5. 長崎大学との連携活動		P 4 6
6. 他県技術士会との交流		P 4 8
7. 日本技術士会九州本部機関紙 「技術士だより・九州」への投稿		P 4 9
8. 日本技術士会長崎県支部との関係、協力		P 5 0
9. 事務局の変遷		P 5 1
参考文献		P 5 1

【 7 】 平成から現在までの活動報告

長崎県技術士会創立当初の黒瀬会長、田中会長、福岡会長の約 20 年間は会員の親睦、情報交換等の内部活動が主で、外部との情報交換等は当時の日本技術士会九州支部の行事参加程度でした。その後の犬東会長からの約 30 年間は県内外への情報発信や技術士活動の活発化、技術士の知名度向上活動等の外部活動が盛んに行われ、会員増加にも繋がりました。

以下、具体的にその後の 30 年間の活動について項目ごとに報告いたします。

1. 長崎県技術士会の機関紙「APREN だより」
2. 長崎県技術士会のホームページ開設、運用及び情報配信局の開設
3. 各種広報活動、研修活動
4. 寄付活動、会員の各種表彰受賞
5. 長崎大学との連携活動
6. 他県技術士会との交流
7. 日本技術士会九州本部機関紙「技術士だより・九州」への投稿
8. 日本技術士会長崎県支部との関係、協力
9. 事務局の変遷

参考文献

1. 機関紙「APREN だより」

長崎県技術士会機関紙は当時の犬東会長の「会の組織・経済力、そして活動が鈍くなる中で何とか会員の気力を高める意味で会誌が役に立つ」との発案で平成 15 年(2003) 4 月に創刊いたしました。当初の機関紙名は創刊号から第 12 号までは「IPEJ-NGASAKI-」とし、第 13 号から「APREN だより」に変更し、現在まで至っております。ちなみに「IPEJ」は日本技術士会の略称で、「APREN」は長崎県技術士会 (Association of Professional Engineering Nagasaki) の略称で、愛されるプロフェッショナルエンジニアとの意味を込めております。

発行責任者は、創刊号から平成 23 年(2011) 4 月の第 33 号まで当時会長の犬東洋志で、第 34 号から現在までは現会長の山口和登です。編集担当者は、創刊号、第 2 号は事務局担当で、第 3 号から第 17 号は大橋義美技術士、第 18 号からは第 41 号は桐原敏技術士、第 42 号から第 54 号は園田直志技術士・松本守技術士、第 55 号から現在まで園田直志技術士であります。編集担当者は毎回の「事務局便り」、「編集後記」の作成のほか、編集記事の依頼、収集、そして編集作業という大変な作業であり、編集者各位の尽力によるもので、大いに感謝申し上げます。機関紙は毎年 1 月、4 月、7 月、10 月の年 4 回発行で、それぞれ原則的に発行月の 10 日に全会員に情報配信局からメール配信するとともに、ホームページに適時掲載しております。

機関紙「APREN だより」について、各号の記事の執筆者名とタイトルの目次一覧表は、本記念誌の P96～P106 に掲載しています。さらに、創刊号から第 91 号までの全記事の本文を、P108～P306 に収録していますので、詳細はそちらをご覧ください。

また、次項で述べるとおり、長崎県技術士会のホームページにも全ての記事を掲載しています。今後発行する機関紙の記事についても、同ホームページに順次掲載していく予定です。

2. 長崎県技術士会のホームページ開設、運用及び情報配信局の開設

ホームページは長崎県技術士会の事務局を平成 16 年(2004)に公益財団法人長崎県建設技術研究センター（以下 NERC と略）に移していた関係上、平成 18 年(2006)4 月から NERC のサーバーを介して開設いたしました。開設当初は NERC のサーバーを利用していた為、ホームページの追加や修正は NERC の P C 管理者しか取り扱うことができませんでした。この為、当時 NERC 所属の長崎県技術士会会員で長崎県技術士会の I T 委員長を務めていただいていた西村博崇技術士に色々とお苦勞をおかけ致しました。西村技術士が平成 28 年(2016)3 月末をもって NERC を退職されましたので、その後、色々和管理面で不都合が出てきました。この為、平成 28 年(2016)10 月から NERC からサーバーを切り離して情報配信局を佐世保市柚木元町の株式会社長崎地研内に開設し、ホームページのリニューアルを図り、ホームページ活用の利便性を向上させる事といたしました。基本的には旧来のスタイルを踏襲し、内容の充実、利便性を図りました。

ホームページには前に述べた機関紙、役員会議事録、役員名簿、会員名簿（閲覧にはパスワード必要）、入会申込書、技術士制度説明等がアップされており、適時更新を実施しております。また、情報配信局より機関紙「APREN だより」以外に総会、C P D 研修会等の開催のお知らせを会員へ適時メール配信しております。

3. 各種広報活動、研修活動

広報活動は前述したホームページを利用したの広報のほか、毎年会員名簿を印刷製本し、会員のみならず官公庁や大学、三菱重工業等の民間企業に配布しております。会員名簿は当初「長崎年鑑」に掲載していましたが、経費節減の関係上、平成 18 年(2006)からは長崎県技術士会が発行する会員名簿のみとしております。当初の会員名簿の印刷製本冊数は明確ではありませんが、200 部の記録は残っており、その後、300 部、350 部と増え、令和 7 年度は 400 部の印刷製本となりました。

研修活動としては、日本技術士会長崎県支部と共催で C P D 研修会、見学会を開催しております。研修会は基本的に年 4 回、見学会は年 1 回の開催を計画、実

施しており、また長崎大学主催の講演会等にも後援団体として参加しております。長崎大学との連携活動の詳細は後述致します。技術士会主催の研修会、見学会はその実施内容をまとめ、機関紙「APREN だより」に掲載し、参加できなかった会員や関係者への情報提供を行っております。研修会の講師は、長崎県技術士会会員、日本技術士会九州本部会員、長崎大学工学部、医学部、水産学部、環境科学部等の教授・准教授、国土交通省九州地方整備局、長崎河川国道事務所、気象庁長崎地方气象台等からの多彩な人材を選んでおります。

見学会では、日頃あまり訪れることのできない場所や学びの多い場所を選定しております。過去の見学例としては、三菱重工業長崎造船所、大島造船所、ソニー諫早工場、公共工事の施工現場など、会員の所属企業の工場や現場があります。

その他、広報活動の一環として、長崎県技術士会からの講師や委員派遣の依頼にも対応しております。大学・高専等への講師や委員の派遣については後述しますが、官公庁への委員派遣としては、佐世保市からの都市計画審議会委員推薦依頼に応じ、建設部門都市計画科目の松永光司技術士を平成29年(2017)1月から令和5年(2023)1月までの6年間、同じく西村博史技術士を令和5年(2023)1月から令和9年(2027)1月(予定)まで推薦し、委員に就任いただいております。

研修活動では、他の団体と共催・後援したもののうち、特筆すべき事例をご紹介します。

・九州地域の官公庁職員と技術士との合同セミナー

開催日：平成7年(1995)11月10日

主 催：社団法人日本技術士会九州支部・長崎県技術士会

基調講演「水問題について」高橋裕 芝浦工業大学教授

・ドイツ環境技術視察

視察日：平成11年(1999)6月7日～12日

主 催：長崎日独産業交流協会・長崎県技術士会（派遣団参加者21名）

報告会：平成11年(1999)7月27日

視察参加技術士：黒瀬正行、本田圭助、永田至孝、小島義博（熊本県技術士会）、山口和登、松村昇、田中省二

・幕末佐賀藩の長崎警備について研究報告会

開催日：平成15年(2003)10月18日

主 催：文部科学省・特定領域研究「江戸モノづくり」佐賀班

佐賀大学 長崎県技術士会

・西日本技術士研究・業績発表年次大会

開催日：平成23年(2011)10月21日～22日

主催：社団法人日本技術士会九州支部 後援：長崎県技術士会

10月21日(金)テクニカルツアー 三菱重工業長崎造船所資料館他
交流会 グラバー園内

10月22日(土)式典・発表年次大会 長崎ブリックホール3階
記念講演「岩崎弥太郎と長崎造船所150年のあゆみ」
長崎造船所資料館館長 横川清氏
論文発表「西日本の大規模災害を考える」がテーマ

4. 寄付活動、会員の各種表彰受賞

1) 寄付活動

各種活動の一環として、様々な寄付活動を行って参りました。主なものを以下にご紹介いたします。これらはホームページに掲載するとともに、総会においても報告しております。

- ・平成23年 7月25日 義援金10万円 東日本大震災
- ・平成26年 9月3日 寄付金 2万円 がんばらんば国体
- ・平成26年 9月4日 協賛金 2万円 長崎地盤研究会
- ・平成28年 5月13日 義援金10万円 熊本地震災害
- ・令和元年10月8日 寄付金10万円 長崎大学工学部50周年事業
- ・令和6年3月5日 義援金10万円 能登半島地震災害

2) 会員の各種表彰受賞

技術士活動等により表彰を受けられた会員の方々について、以下のとおりご紹介いたします。(敬称略)

日本技術士会会長表彰

- ・平成15年度：芳賀三千億
- ・平成16年度：永濱 伸也
- ・平成18年度：大橋 義美
- ・平成22年度：犬束 洋志
- ・平成24年度：山口 和登、久原 俊之
- ・平成28年度：松尾 稔
- ・平成29年度：毎熊 元、松永 光司
- ・平成31年度：川村 昭宣
- ・令和5年度：清水 富夫
- ・令和7年度：山口 昭光

長崎新聞文化賞表彰

- ・平成17年度：本田 圭助

瑞宝小受賞叙勲

- ・平成24年度：犬束 洋志

土木学会インフラメンテナンス マイスター賞受賞

- ・令和6年度：川村 昭宣

なお、既にご報告申し上げましたとおり、昭和から平成初期にかけては、黒瀬正行氏（科学技術長官賞、黄綬褒章）、野々下金氏（長崎県知事表彰）、藤永勝之氏（黄綬褒章、勲五等瑞宝章）が栄えある賞を受けております。

5. 長崎大学との連携活動

長崎大学との連携活動の主なものを、以下のとおりご紹介いたします。

1) 長崎地盤研究会との関わり

長崎地盤研究会は平成8年(1996)4月に発足しております。現在の研究会会長は平成23年(2011)10月より第3代会長で蔣宇静長崎大学教授であります。長崎県技術士会は平成20年(2008)4月より長崎地盤研究会の後援団体となりました。その時の研究会会長は第2代会長の棚橋由彦長崎大学教授で、その関係で研究会副会長は長崎県技術士会会長の山口和登が現在まで務めております。

2) 産業基盤維持管理技術研究会との関わり

産業基盤維持管理技術研究会は平成14年(2004)から活動を開始しましたが、平成20年(2008)度に活動を休止し、平成25年(2013)11月に活動を再開しました。現在の研究会代表は中村聖三長崎大学教授で、長崎県技術士会は再開時より後援団体として参加しました。副会長は長崎県技術士会副会長（現顧問）の川村昭宣が務めております。

3) 長崎県技術士会による長崎大学工学部学生（3年生）に対する講義

学生への講義は平成28年(2016)1月（第1回）より令和6年(2024)12月（第10回）まで毎年度実施しました。内容的には、技術士制度、技術者のキャリアと資格について、技術公務員と技術士、建設コンサルタントにおける技術士等、内容は多彩で、講師は毎回2～3名の技術士会会員による90分の講義です。講義終了後に講義内容や技術士について受講学生にアンケートを実施し、その結果等は全て機関紙「APRENだより」に報告掲載しております。

4) 長崎大学工学部社会環境デザイン工学コースの外部評価委員会への参加

令和2年9月より JABEE 関連の委員会として、社会環境デザインコース外部評価委員会に長崎県技術士会から毎年2名参加しております。外部評価委員は

4名で他の2名はデザインコース以外の大学関係者、長崎県の土木職員です。

5) 大学関係者の長崎県技術士会機関紙「APREN だより」への投稿記事

先に述べました長崎県技術士会機関紙『APREN だより』には、大学関係者からも多くの投稿をいただいております。その中で、技術士会との関わりに関する投稿は、以下のとおりです。

・故 岡林 隆敏 名誉教授

平成26年(2014)1月(第44号)

「長崎県技術士会と大学の連携」

※ 岡林先生には平成25年(2013)6月から令和5年(2023)5月まで長崎県技術士会顧問を務めていただきました。

・中村 聖三 教授

平成27年(2015)1月(第48号)

「エンジニアリング・デザイン教育と技術士会との連携」

・蔣 宇静 教授

平成27年(2015)1月(第48号)

「地域貢献を目指す『長崎地盤研究会』と長崎県技術士会との連携」

6) 長崎大学からのCPD研修会への講師派遣

技術士会では年に4回のCPD研修会を実施しておりますが、その講師として長崎大学から多くの講師の先生を派遣していただいています。講師の先生は工学部だけでなく、水産学部、環境科学部、医学部など多岐にわたっています。これらの研修内容は添付する機関紙「APREN だより」に掲載していますのでそちらをご覧ください。

7) 長崎大学からの博士号学位取得

長崎大学からの博士の学位を取得された長崎県技術士会員で特筆すべき、久保田英士技術士(機械部門)と犬東洋志4代目会長(建設部門)、そして本田圭助元監事(機械部門)です。

久保田氏の研究論文は技術士業務の1つとして行った家庭ごみ及び産業廃棄物の焼却炉から、生成するダイオキシン類の生成抑制をテーマとして「都市ごみ焼却炉の排ガス急冷法によるダイオキシン類に関する研究」です。研究論文は約8年の歳月をついやして、完成されました。驚くべきは平成20年(2008)3月に長崎大学より81歳で工学博士を取得されたことです。

犬東前会長の博士論文は「長崎県の離島架設の整備における技術的対応と投資効果に関する研究」です。内容は県内の離島架橋の建設経緯を詳しく調査するとともに、代表的な架橋である平戸大橋(吊橋)と生月大橋(連続トラス橋)に

ついて技術的検討を行い、更に架橋の投資効果について新しい提言をし、長崎県の長大橋の建設技術の進展と離島と半島への経済効果を総括した論文であります。犬東前会長の工学博士取得は平成21年(2009)2月で71歳の時とこちらも驚くべきことであります。

本田氏の博士論文は「持続可能な地域づくりに貢献しうる市民参加による地域政策評価枠組みの開発」で、本研究により地方自治体の総合計画が自律的に持続可能な発展を行いうることを明確にした論文であります。この論文は7年の歳月をかけてまとめられ、平成27年(2015)3月に久保田氏と同じく81歳で長崎大学から博士(環境科学)の学位を取得されました。こちらもまた驚くべきことであります。

8) その他

平成20年(2008)11月には長崎大学水産学部で大学の協力のもと日本技術士会水産部門の研究発表大会を開催しました。長崎県技術士会からも水産部門の久原俊之技術士をはじめ、多くの技術士が大会運営に協力いたしました。

長崎大学以外にも、教育機関と技術士会との連携の一環として、佐世保工業高等専門学校でも講演を実施致しました。まず、JABEE認定校である佐世保高専からの依頼により、平成21年(2009)6月に専攻科学生50名を対象とした講演を行いました。このときの講師は、大橋義美技術士、田口美菜子技術士の2名でした。さらに、同じ佐世保高専において、令和7年(2025)7月にも講演を実施し、山口和登、大城進太郎、横山知充、安武昭典の4名の技術士が講師を務めました。

6. 他県技術士会との交流

他県技術士会との交流といえば、まず佐賀県技術士会との交流があげられます。佐賀県技術士会は所属技術士が少ない関係上、佐賀県技術士会が中心となり、意欲のある技術者を広く募り、非営利団体として技術者倫理にのっとり科学技術の面で社会に貢献しようとNPO法人「技術交流フォーラム」を平成13年(2001)10月に創立されました。初代理事長は佐賀大学の三浦哲彦教授で創立時から長崎県技術士会は「技術交流フォーラム」に色々と協力を致しました。その関係から平成15年度より令和3年度まで「技術交流フォーラム」の賛助会員となりました。その間、「技術交流フォーラム」の技術懇話会などの研修会に長崎県技術士会から講師の派遣を致しました。派遣した講師(敬称略)は黒瀬正行、山口和登、柏原公二郎、松本直弥、久原俊之、木原真、豊里和徳、藤村幹治、大橋義美、岡林隆敏と多くの長崎県技術士会の会員で、「技術交流フォーラム」からは大いに感謝されました。詳細については技術交流フォーラムのホームページをご参照ください。

その他の県技術士会との交流で印象に残るのが、鹿児島県技術士会です。鹿児島県は長崎県同様に離島を多く抱える県で、技術士会も同じような問題を抱えながらも、会員数は当時の長崎県技術士会の倍の会員数を数えました。この為、鹿児島県技術士会の幹部との意見交換をお願いし、お互いの県技術士会の発展施策等を協議いたしました。意見交換は、お願いした立場上、長崎県技術士会が平成23年(2011)9月9日に鹿児島市に出向き、協議いたしました。長崎県技術士会からは会長である山口和登、当時の副会長の毎熊元、当時の理事で日本技術士会長崎地区代表幹事の大橋義美の3名で、鹿児島県からは当時の後藤会長、及び岡村副会長、井内副会長の計3名が意見交換会に参加されました。議題は大きく区分して、1. 県技術士会の立場の確認、2. 県技術士会の発展施策、3. 西日本技術士業績・研究発表年次大会の開催についての3点でありました。その内、2. 県技術士会の発展施策としての協議内容は、①会員増加施策、②CPD等の行事施策、③会則（役員の選出方法等）、④会費収集方法・未納対策、⑤予算立案・執行、⑥ホームページ、その他であり、大いに参考になりました。詳細は「APREN だより」第35号に掲載しておりますのでそちらをご参照ください。他に、熊本県技術士会、大分県技術士会との交流がありましたが、組織としての交流ではなく、技術士個人としての交流が主体でありました。

7. 日本技術士会九州本部機関紙「技術士だより・九州」への投稿

日本技術士会九州本部（九州支部）の機関紙「技術士だより・九州」は平成元年(1989)に創刊されました。「技術士だより・九州」への長崎からの投稿は日本技術士会長崎県支部創立の平成26年(2014)以前と以後に大きく区分されます。平成26年(2014)以前は日本技術士会九州本部（九州支部）への投稿は初期においては毎号の投稿ではなく、一番古い投稿は平成元年(1989)11月の第2号であります。投稿者は黒瀬正行技術士で、次は平成2年(1990)8月の第5号で投稿者は野々下金技術士です。平成18年(2006)の第65号までは毎号の投稿ではなく、投稿者も殆ど1名であり、時折2名でした。平成18年(2006)3月の第67号から毎号に長崎から投稿しています。機関紙の発行月は、当初の第7号までは2月・8月・11月でしたが、第8号以降は3月・6月・9月・12月の発行となり、さらに平成19年(2007)1月の第70号からは1月・4月・7月・10月の発行となり、現在も同じ発行月となっております。

支部設置の準備が始まった平成25年(2013)頃から投稿者数も多くなり、長崎県支部が創立された平成26年(2014)からは投稿者数も少ない時で3名、多い時には7名となり、常時4名から5名の投稿者となっております。投稿者や投稿内容の詳細については令和7年(2025)1月に発行致しました「長崎県支部創立10周年記念誌」を参照ください。

8. 日本技術士会長崎県支部との関係、協力

日本技術士会長崎県支部創立経過の詳細は先に述べた「長崎県支部創立 10 周年記念誌」に記載されていますので、そちらを参考ください。

簡略的に述べると、全国組織である日本技術士会の全県に支部を設置するとの意向に沿い長崎県支部が平成 26 年(2014)に創立された訳ではありますが、それ以前から存在したローカル組織である「長崎県技術士会」との調整が必要となりました。

長崎県支部が創立された平成 26 年(2014)当時は長崎県技術士会の会員数が 150 名で、その内日本技術士会にも所属する会員数 59 名でした。また、長崎県内での日本技術士会の会員数は 86 名、すなわち 27 名は長崎県技術士会には所属していませんでした。この原因は、三菱重工業等の全国組織の大企業に所属する技術士は長崎県技術士会の存在自体も把握されてなく、また入会の必要性も感じなかったためとも思われます。

逆に長崎県内に本社が存在する会社や長崎県をはじめとする県内各自治体等に所属する技術士は日本技術士会への入会の必要性を感じなかったわけであります。また、当時、日本技術士会の年会費は 24,000 円、長崎県技術士会の年会費は 3,000 円であり、そのことも理由の一つとして考えられます。日本技術士会の年会費は現在 20,000 円（支払方法、年代別でさらに安価）と安くはなっていますが、長崎県技術士会の年会費に比べると高いままであります。このため、日本技術士会所属の技術士は長崎県技術士会の年会費は免除とし、日本技術士会会員の経済的負担を軽減し、また日本技術士会会員で長崎県技術士会に未加入の会員の入会促進を図りました。その結果、大企業所属の未加入技術士の入会も多くなってきております。

日本技術士会との協力関係で最も大きいものは C P D 研修会の開催です。前にも述べましたが技術士会主催の C P D 研修会を年に 4 回、見学会を 1 回実施しております。研修会、見学会で最も苦勞するのが、研修会の講師の人選及び見学会の場所の選定です。特に研修会は年に 4 回開催されるため、講師は年間で 10 名以上必要となり、そのため事前の準備も大変です。この研修会の準備、実施は県支部が主体で行っており、研修会後の講師を招いての交流会も実施しております。また、参加できなかった会員のための研修内容の広報は長崎県技術士会の機関紙「APREN だより」で詳しく報告掲載を行っております。

このように、長崎県支部との協力関係、連携が技術士活動や広報活動には必要不可欠となっております。

9. 事務局の変遷

長崎県技術士会の事務局は、創立時には初代会長の黒瀬正行氏が社長を務めておられた太洋技術開発株式会社（長崎市家野町）に設置されました。当時は事務局長という役職は無く、太洋技術開発の事務員が2代目会長、3代目会長時は経理を含む事務を担当していました。その後、4代目犬東会長の時の平成16年(2004)より公益財団法人長崎県建設技術研究センター（NERC）に事務局を移し、今に至っております。経理関連の管理は役員が事務局移転後は務めるようになり、平成16年度より代表幹事の大橋義美技術士が平成19年度(2007)まで担当し、その後は山口和登が担当し、現在に至っております。

参考文献

- 1) 長崎県技術士会：長崎県技術士会機関紙創刊号～最新号
- 2) 長崎県技術士会：長崎県技術士会設立40周年記念誌
- 3) 日本技術士会長崎県支部：長崎県支部創立10周年記念誌
- 4) 長崎県日独交流協会・長崎県技術士会：ドイツ環境技術視察報告書
- 5) 日本技術士会九州本部：技術士だより・九州（ホームページ掲載）
- 6) NPO 法人技術交流フォーラム：創立10周年記念誌・創立20周年記念誌

【8】会員寄稿

1. 旧 役 員

永濱 伸也	追憶 柏原さんと過ごした日々		P 5 3
平原 宏志	入会時の思い出		P 5 4
桐原 敏	創立 5 0 年を祝って		P 5 5
西村 博崇	入会時、在籍時の思い出		P 5 6
久原 俊之	5 0 周年 私は自然の摂理の緻密さを学んでいます ..		P 5 7

2. 現 役 員

山口 和登	技術士試験受験の思い出		P 5 8
山口 昭光	農業部門と長崎県技術士会との関わり		P 5 9
石瀬 史朗	家庭円満の秘訣		P 6 0
清水 正明	建設部門「都市及び地方都市」の技術士として		P 6 1
園田 直志	技術者の温故知新		P 6 2
児玉 英治	長崎県技術士会創立 5 0 周年に寄せて		P 6 3
折田 定良	創立 5 0 周年に寄せて		P 6 4
横山 知充	高齢技術士の役割について		P 6 5
有吉 正敏	女神大橋と技術士について		P 6 6
安武 昭典	長崎と産業革命遺産とともに		P 6 7
浦瀬 俊郎	公務員技術者としての技術士とOBの役割について..		P 6 8
田口 美菜子	1 7 年前、1 7 年後		P 6 9
田嶋 博文	転機と継続～ゴールデンディケードを目指して～ ..		P 7 0
安井 広宣	2 0 年を振り返って		P 7 1
山本 奉彦	技術士挑戦記、長崎県技術士会会員になって		P 7 2
川村 昭宣	長崎県技術士会に入会した頃の思い出		P 7 3

3. 初期の合格者（入会年度順）

永尾 嘉孝	技術士会入会とその後をふりかえって		P 7 4
高木 辰治	技術士受験と入会時の思い出		P 7 5
山田 好之助	長崎県技術士会入会時の思い出-1993 年-		P 7 6
神田 昭夫	海外で受けた日本技術士の評価		P 7 7
福田 光博	長崎県就職の思い出		P 7 8

4. 現 会 員（入会年度順）

立石 ヒロ子	女性技術士としての活動を振り返って		P 7 9
曾我 忠治	祝！長崎県技術士会 5 0 周年		P 8 0
岸園 人司	何故雲仙・普賢岳大火砕流で犠牲者多発したのか？..		P 8 1
中瀬 聡	島原でのCPD見学会の思い出		P 8 2
近藤 薫	技術士登録当時を振り返って		P 8 3
矢野 亨	長崎県技術士会入会までの道のりについて		P 8 4
佐藤(吉武)くらら	創立 5 0 周年を祝って		P 8 5
待永 正浩	長崎県技術士会 5 0 周年に寄せて		P 8 6
松原 武志	まつばら君も目指す 技術士人生 5 0 年		P 8 7
山口 昌紘	受験勉強と合格後の取り組み		P 8 8
大城 進太郎	技術の灯火を絶やさぬよう		P 8 9
土橋 晋作	「鳥居型人材」を目指した自己研鑽		P 9 0

追憶 柏原さんと過ごした日々

長崎県技術士会 元副会長

(株) カイ設計事務所

(応用理学)

ながはま しんや
永濱 伸也



創立五十周年おめでとうございます。懐かしい川村先生から寄稿のご依頼があったとき、キーワード「五十年」から浮かんだのは、かつての上司であり師であり同志でもあった故柏原公二郎氏のことでした。温厚で面倒見のよい柏原さんとは、薩長のよしみもあり家族ぐるみのお付き合いが続いておりました。

五十年前の私は九大院（修）を了え、縁あって入社した藤永建設株（当時）にて漸く8年経ち、技術士本試験受験の準備を始めておりました。恩師からは、学究の道から外れるのであれば、先ず技術士の資格をお取りなさいと言われ、また社長藤永勝之氏も先輩技術士として資格取得を奨励なさっておいででした。そして上司の柏原さんも亦、その前年に念願叶い技術士本試験に合格、二人目の企業内技術士となられたのです。柏原さんの技術論文のテーマは、北松・生月島の松本第二地区地すべりの特異な仕組みの解明と、その仕組みに特化した恒久的な抑制工法の考案に関するものだった、と記憶しております。その論文を拝読させて頂いたことから、合格論文として求められる要件は、単に学術的内容にとどまらず、高度な技術的レベル、テーマの特異性、解決策、経済性への配慮…などを意識して含め記述すること、と確信したのでした。

そのころまで既に「試錐用孔曲げ機」、「FIX アンカー工法」などの特許を取って会社に貢献されていたアイデアマン柏原さんに刺激された私は、一緒に「地下水流速計」の考案・試作に没頭し仏メナール社の製品よりも微かな流速を測定できる装置を作り、連名で昭和51年8月特許出願にこぎつけました。

それと並行して「2本の斜杭（鋼管杭）を用いた組杭の地すべり抑止工法への応用」と云うテーマで、その効果の理論的裏付けと実用性について研究しておりました。現場での加工実験、試験などを経てようやく構想がまとまり、昭和51年9月29日地すべり学会研究発表会（於山形県天童市）にて発表を致しました。そうして同年11月には特許出願の運びとなりました。

かくして翌昭和52年、実務経験年数が足りて受験した技術士本試験では、学会発表の折に予め受験を意識し準備した報文構成がそっくり役立ちます。そして合格すると直ぐに長崎県技術士会から入会のご案内を頂いたのです。

思うに柏原さんが昭和55年企業内技術士に飽き足らず御自分の技術士事務所を開かれた日までの、一緒に過ごしたあの頃はかけがえのない日々でした。

入会時の思い出

長崎県技術士会 元副会長

大栄開発株式会社

(総監・建設) ひらはら 平原 ひろし 宏志



長崎県技術士会からのお話があり、50年史の原稿を書くに当たり久しぶりに技術士会関係の名刺を見てみました。それには平成3年から綴られていましたが、私と長崎県技術士会の関係は昭和60年に始まります。まだ長崎県技術士会が太洋技術開発(株)内にあった時に、私が技術士補に合格し初代会長の田中武熊先生に強く誘われ、技術士会がなんなのかも分からず入会してしまいました。当時は田中会長以下、黒瀬正行先生、藤永勝之先生それに野々下金先生の4氏を中心になって技術士会を守り立てておられたように思います。

長崎県技術士会に限らず私にとっての技術士とは高嶺の花で、その技術士という資格を持つことそのものがステイタスであり、憧れでもありました。私が技術士補合格時に大村市の料亭で総会が在りましたが、その時に技術士の威厳を感じ、私もいつかは技術士になりたいと思ったものでした。いま私はその年齢以上になっても、あの頃の技術士の先生方を尊敬してやみません。私はその先生方や福岡の九州技術士センターの講師の方の御指導により技術士になれたのですから、その思いは今も変わることはありません。

長崎県技術士会は、この4氏に繋がる先生方が会を大きくしてくださいました。現在の技術士会の礎を作られた犬束会長は事務局を(公)長崎県建設技術研究センター(略称:NERC ナーク)に置くことを立案され実行されました。そればかりではなく、機関誌(APREN)も発行されました。その後、会の運営は大橋義美先生を中心に、現会長の山口和登先生、柏原公二郎先生、永濱伸也先生と今も活躍されている先生方で今に続いております。私は建設コンサルタントに属しているため他部門の先生方はあまり存じませんが、他部門の方々も同じような経験をなされていると思います。

現在の技術士法では、最短で4年で技術士を取得できます。以前にも優秀な方は、7年で取得した方もいらっしゃいます。技術士法では「高等な専門的応用能力を必要とする」と謳ってあります。若くて取得した技術士の方は、経験を積まれて素晴らしい熟練技術士になって頂きたいと思います。この頃私は、当時憧れた昭和の技術士の先生方を懐かしく思い出します。

創立50年を祝って

長崎県技術士会 元理事

大栄開発（株）

（建設） きりはら とし 敏
桐原 敏



長崎県技術士会創立50周年おめでとうございます。山口会長はじめ当会の発展にご尽力いただいたすべての関係者にあらためて敬意を称します。

私も昭和51年に大栄開発に入社後、今年で50年が経過しようとしている。入社当時から会社のみならず業界の看板でもあった野々下金社長と野村幸平専務（次の社長）の2人の大先輩技術士のとてつもない大きな後ろ姿を見てきたので、技術士取得は漠然とした憧れに似た目標ではあったが、日々の仕事に追われた中で数回受験したものの合格には至らず、仕事と人生の折り返しに近い40歳を少し過ぎてようやく合格した。

当時は何となく技術士取得は技術者としてのゴールのように考えていたが、今に思えば次のステップへの始まり・転機であった気がする。

技術士会の色々な行事や活動に参加する中で、先輩技術士の方々の仕事に取り組む姿勢や、専門分野だけでなく幅広い技術分野の研鑽への意欲、社会貢献活動への意識や行動力に触発されたことが大きな励みになった。長崎県技術士会との関りでは故大橋好美氏の後を引き継ぎ、広報担当として会員の皆様に原稿を依頼し、平成19年（第19号）から平成25年（第41号）まで長崎県技術士会発行の機関誌「APRENだより」と九州本部発行の「技術士だより・九州」の編集・発行に長崎県担当として携わったことが最も印象に残っている。

私は主に地すべりや土砂崩れ等の土砂災害関連分野の仕事に関わってきたが、昭和57年の長崎大水害、平成元～2年の長崎県北部災害、令和元年～3年の豪雨災害などを経験し、実務的な立場で業務に関わる中で画期的に進歩したものもあるがまだまだ解決すべき課題も多いと実感している。

近年はハード対策だけでなくソフト対策の重要性がより叫ばれ、災害等に関する危険情報を誰でもどこでも入手できる情報化社会になりつつあるなかで、技術者個人としての終着点に近づいた今もどのように関わっていくか試行錯誤の日々である。

技術者として日頃大事にしたい視点は「①現場を見て理解する ②本質と優先順位は何かを常に考える ③他者の意見・見解を求め、議論する ④判りやすい説明で相手の理解を得る」等である。古希を超えたが、若い人に迷惑をかけない範囲で現場（ほとんど山）を見る気力・体力がなくなるまで今しばらく頑張ってみたい。

入会時、在籍時の思い出

長崎県技術士会 元理事

日本技術士会千葉県支部 防災支援委員
(建設) にしむら ひろたか
西村 博崇



長崎県技術士会の皆さん、創立50周年まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

在籍歴わずか12年の自分が、寄稿文を書くのは大変おこがましいのですが、入会時や在籍時の思い出について述べさせていただきます。

私は、2002年に建設会社をリーマンショックのリストラで退社し、2004年縁あってナーク（NERC：長崎県建設技術研究センター）に職を得ることができました。採用要件の年齢を超えていたのですが、技術士の資格があったので採用していただいたと今でも思っています。入社後すぐに、ナークの役員の技術士の先輩に長崎県技術士会に入会するよう（採用要件のように）勧められ入会した次第です。それから12年の間、ナークに勤めながら技術士会の活動に参加させていただきました。私としては素晴らしい環境の中で充実した12年間を過ごせたものと思っています。これは、技術士の資格及び長崎県技術士会の皆さんのご指導のおかげであると今でも自分自身に言い聞かせているところです。

研修会や見学会等で思い出されることは、長崎大学やジオラボ等の皆さんと共同で会の運営ができたこと、鹿児島県で開催された大会に出席できたことも記憶に新しいところです。見学会では九州電力の発電所や佐世保の無線塔、島原道路のトンネルの現場見学等に参加できたことが思い起こされます。

また、今でも印象深いことは、入会当初、ナークで行われた研修会で日本銀行のOBの方が「これからの世界経済はブリックス（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）が大きな存在感を高めていく」という講演があったと記憶しています。20数年前のことです。先月のニュースでもブリックスの話題が出てきています。20数年前に長崎県技術士会の研修会でこのような話を聞けたと思うと大変感慨深いものがあります。

私は現在、日本技術士会千葉県支部の防災支援委員会で、会の皆さんの足を引っ張らない程度で活動しています。どこかで長崎県技術士会の皆さんにお会いできる機会があるかも知れません。楽しみにしています。

最後になりましたが、これからの長崎県技術士会の益々のご活躍とご発展を祈念してやみません。皆さんご安全に。

50周年 私は自然の摂理の緻密さを学んでいます

長崎県技術士会 元理事

(株) 久原水産研究所 代表技術士

(水産) くばら としゆき
久原 俊之



会員の皆様、令和7年は異常気象で猛暑続きでしたが、お元気にお過ごしでしょうか。お陰様で88歳となった私は、海況異変で多大な被害を受け経営が困難となった事業者へ、何かお手伝い出来ないかと現場を視察し、文献を調べてテストを試み、改善策探求のため日々学び元気に過ごしております。

振り返りますと、長崎市の水産農林部を退職後に、上司で助役の犬束4代目会長さんから技術士の資格試験を勧められ、同僚のM女史に職歴証明書を作って貰い、水産機器大手メーカーのY氏に過去の出題傾向を教えて頂き、東京での口頭試問には妻と一緒に旅行を楽しみ、幸運にも1回で合格出来ました。そして、直ぐに入会を許されたことを憶えております。

そこで知りました。各分野の皆様の技術レベルの高さ、奥深さ、己の未熟さ、勉強不足を痛感しました。奮起一転し、国の支援を受けて大村市内の遊休施設へテストプラントを作り、水中生物のライフサイクルを詳細に調べ、魚介類の健全飼育に熱中しました。

プラントでは、飼育水を毎日10回転循環させ、その水の99.1%を再利用し、地熱で温度コントロールを行い、オゾンを使い、二酸化炭素のガス分圧を下げ、PH値は自然界同様に維持し、浄化細菌の活性度も高めました。育てた魚種は、アワビ・イセエビ・ウニ・サザエ・ナマコ・クエと多種ですが、特にアワビとクエは順調に育ち品質が良いと関係者にお褒め頂きました。

その後、このプラントは、施設所有者の都合もあって廃止しておりますが、約10年余りの運転で得られたものは、水中生物のライフサイクルに与える環境変化の影響の大きさと微生物の増殖要因の底泥との関係を多少なりと解明しました。

今日の活動では、習得した技術の一部を応用し、養殖漁民の当面の課題である赤潮の被害、寄生虫症とウイルス・細菌感染症の被害について、メーカー・流通業者・技術者・漁民等の支援を受けて対策を展開中です。未だ途中ですが、予想外の成果が得られつつあります。

成果を上げるためには、やはり多くの皆様にいろいろの角度から意見を聞き、既成概念に惑わされることなく、準備万端の姿勢で取り組むことが大事であると思う様になりました。

最後になりましたが、当会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈ります。

技術士試験受験の思い出

長崎県技術士会 会長

株式会社 長崎地研

(応用理学)

やまぐち かずと
山口 和登



長崎県技術士会が創立された昭和50年(1975)に私は大学を卒業しました。在学中は技術士が何たるかは全く知りませんでした。大学の恩師から研究者になるなら博士号資格を、産業界に行くなら技術士資格をぜひ取りなさいと言われたのが記憶に残りました。卒業後、福岡の会社に就職し、その後10年位は仕事に慣れるのに忙しく、その間に仕事に必要な2級土木施工管理技士資格を昭和54年、地質調査技士資格を昭和55年、1級土木施工管理技士資格を昭和57年に、いずれも1回の受験で取得しました。この為、資格試験というものをなめていた為、当時、社内で資格者が2名しかいなかった技術士試験(当時は大学卒業後7年の実務経験で受験可能)に気楽に挑戦しました。昭和60年に転勤で長崎の支店に勤めており、筆記試験は当時の九州大学六本松キャンパスの教養部、箱崎の工学部で暑い8月に受験しましたが、あえなく2回は不合格、平成2年の3回目にやっと合格しました。当時の試験は午前も午後論文形式の筆記試験で、腕の感覚が無くなったのを記憶しています。

筆記試験は受かりましたが、東京での口頭試験が残っており、寒い12月に国立オリンピック記念青少年総合センターというところで、面接を受けました。面接前に九州支部で面接の模擬試験を受ける機会があり、その時の指導技術士から多くのアドバイスを受けました。その時の記憶に残るのが、面接に際し、試験官とは争わないように丁寧に回答すること、技術士の義務・責務の質問が必ずあるからしっかり記憶しておくことでした。義務・責務の質問がない場合は不合格ですよと脅されました。面接はうまくいきましたが、義務・責務の質問がありません。不合格かなと思い、面接室を退出しようとしたところ、呼び戻され、肝心の質問を忘れていたと言われ質問があり、安心しました。合格通知は次の年の平成3年1月に当時の科学技術庁の山東昭子長官名であり、登録はその年の2月に行いました。当時は合格者名簿が新聞に載っていましたから、早速、長崎県技術士会から入会の強い誘いがあり、その年に長崎県技術士会に入会いたしました。ちなみに日本技術士会に入会は平成9年6月です。

以上、技術士試験の受験の思い出を書きましたが、試験勉強を何年もしたのは大学受験以来で、いずれもつらかった記憶の方が多いですが、今ではそれもいい思い出となっております。

農業部門と長崎県技術士会との関わり

長崎県技術士会 副会長

(株) 高松設計コンサルタント

(農業) やまぐち 山口 あきみつ 昭光



私は、平成15年5月日本技術士会へ入会し、6月長崎県技術士会（以下、「本会」という。）へ入会しました。本会会員は83名でした。

(農業部門)

令和7年3月末の県内技術士登録者数は482名で、建設部門233名、機械部門77名、農業部門57名、応用理学部門32名の順となっています。

農業部門（農業土木）の合格者は、故井上嘉郎氏（平成2年）、福田光博氏（平成7年）、池松正弘氏（平成10年）、故藤村幹治氏（平成11年）、その後平成12年3名、平成13年2名、平成14年3名が合格しました。

平成12年の技術士制度改正により第二次試験の受験資格に第一次試験合格者が追加されたことから、平成16年に長崎県農村整備課若手職員の技術力向上を目的として長崎県農業土木技術士会（以下、「農土士会」という。）が創設されました。それを契機として若手職員の勉強会が開始され先輩技術士が指導を行うことになり、平成30年までの合格者は45名になりました。

（平成16年以降の農土士会の活動等については、APREN だより第5号、第12号、第25号をご笑覧いただければ幸いです。）

(長崎県技術士会との関わり)

農業部門の技術士が多くなってきたことから、平成20年に前会長の犬東洋志氏より農土士会事務局へ「農業部門から役員として本会へ参画して欲しい」と申し入れがありました。農土士会で検討し毎熊元氏を派遣することになり、役員会等で活動いただきました。

本会と私の直接的な関りは、平成25年6月九州本部長崎地区の桐原敏氏より広報委員を引き継いだことに始まり、以来、農業部門の2名が参画、研修会の開催、情報配信などを担当し、令和7年6月から3名が参画しています。

(農業土木技術士会)

長崎県農村整備課の技術士は本会へ入会する者が少なく技術士制度等の情報が円滑に伝わっていませんでした。そのため、当時の農土士会事務局長に本会への入会を勧め、農土士会事務局長の入会により円滑な情報交換を行うことが可能となりました。

本会農業部門の会員は21名（令和7年6月）で、本会の目的である地域に貢献するには心もとない状況です。さらに入会を勧め地域に貢献できる体制づくりを図って行きたいと考えています。

家庭円満の秘訣

長崎県技術士会 副会長

三菱重工業㈱長崎造船所

(機械) いしせ しろう
石瀬 史朗



私が技術士をめざす切っ掛けは、兄が技術士に合格し、(カッコいいな〜)と感じた単純なことでしたが、今改めて「技術士になって自分は変わったのか？」と自問すると、相手に理解してもらうことの大切さ、難しさをわかったことだと思います。

二次試験の面接試験を前に講師から「技術士にふさわしいことを見せよう(見せる)」のが重要だと教えられました。面接といえば入社試験以降、数十年も受けておらず、これまで会社の看板を背負って仕事をしてきた私にとって、未熟な自分自身をさも何でも知っているかのように、且つ簡潔に表現することに戸惑ってしまいました。

「自分自身を見せよう」とはどういうことなのか？を考えると、自分の考え方や技術知識を自分の言葉で表現するのは勿論ですが、独りよがりの説明しても相手に伝わらなければ意味が無いと考えるようになりました。それ以降、相手は「どんな技術知識があるのか？何を聞きたいのか？」を少しずつ事前に考えるようになりました。

これは仕事上の説明だけではなく、例えば日常でも気を付けておくと役に立ちます。若手と高齢者、男性と女性、隣り合って仕事をする人でも生まれ育ちや経験、住む世界が違えば価値観や好みの違いでモノの捉え方が違いますよね。海外の方々と文化の違いがあるのと同じで、相手を理解し合わせた説明をしなければ意図どおり理解してもらえません。

極端な例で言えばロシアとウクライナ戦争、ガザ地区への攻撃も同じようなことが言えます。歴史や宗教が絡むので簡単には言えませんが、双方ともに自分が正しいと考える理屈を“武力”を使って押し付けるばかりで、理解しよう、理解してもらおうという考え方にはほど遠い気がします。今のトランプ外交で本当に大丈夫でしょうか？

但し、相手との間で納得のいく妥協点を見つけるのは口で言うほど簡単ではないのが現実です。かく言う私も日々様々な違いを上手くこなしているわけはありません。つい家庭で理屈をこねると嫌がられて反省しきりです。反省をしつかりと活かす技術士になるには、まだまだ修業が要りそうです。

これからも頑張ります！

建設部門「都市及び地方計画」の技術士として

長崎県技術士会 理事

(株) 高松設計コンサルタント

(総監・建設・上下水) しみず 清水 まさあき 正明



技術士を取得して、20年ほど経過した。長崎県土木部の技術者として関わった事業について紹介し、過去の実績を振り返ってみたい。この両事業の経験は、技術士受験時の「礎」である。

1. 佐世保駅周辺鉄道高架化事業

鉄道高架化事業の目的は、道路と平面交差する鉄道の踏切事故などなくし、円滑な交通を確保するとともに、線路、駅で分断されている地域を一体化し、合理的かつ機能的な土地利用の実現を図ることにある。事業延長1.6km、踏切除却3カ所、立体化された都市計画道路6路線、平成4年度から平成16年度まで、総事業費約130億円で施工した。月刊「技術士」2023年1月号に「鉄道高架化事業における環境保全効果について」と題して投稿した。この事業は、走行車両の整流化による二酸化炭素の排出削減効果は、絶大である。



2. 都市計画道路浦上川線建設事業

同路線は、県道長崎式見線の一部で長崎市松山町から元船に至る延長約3kmで実施された。地域高規格の南北幹線道路の一部であり、国道202号、207号の渋滞緩和のために整備された道路である。本来、稲佐橋の交差点は、立体交差で計画されていたが、道路構造令の改正と、南北幹線全体の進捗の遅れもあり、国土交通省都市局街路課と協議の上、暫定的に平面交差としている。このことを技術士試験の「経験論文」として2次試験に合格できたが、口頭試験において、国土交通省の方と思われる試験官から、「長崎県土木部は、たびたび、そんなことをやっているのですか。」と質問され、回答に詰まった事を今でも覚えています。無事、合格できて、本当によかった。



技術者の温故知新

長崎県技術士会 監事

N. ソノダ技術士事務所

(建設) ^{そのだ}園田 ^{なおし}直志



長崎県技術士会の「創立50周年記念誌」の編集委員のご拝命を頂き感謝申し上げます。技術者として22歳から長崎県を出奔して定年後に帰崎しました。この編集委員会に参加して、長崎県の諸先輩方のご尽力や歴史を学ぶ機会があり、多くの情報をもとに下図を作成しました。図に示すように技術士制度は自分の生年（1950年）に誕生したようです。無謀な戦争を繰り返さないように優れた民間の科学技術者の育成のために日本の技術士制度が創設され、幾度かの法改正を経て（公社）日本技術士会も同時に変遷を遂げて今日に至っています。技術士制度は、国家資格として発展・充実に、九州支部や当該県のように地方においても技術者集団を形成・発展させてきました。

明治維新の改革期は技術者のコミュニティである「日本工学会」が1879年（明治12年）に設立され、現在の約100学協会で構成されています。筆者は土木学会「1914年（大正3）」にも所属しており両方の技術者として日々の自己研鑽に務めています。自己研鑽には継続とコミュニティが必要です。

温故知新「昔の知識や経験に親しみ研究し、そこから新しい見解や道理を得る」とは中国古代「魯」の国の儒者・哲学者の孔子の論語から来ているようです。

この「創立50周年記念誌」が後世にも残り、将来の優秀な技術者集団の研鑽材料として提供出来ることを誇りに思います。 (了)

長崎県技術士会創立 50 周年に寄せて

長崎県技術士会 理事

兒玉技術士事務所

(環境) こ だ ま 兒玉 え い じ 英治



私は平成 29 年 4 月の選挙により、同年 6 月の総会において長崎県技術士会および長崎県支部の役員に就任いたしました。

長崎県技術士会副会長・川村昭宣氏が令和 4 年 10 月 19 日の役員会において提出された資料によれば、長崎県技術士会は昭和 50 年(1975)に発足(当初は「長崎支部」と称していた)しました。以来 50 年の歳月を経て本年を迎えられたことに對し、諸先輩方のご尽力とご功績に深甚なる敬意を表する次第であります。

私の長崎県技術士会における主な職務は、「長崎市役所との連絡調整」であります。鈴木史朗長崎市長には、これまで 3 度お目にかかり、「長崎市職員には現職 14 名、OB 6 名の技術士がおられます。若い職員の皆様には、ぜひ積極的に技術士資格の取得を目指していただきたい」と申し上げました。

また、長崎支部では CPD 担当総括を務めておりますが、長崎県技術士会において私が担った最も重要な業務(私自身そう考えております)は、会則および細則の改正であります。令和 4 年 8 月 23 日の役員会において、川村副会長、山口副会長(支部長)、横山監事の 3 名により会則・細則を見直すこととなり、私がその作業の取りまとめを任されました。当初は力不足を感じつつも、横山監事より過去の会則・細則の調査結果および改正案をお送りいただき、半年余にわたり意見交換を重ねてまいりました。

その後、令和 4 年 10 月 19 日の役員会において横山監事より改正案の説明が行われ、同年 12 月 22 日の役員会では、私が現行案と改正案の比較表を用いて詳細に説明し、慎重な協議を経ました。さらに令和 5 年 2 月 27 日の役員会において一部修正を加えた上で改訂案を再度説明し、同年 4 月 27 日の役員会において異議なく承認され、令和 5 年 6 月 17 日の総会において正式に改訂が決議されました。

ところで、技術士の皆様の中には、年間 50 時間の CPD(継続研鑽)を確保するため、講演会への参加や自己研鑽に努めておられる方も多いことと存じます。日本技術士会への入会には年会費 2 万円を要し、私も自己研鑽の一環として日本環境化学会の文献購読料 5 千円および環境部会オンライン参加費等を負担しております。それに比して、長崎県技術士会の年会費は 3 千円と極めて低額であります。現在、会員数は 209 名とのことでありますが、未入会の方におかれましては、ぜひご加入をご検討賜りたく存じます。

創立50周年に寄せて

長崎県技術士会 理事

(株) 五省コンサルタント長崎事務所

(建設) おりた 折田 さだよし 定良



長崎県技術士会の創立50年おめでとうございます。私は入会以来10年ほどになりますが、2019年から役員の末席に加えていただき、山口会長以下諸先輩方のご指導の下、運営に携わらせて頂いております。10名余りの役員の方々は、いろいろな分野のエキスパートがおられ、それぞれ経験をお持ちですから、私にとっては様々な機会学ぶことが多くあります。そのため長崎県技術士会には感謝の念が堪えません。

45年ほど前になりますが、社会人として最初に就職した会社では、藤永勝之社長、柏原公二郎部長、永濱伸也課長と3人の技術士がおられ、そのご縁で技術士という資格があることを知りました。当時の技術士試験は一日かけて約10,000字の論文を書けないと合格はおぼつかないと聞きまして、自分には無縁な資格と認識していました。

程なく比較的年齢が近い先輩2名が合格され技術士となられ、私も一度経験してみようと挑戦しましたが、最初は試験開始後1時間で試験会場から退散する有り様でまだまだ遙か遠い存在でした。

その後、現川村昭宣顧問との出会いがあり、長きに渡る熱心なご指導を仰ぐことができ、ようやく合格に至った次第で年齢も50台半ばとなっておりました。

また、毎熊元初代支部長の大学の後輩という縁で、技術士会の役員に加えていただいておりますが、会の発展ために精力的に活動される山口和登会長、山口昭光副会長には足元にも及ばず、その努力を惜しまないお姿に唯々感服する次第です。

先輩方のご尽力により、発展を続けてきた長崎県技術士会ですが、現在は2014年に設立された日本技術士会長崎県支部と活動を共にし、CPD研修会、防災委員会、広報委員会などの活動を広げていこうとしております。

長崎県技術士会における活動と様々な先輩技術士の方との出会いに、私自身も成長させていただいております。今後は、長崎県技術士会の一員として微力ながら今後の発展に貢献するとともに、余り交流の機会のない若手技術士との交流に貢献できれば良いなと考えております。

高齢技術士の役割について

長崎県技術士会 理事

横山技術士事務所

(機械) よこやま 横山 ともみつ 知充



長崎県技術士会は、任意団体ですが、(公社)日本技術士会長崎県支部と役割分担をしながら、誰もがその人らしく生きられる社会の実現に向けて貢献活動をしていることは皆さんご存じのとおりです。

私が技術士の資格を取得したのは62歳の年でした。大学卒業と同時に就職した製造業の民間会社を社則に則り60歳で定年退職し、引き続き同じ会社に再雇用され、資格の取得は、後輩への技術的アドバイス等を通じた先輩技術者としての「つとめ」を果たすための「知的好奇心」を満足させるためのものでした。

技術士の国家資格は職業独占資格ではないこと、また、製造業の民間会社では資格が会社に及ぼすメリットが殆どないこともあり、再雇用された会社、及びその後再就職した会社での若手技術者への技術的アドバイスをするなどの生活も、70歳で終え、現在75歳になっています。

現在の日本は、少子高齢化社会となっており、若手技術者や熟練技術者不足になっており、デジタル化、AI化が急激に進んでいます。

技術士は、性別、年齢に関係なく、技術を通じたコミュニケーションの機会を増やし、DEI（多様性、公平性、包摂性）を実践する活動の輪を拡げ、社会課題の解決やウェルビーイングの向上につなげて真価を発揮するのが役目であるとされています。もちろん、退職した高齢技術者が、デジタル技術、AIの活用に関する技術開発に関して、現役技術者に有効な技術的アドバイスができるわけではありません。

しかし、『技術士倫理綱領』の（継続研鑽と人材育成）に“技術士は、専門分野の力量及び技術と社会が接する領域の知識を常に高めるとともに、人材育成に努める。”と規定されています。従って、技術士は、業務の履行を通して安全で持続可能な社会の実現など、公益の確保に貢献することが第一であることは言うまでもないことですが、高齢技術者は、現役技術者が行う科学技術の向上や地域に貢献する環境を間接的にでも支援することはできるのではないだろうか。そのためには、高齢技術士が、最新技術に関する情報を知ろうとする「知的好奇心」を持ち続けることが必要と考え、私は、その手段として、技術士会等が開催するCPD等の参加が有効と考え、技術士会や学会などが開催するCPDや講演会などにリモートなどで参加しています。

女神大橋と技術士について

長崎県技術士会 理事

(公財) 長崎県建設技術研究センター

(総監・建設) ありよし 有吉 まさとし 正敏



私が技術士を目指すきっかけは、令和7年完成20周年を迎えた長崎港の入り口に架かる女神大橋の概略設計を、約40年前に担当したことでした。

昭和62年当時、私が勤務していた長崎県土木部道路建設課橋梁係は、係長と担当の2名だけの係で、係長は「議会と単独予算と特任業務」、担当の私は「その他全部」と役割が明確に分けられていました。

ほとんど橋梁の経験がなかったので、最初は「生月大橋」や「若松大橋」の建設省との認可・要望ヒヤリングなどには大変苦勞しましたが、徐々に仕事に慣れてきたころに担当したのが「女神大橋」でした。

当時総理大臣になった竹下登氏が目玉事業としたのが「ふるさと事業」でした。「ふるさと事業」は長崎県でも全国植樹祭に備えた道路整備予算に大いに活用しましたが、その他にも「100億円以上の長大橋梁事業」の枠があったので、係長と相談して「女神大橋」を募集しようと思いました。しかし、当時の道路建設課長から時期尚早との理由で却下されました。

その次の年に道路建設課長になったのが、後に長崎県技術士会会長になった犬束さんでした。犬束さんは女神大橋を始め、西彼杵道路や島原道路、出島バイパスなどを次々と事業化しました。私は、現在の長崎県の幹線道路の姿を決定したのは犬束さんだと思っています。

女神大橋は、犬束課長の陣頭指揮のもと、橋梁係長が運輸省との調整担当、私が概略設計担当として事業化を目指すことになりました。当時は運輸省との関係などを配慮して、秘密裏に進めなければならず、概略設計に使用した地形図(1/2,500)や海図は女神大橋に関係ない範囲も購入しました。現地踏査も人目につかないように注意しながら少人数で行いました。

犬束さんは、当時長崎県職員としては数少ない技術士であり、平戸大橋を建設するなど長大橋梁の技術に精通していましたので、私も将来は、長大橋梁の建設を担当し活躍できる技術士になりたいと思うようになりました。

その後、万関橋や大島大橋などを担当し、10年後に技術士になることができました。技術士取得後は、建設だけではなく、先輩や自分が建設した長大橋梁の維持管理を中心に活動しています。これからも技術伝承や人材育成を通じ、長崎県の長大橋梁の技術向上に貢献していきたいと考えています。

長崎と産業革命遺産とともに

長崎県技術士会 理事

安武技術士総合事務所

(化学) やすたけ あきのり
安武 昭典



長崎県技術士会創立50周年おめでとうございます。

私は、57年前に小学校の修学旅行で長崎を訪れたのが長崎との関りの初めです。その後、長崎に就職して44年、会に入会して12年、技術士登録から9年、技術士事務所を開業してから3年となります。

平成2年(1990)に三菱重工長崎造船所が見渡せる地に自宅を建てて、何気なく眺めていた風景・建物が平成27年(2015)7月に「明治日本の産業革命遺産」として登録されました。大変感慨深いものがあります。



筆者自宅からの全景

筆者撮影



第三船渠 (現在)



占焼閣 (現在)
非公開施設 提供「三菱重工業(株)」



カンチレバークレーン (現在)

化学部門の技術士として、お客様からの温暖化ガスの抑制技術や最近参画させて頂いた防災委員会活動を通して自身の研鑽と共に社会のニーズを把握し新たな科学技術を展開できるようにしたいと思っています。

最後に、技術士倫理綱領に「技術士は、地球環境の保全等、将来世代にわたって持続可能な社会の実現に貢献する」とあります。これらの構成資産は明治31年(1898)から明治42年(1909)に建設、設置されています。時間の経過とともにその機能を変えたものもありますが、現在まで継続的に社会活動に貢献しており、私も前職含め、今後の技術士活動を通じて社会活動へ貢献できるように、資質能力の向上と共に技術者の育成にも努めたいと思います。



旧木型場 (現在)
建物工事のため、休館中
提供「三菱重工業(株)」

公務員技術者としての技術士と OBの役割について

長崎県技術士会 理事

東亜建設技術（株）長崎支社

（建設） うら せ 浦瀬 としろう 俊郎



このたび、長崎県技術士会創立50周年という節目にあたり、記念誌への寄稿の機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は昭和58年4月、長崎大水害の翌年に長崎県土木部へ入庁し、河川・ダム行政に33年、都市計画行政に5年携わり、令和3年3月に定年退職いたしました。技術士資格には30歳頃から関心がありましたが、指の骨折により長文の筆記が困難となり取得を断念。その後、公務員技術者OBとしての役割を考える中で、定年退職の年に一次試験から挑戦し、令和5年4月に建設部門（河川、砂防及び海岸・海洋）の技術士資格を取得いたしました。まだ新人技術士ではありませんが、現役時代に培った経験が今に活かされていると感じています。

現役時代は資格の必要性を強く意識することはありませんでしたが、振り返れば、技術士に求められる資質や能力は、先輩方からのご指導や日々の業務を通じて自然と身に付いていたように思います。平成16年に策定された「技術士ビジョン 21」では、公務員技術者としての技術士の意義が明確に示されており、行政サービスにおいて技術的判断を担う責任者として、社会的信頼の向上に寄与する存在とされています。私自身も退職後、自治体からの依頼に応じて治水計画やダム建設に関する技術的助言を行い、若手職員の意思決定を支える活動を少しずつ進めているところです。

近年では、地球温暖化の影響により気象災害の激甚化・頻発化が懸念されており、県民の生命・財産・暮らしを守るための技術的対応がますます重要となっています。一方で、人口減少とインフラの老朽化が進む中、地域の将来に合わせたインフラの適正化・再構築が求められ、地方公共団体の技術者不足も深刻な課題となっています。

国が管理する一級水系河川では、流域全体での協働による「流域治水2.0」の推進により、災害リスクの低減を図る方針が示されています。我々OB技術者も、何らかの形で協力していく必要があると考えます。

今後は、長崎県内においても現役世代との意見交換を重ね、より良い体制や仕組みづくりを進めるとともに、技術士会の活動を通じて技術者のネットワークを強化し、地域課題の解決に向けた知見の共有や若手技術者の育成支援に努めることで、地域の安全と持続可能な発展に貢献できればと考えています。

17年前・17年後

長崎県技術士会 理事

大栄開発（株） 取締役

（建設） たぐち 田口 みなこ 美菜子



はじめに

この度長崎県技術士会創立50周年の節目に理事の役割を担当致しまして、記念誌にこのような投稿が出来る事を誠に光栄に思います。記念誌編集委員会及び関係各所の方々に心から感謝を申し上げます。

17年前（合格時）と17年後（これから）

私は今から17年前の2009年に技術士試験に合格し、長崎県技術士会に入会を致しました。

2009年はどのような年だったのか振り返ると、政権交代で鳩山内閣が成立して「事業仕分け」なる言葉も登場します。国土交通白書H21版では、人口減少・高齢化社会を迎える中での様々な課題、莫大な長期債務を抱える将来への不安、またコスト構造改革等のテーマが見受けられます。当時はまだスマートフォンを所持していなかったため東京の口頭試験へ行く際には「マップル」の路線地図を持参し、前日に会場まで足を運んでみて本番に備え道順を確認しました。昨今ではスマホの地図アプリがあれば、ほぼどこへでも行くことが可能です。ドローンを用いた映像撮影や測量、ChatGPTや生成AIなど17年前には予測もしなかった技術が日常にあり、生活の利便性は飛躍的に向上しました。

この先17年後にはどのような社会になっているのでしょうか？更に加速度的にデジタル技術等が進化し普及して自動運転や自動物流道路が実用化され、私たちはロボットと会話しているかもしれません。何よりもまず『2050カーボンニュートラル』という国際目標の達成に、限りなく近付いている必要があります。

この17年の間にはコロナ禍もあり、私たちの社会や価値観は大きく変貌しました。今後10年・20年先の見通しも難しい不透明な時代ですが、利潤や利便性の追求だけにとどまらない高いコンプライアンス意識を共有し、より豊かで質の高い社会を作り上げていく一員でありたいと考えています。

転機と継続 ～ゴールデンディケードを目指して～

長崎県技術士会 理事

(株) ペック 技術部 理事

(農業) 田嶋 博文



はじめに

長崎県技術士会創立50周年おめでとうございます。半世紀にわたる本会諸先輩方のご尽力に、心より敬意を表します。私も、本年度より新役員として活動させていただきます。よろしくお願いいたします。本稿では、技術士を目指す方々にも参考となるよう、私自身の資格取得の経緯を紹介いたします。

技術士・技術士会との出会い（転機）

若かりし頃、ある大先輩から「技術士を受験するので、自分が携わった昔の資料を、見せてもらえませんか」と連絡を受け、資料探しを手伝ったのが「技術士」資格との出会いとなりました。話を聞くにつれ「到底自分が太刀打ちできる資格ではない」と思ったことを覚えています。

その後、職場でも「技術士」挑戦が推奨されるようになり、何とか1次試験は合格できたものの、2次試験で壁に直面し、思うような結果を得られませんでした。その後、奮い立つことができず、ずるずると10数年が過ぎ、完全な諦めモードになっていました。

そんな中、その大先輩から「諦めるな！ 受験すると約束してくれ」と声を掛けてもらい、職場有志勉強会のサポートを受け、やっと合格までたどり着けました。振り返ると、一人では受験にすらたどり着けなかったと思います。

その後、定年退職、再就職を経て、技術士会役員に推薦いただきました。

取得後の意識変化（継続）

私の場合は、資格取得を諦めていた期間が長く、技術士合格が年齢的に遅かったと感じています。遅かったからこそ、残された時間は「技術士に求められる資質能力」を理解・実践・向上していく必要があると考えます。

特に、CPD活動を通じた継続研鑽に取り組むことで、他の技術者の方々の考え・姿勢・知見に触れて、自分の理解を深めるよう努力しています。

また、前職場・現職場でも周りを見渡すと、優秀な技術者がたくさんおられます。そうした方々が資格受験を迷われたり、苦戦されているのを見ると、サポートしたいという思いが、自然と湧き上がってきます。

最後に、ある研修で感銘を受け、自分に言い聞かせたい「ゴールデンディケード（Golden Decade）現在進行形」を結びの言葉とさせていただきます。

20年を振り返って

長崎県技術士会 監事

三菱重工交通・建設エンジニアリング株式会社

西日本建設統括部長

(総監・建設) やすい ひろのぶ
安井 広宣



私は 2005 年度に技術士に合格し、2006 年に日本技術士会と長崎県技術士会に入会しました。当時 40 歳でしたが、同じ会社の先輩技術士が長崎県技術士会の役員をされていたこともあり、いろいろな行事に諸先輩方と一緒に活動させて頂き良い勉強をしてきました。その当時の経験と人脈が非常に今役立っていると思っています。

現在、私は東京都内に本社を置く三菱重工交通・建設エンジニアリング(株)というエンジニアリング会社に勤務しております。旧名・西日本菱重興産のほうで長崎では馴染みがあるかもしれません。

入社以来、長期出張は度々あったものの基本は長崎を拠点に勤務しておりましたが、2017 年からしばらく長崎を離れ、当時の弊本社があった横浜で約 6 年間の単身赴任生活を送っていました。単身赴任中はコロナ禍とも重なり、技術士会の諸活動にはほとんど参加できませんでしたが、2023 年 4 月により長崎に戻り本年度から長崎県技術士会役員を拝命しております。また同時に、日本技術士会九州本部の倫理委員にも任命頂き、微力ながら少しでも技術士会に貢献できればと思っています。

さて、これまでの活動の中で私が一番記憶に残るのは、2011 年に長崎市で開催された「第 17 回西日本技術士／研究・業績年次大会」です。日本技術士会九州本部主催でしたが、事前準備から閉会まで一連の行事に携わらせて頂きました。一日目のテクニカルツアーでは三菱重工長崎造船所の史料館や工場の見学、グラバー園内でのレセプションなど、二日目は長崎ブリックホールでの記念講演と論文発表、どのイベントも心に残る貴重な経験で、開催中は多くの技術士の方々と交流させて頂きました。またこのような機会があれば是非参画したいと思っています。

長崎県技術士会に入会し約 20 年、数年のブランクがありましたが、これからまた地元長崎でみなさんとともに技術士として地域に貢献する活動を行ってみたいと思います。これからもどうぞよろしくお願い致します。

技術士挑戦記、長崎県技術士会会員になって

長崎県技術士会 理事

扇精光コンサルティング株式会社

(農業・建設)

やまもと ともひこ
山本 奉彦



40歳を目前に控えたある日、県職員だった私の許に職場内回覧が回ってきた。「技術士に関心があるか？」という趣旨が書かれていたので、最後まで読まず名前の欄に○を付けて次に回した。当時、資格取得が推奨されており、数人の大先輩が技術士となられたことを聞いていたので憧れもあり、好きな高級車のCMに影響されて「いつかは技術士」という気持ちは持っていた。

数日後の回覧には、○を付けた者は週末に諫早に集合するよう記されていた。何やら試験に向けた勉強会を始めるようだ。「自分にそんな資質はない、まだ先で良いのに。」などと後悔したが、「一応話だけ聞いてみよう」という気持ちで開講式に参加した。ところが、先輩方が講師となって教えてくれると思っていたのに、自分達で自ら勉強したことを互いに教え合い1次試験合格を目指せと云う。

「ひとりがコケれば皆コケる」という言葉が印象的だった。「時すでに遅し、しまった、もう抜けられない!」と思ったが、これも運命、良い機会かとも思って受け入れることにした。早速勉強に取り掛かるも、当時の携帯電話はIモードで情報を得るには不向き、自宅にPCもなかった。農業部門の参考書もない。まずは形からとPCを購入したが、ネットにない情報もあり図書館通いを始めた。他県への出張時には大きな図書館を訪ねた。ひとりなら既に投げ出していることも、仲間のことを思うと簡単に諦められなかった。

「合格よりも勉強する過程が大切」よく受験で耳にする言葉ではあるが、1次試験ほどそう思ったことはない。県農林部の職員でありながら農業土木以外の知識が殆どないことに気付いた。日頃、仕事で接点がない他課の方に分からないことを尋ねると、忙しいにも関わらず丁寧に教えていただいた。

2次試験は諸先輩の熱心な指導のお陰で、思いがけず技術士となることが出来た。県技術士会に入会してからは、経歴や部門が違う技術士の方々と知り合い幅広い知識を学ぶ機会に恵まれた。そして、記念すべき創立50周年、これまでの足跡を振り返ると、その時々諸先輩の熱い想いが伝わってくる。継続は力なり、長年にわたり組織を維持することは並大抵のことでは出来ないが、微力ながら今後の県技術士会発展に少しでも寄与出来ればと考えている。これまでお世話になった方々への恩返しのためにも。

※ 県職員の勉強会については、会報第5号・第12号藤村幹治氏、第25号山口昭光氏の記事をご覧ください。

長崎県技術士会に入会した頃の思い出

長崎県技術士会 顧問

(有) 吉川土木コンサルタント

(総監・建設)

かわむら

あきのぶ

川村 昭宣



技術士という資格を知り、関心を持ったのは、昭和42年に院卒で入社し、希望通り長崎造船所造船設計部に配属になって、上司の中瀬太一郎長が船舶部門の技術士である事を知った時でした。ただ当時私の周りには他には技術士資格保有者は誰も居らず、技術士という名前を知った程度でした。当時長崎県技術士会は創立されておらず、中瀬太一技術士はその後すぐ本社に転勤となったため、長崎県技術士会には入会されていませんが、日本技術士会本部で活躍され、平成5年から平成9年まで、日本技術士会本部の理事をされました。

私は船の設計を20年間担当した後、昭和62年に橋梁や鉄構などの設計担当課に職場異動となりましたが、その時もまだ長崎造船所の設計部門には技術士はいませんでした。しかし社内の橋梁関係会議に出席した時、横浜製作所・神戸造船所・広島製作所の橋梁担当課長達は皆技術士資格取得者であり、技術士資格保有は当然の様な雰囲気であったので、すぐ技術士取得を目指す事にしました。ただ橋梁を含め土木全般についての知識はほとんどなかったもので、まず手始めに1級土木施工管理技士を取得した後に技術士受験する事とし、平成2年に建設部門の技術士試験に合格しました。

合格直後に長崎県技術士会の田中武熊会長より電話で入会の勧誘を受けすぐ入会しました。当時は受験者の氏名や受験場所等が公開されていて、所属や電話番号なども日本技術士会から提供されていたのだと思います。最近では新規合格者の把握は個人的な人脈に頼る事しか出来ない状態で、新規会員勧誘は非常に困難です。色々な場で情報公開を求めていますが見えていません。何等かの厳しい条件を付けてでも、新規合格者情報公開が必要だと感じています。

私は長崎県技術士会に入会しましたが、総会に出席するのみで、特別な活動はしていませんでしたが、黒瀬正行初代会長や、野々下金元九州支部長、藤永勝之元副会長、田中武熊第2代会長の4氏が中心となって、会を運営し活動しておられました。夫々コンサルタント会社の社長や幹部の方達で、高齢にもかかわらず「技術士は生涯現役」を率先して示しておられ、総会や懇親会に出席してお話を伺う都度、毎回大いに刺激を受け感銘しました。現在の私の活動の原点になっており、当時の諸先輩技術士に感謝するのみです。これからも健康の許す限り長崎県技術士会活動への参加を続けていきたいと思っています。

技術士会入会とその後をふりかえって

(農業) ながお 永尾 よしとか 嘉孝



創立50周年を迎え、お祝い申し上げます。小生は1986年に入会し現在に至ります。昭和43年に県に入り定年まで県職員、10年間長崎県経済連の土壤分析センターに勤め、その後は職につかず現在に至っています。農林試験場環境部土壤科に勤務している時に同期の方に奨められ受験しました。面接試験で試験官の二人が小生のことをよく知っているから何も聞くことがないと言われ、残る一人の方が質問されました。農林試験場勤務だが、技術士会は公務員ばかりが占めるところではない。公務員が多すぎるようになるのは困る。記述試験の論述について、あなたの記述内容はマンボウの“中切り、中抜けだ”と言われました。受験当日提出する答案用紙が机の下、足元に落ちていたのに気づき拾って試験官に追加提出しようとしたけど、もう東京へ送った、もう送らないと言われた。その旨試験官に伝えたが聞き捨てられ、不合格と確信していたが、図らずとも合格通知が届きました。その後苦労話は人一倍あるけど書きとめられる分量ではありません。部分書き致します。試験場土壤科勤務の頃は基盤整備事業に係る施工基準策定のための土壤調査、国土地理院の基本調査、県下の土壤分類基本調査、土壤流亡対策の基礎となるライシメータ試験、作物の無機成分バランスと生理障害、農業用・多目的ダムに係る土壤調査、積算侵入量調査、飼料作における硝酸態窒素、Ca, Mg/K 比の適正化、雲仙普賢岳噴火降下物の被害実態調査と対策試験、緩効性肥料、被覆肥料を用いた環境保全型施肥技術確立、対馬の重金属汚染対策のための壱岐土の搬入客土、基盤整備に係る土壤調査、土壤・灌漑水・玄米の重金属(Ca, Zn, Pb)の経年的分析等に従事しました。各種土壤調査においては、試坑調査のため着衣が土にまみれ土色帳のように汚れ、対馬の重金属分析サンプリングでは作業着を山中に脱ぎ捨てて帰ったりでした。国土調査では、土壤断面がかき氷状で、指感が分らず土性判定が難しい冬にあたったこともあり、普賢岳の噴火降下物の調査では、眼球の角膜が火山ガラスで傷つき眼科通いを続けたり、眼鏡のコーティングが痛み何度も眼鏡を交換しました。環境部加工化学科では、バイオリアクターによる食酢加工技術開発、ばれいしょの品質評価法などの調査研究に携り、不慣れの特許申請書を作成、特許庁から厳しい指摘を数多く受けました。改行せずに長崎県知事 ○○○と書いて、日本にそんな人物はいない。そば、麦、…に適用できると書いて、等とはどんなものか、世界にあるのか等々。農業技術科専技班では土壤肥料専技と公設試の連絡調整に携る仕事が多く、超勤疲れでした。

技術士受験と入会時の思い出

株式会社アールデ

(総監・建設) たかぎ たつじ
高木 辰治



私の技術士受験の契機となったのは、前職場に在籍していた36歳の時であった。当時の社長（当時75歳位）が建設コンサルタント登録規程による技術管理者を務めておられたが、建設省（国交省）からの突然の呼び出しによって上京された。

技術管理者を務めている社長の年齢に不信を抱いた建設省が、実際に技術管理者の役目を果たしているかどうかを確認するために呼び出しをかけたとのことであり、帰社後の社長は憮然とした様子で「孫みたいに若い官僚から、健康状態等について失礼な質問を受けたので、この通りピンピンしていると言ってやった。」と話され、「もう、コンサルの技術管理者はやめるので、受験資格のある若い職員はすぐに技術士を受験せよ！」との指示があり、私を含めた30歳代の5人が受験することになった。当時の受験資格は7年の業務経験があればよく、技術士補制度ができてはいたが、第一次試験合格が受験要件とはなっていなかった。

当時（平成4年）の試験は、午前中の経験論文が非常に重要視されていたとの記憶がある。午後からは建設一般の問題1問と、専門分野の問題2問の出題があり、いずれも記述式であった。一日中鉛筆を走らせる必要があり試験終了後は、ぐったりと疲れた記憶がある。幸いにも、私を含めた2名が合格することができた。

合格後に技術士会からの祝賀会開催案内が自宅に届いたが、その時の宛名がなんと「高木先生」と記載されており、びっくりすると同時に嫌な気分になった。家内からも「お父さんはいつから先生になったと？」と冷笑された。今の技術士会ではそのような呼び方をする方はほとんどいないが、当時は先生と呼び合っており、このことに私は非常に抵抗を感じていた。

資格取得後は、長崎、佐賀、宮崎県内の砂防（主に斜面崩壊、地すべり）に取り組んできた。当時は、技術士が少なかったこともあり講演や原稿執筆の依頼が飛び込んでくることも多く、資格取得によって幅広い人脈形成ができたと感じている。

私が長崎県技術士会に入会した当時はたぶん50～60名程度の会員であったと思うが、現在はその4倍以上に増えており活動も活発になっている。今後とも、技術士制度が若い技術者の登竜門となり発展することを願うものである。

長崎県技術士会入会時の思い出-1993 年-

藤永地建株式会社

(応用理学) やまだ よしのすけ
山田 好之助



私の技術士登録（第 2 7 7 9 7 号）は、1993(平成 5)年 3 月 3 日です。

同年 2 月の官報告示後、同 2 7 日(社)日本技術士会九州支部の技術士実務研修を経て、5 月 2 9 日(社)日本技術士会九州支部・九州地方技術士センター定時総会、そして 7 月 3 1 日に長崎県技術士会通常総会に参加したのが技術士会入会になるのでしょうか。長崎県技術士会通常総会では、福岡辰義技術士が新会長に選任され、田中武熊前会長の追悼が黒瀬正行技術士によりなされました。

さかのぼり、1980 年就職した地質調査会社には、藤永勝之技術士(応用理学)、柏原公二郎技術士(応用理学)、および永浜伸也技術士(応用理学)が在籍されており、ボーリングに係わる工法特許、ボーリング孔内地下水微流速測定器の開発、電気探査結果の解析法など高度な専門技術に接する機会を得ました。

また、地質調査業界にも、黒瀬正行技術士(建設)、野々下金技術士(応用理学)、野村幸平技術士(応用理学)、平原宏志技術士(建設)らがおられ、独創的発想を専門技術に生かした工法・試験法等を紹介いただきました。この長崎県技術士会創立初期の諸先達とのかかわりは、現在の私の財産でもあります。

入会后、同 1 0 月 3 0 日に青年技術士見学会(ソニー長崎、講師：高山能博技術士(機械))、および 1 1 月 5 日に九州支部主催「第 6 回九州地域の官公庁職員と技術士との合同セミナー」に参加しました。他部門の先達技術士や同世代技術士の方々の様々な技術士としての業務(技術士の名称を用いて、科学技術に関する高等の専門的応用能力を必要とする事項について計画、研究、設計、分析、試験、評価又はこれらに関する指導の業務)での取り組みを知る機会になりました。また、技術士には、発注者・関係者はもとより、背景にある社会の要請に応えられる知識、経済性を考慮した技術提案、および説明能力を養う必要性を認識する契機にもなりました。

2020 年代半ばの現在、人工知能(AI: Artificial Intelligence)の時代到来と言われますが、これからも研鑽に努めたいと思います。

これまで、技術士は社会資本整備に貢献してきました。今後は、気候変動や頻発する自然災害に関しても、様々な部門を有する技術士会がカーボンニュートラルや防災・減災のための情報・技術を提案し、社会に貢献できる時代がきたのではないのでしょうか。長崎県技術士会のご発展を祈念いたします。

海外で受けた日本技術士の評価

神田エンジニアリング
(電気電子) かんだ あきお 神田 昭夫



私が技術士に合格した33年前、技術士は弁護士、弁理士、公認会計士に並ぶ4大最難関国家資格と言われておりましたが、ある中小企業の社長から、技術士とはどんな資格ですか、技能士の一種ですか、と言われたのを鮮明に覚えています。

私が受けた海外における技術士の評価の一端を紹介します。

・南アフリカ (AM 社)

地下 3,000m、金鉱山の労働者の命を守る空気を送るコンプレッサー用モーター200kW 40 台の納入後の高信頼性、トラブルゼロの評価。

・オーストラリア (M 電力庁)

褐炭火力発電所 50 万 kW 用 7,000kW 他のモーターの納入後3年目に技術最高責任者 Mr. R. D からの A4、2 ページの感謝 Letter は私の技術士としての宝物。

・中国 (R 電機、K 電機)

H 製鉄所用高圧モーター600kW 20 台 (R 電機製) 及びテーブルローラー用モーター25kW 400 台 (K 電機製) の設計・製造のコンサルタント業務で納入後トラブルゼロの評価。

・韓国 (H 重工業 韓国財閥の一翼)

2002 年から6年間、電機事業部の技術顧問として招聘。

日本から招聘された大会社の OB 並みの給与、月2週間の勤務、一流ホテルでの飲食自由、車貸与の処遇。

通常2年で終わるといわれる技術顧問業務が6年も続いたのは、技術士としての高い評価によるものと考えられます。

・韓国 (P 社 従業員 50 名 自動機械の製造会社)

電気自動車用モーターの回転子の着磁装置開発支援で、広い見識に基づく評価。

・韓国 (D 社 従業員 20 名 大型モーター・発電機用空気冷却器、大形変圧器の油冷却器専門メーカー)

2018 年より会社の技術力向上のため温度シミュレーションプログラムを開発し提供、併せて品質管理の指導により、従来韓国向けのみであったが、日本への販路拡大に成功。日本向けが生産高の20%に相当する売上増加に寄与。

東南アジアでは、世界的先進国の日本で、国が認定した技術士に対する評価は絶大なものです。従い全ての活動に国を代表する技術士としての責務を感じつつ任務を果たしてきました。これが日本技術士としての高い評価に繋がったと考えます。

長崎県就職の思い出

(農業) ふくだ 福田 みつひろ 光博



長崎県技術士会創立50周年おめでとうございます。私も「技術士登録証」を本棚から取り出して懐かしく見えています。

平成8年3月22日でした。当時の試験は今と違って、自分で決めたテーマについて論文を書くのがテストでした。大学を昭和34年に卒業して早速、長崎県庁に受験を申込みましたが、「今年は新規採用はしません。」と人事課だろうと思いますが返答がありました。私は仕方なく、他の県を受験すべく大学の教室でジャンケンで決め、静岡県を受験することになりました。静岡県は組織づくりの年度だったらしく10名以上の採用となり、私は助かりました。勤務は浜松市にある浜松土地改良事務所でした。私の担当は県営浜名用水事業の馬込川の河口閉塞を防止する工事現場の担当でした。天竜川から浜名湖まで砂丘が続いており沿岸流の影響で河口閉塞が起これば背後地の農作物の大きな被害が起こっていました。この為、馬込川の河口閉塞防止の導流堤を建造することになったのです。導流堤は海底が変化しない沖まで築堤する計画でした。

工事が完成しないうちに長崎県庁から割愛申請が出され、私は長崎県に帰ってまいりました。長崎県に帰ってみますとやっぱり故郷は良く安心して仕事ができるように感じました。両親も喜んでいるようでした。

長崎県庁では耕地課の土地改良係に配属され、かんがい排水事業、農道事業を担当しました。水資源に恵まれない本県では貯水池が必要で、雲仙の別所ダム、五島の三井楽ダム、福江ダム等多くのダムが完成しました。またその頃から、農業にも自動車が普及され、農村にも自動車道としての農道が建設されていきました。農免農道、島原半島を一周する広域農道が建設されました。このように、農業の生産性の向上と併せて農村に集会所等生活環境の整備が進み、地域全体の発展を図るべく農村社会が近代化されるようになってまいりました。

女性技術士としての活動を振り返って

たていし ひろこ
(環境) 立石 ヒロ子



創立50周年、おめでとうございます。

このたびは、退職して15年も経ちます私に、寄稿依頼をいただき、大変恐縮しております。在職時に役に立つ仕事ができただろうかと自問自答していましたが、今回、勇気を出して寄稿させて頂こうと思ったきっかけがあります。それは、長崎県支部創立10年記念誌に寄稿されていた技術士の方が「女性技術士の増加は好ましい。男性組織にも活性化が表れている。技術士の資質向上に果たす役割が大きい。」と書かれていたことです。これまでの若い女性技術士の方々の活躍の成果だと思います。私とは何の関係もありますが、勝手に、背中を押された次第です。

私は、17年間、長崎県の環境部局や研究所におりまして、その後、民間の環境調査会社に勤務いたしました。開発事業に係る環境影響評価調査、廃棄物処理施設調査、騒音・振動・悪臭と多岐にわたりました。技術士という資格を知ったのは民間会社に行ってからです。業務関係の国内大手の調査会社の若い女性の名刺に書かれていて、恥とも思わず尋ねると「運転免許のようなものです。」と一言でした。それが、技術士取得のきっかけになりました。

技術士の資格取得は、多くの技術士の方が言われるように、あくまでも技術者としてのスタートラインに立ったに過ぎないと思います。資格取得のために得た知識や倫理観は、その後、研鑽・実績を積んで自身の技術力向上に資するものです。私の場合は、環境カウンセラー・環境アセスメント士・県の環境影響評価審査会委員や環境アドバイザーをさせていただいた時も、能力が伴わない後ろめたさを、技術士の資格に支えられていたように思います。

随分前に、「技術士だより・九州」に「理系女子へ」と題して寄稿させてもらいましたが、退職して、改めて、再び、理系女子の方々にエールを送りたいと思います。女性技術士が待ち望まれている今、興味のある分野で精一杯、能力を発揮して、技術士になって、活躍して下さい。

ここ数年は、二酸化炭素濃度が、白亜紀(1.4億～6,000万年前)は、現在の約4倍2,000ppmだったということから、地球46億年が面白くなって、それが高じて、福井県の水月湖にある年縞博物館まで出かけました。一緒に来た主人はロビーで居眠りでしたが。これからも少しずつ楽しもうと思っています。

祝！長崎県技術士会50周年

扇精光コンサルタンツ株式会社

(建設) ^{そ が} 曾我 ^{ちゅうじ} 忠治



この度、創立50周年を迎えられ心よりお祝い申し上げます。私が学生の頃この会が創立されており、ほんとうに長い歴史を感じます。

私が技術士に合格したのは諸先輩方の温かく熱心なご指導の賜だと思っています。合格までは複数回の受験の末、なんとか合格にたどりつきました。合格したと確信していたら不合格で、不合格だと思っていたら合格したという紆余曲折で、粘り強く挑戦しました。これから技術士としての自覚を持ち決意を新たにすることを覚えています。

長崎県技術士会入会当時とはとにかく主催の行事には積極的に参加して、諸先輩方との交流を深めそして技術力を向上させたいと考えていました。

研修会では、建設分野ばかりでなく、医療・気象や電気・機械関係そして倫理など多種・多様な分野の最新の技術動向や実務に役立つ知識を学ぶことができました。研修回数も年々増えて、最近では年4回程度と旬の話題の内容も含め、たいへん充実してきていると思います。

工場見学会では、平成29年のソニー（SCK）、平成30年の三菱電機、そして大島造船所・・・普段見ることができない場所を見学することが出来て、非常に興味深く勉強になりました。このような研修会や工場見学を通じて、視野が大きく広がったように感じます。

また、技術士会有志のゴルフコンペ（APREN会）も会が始まった翌年の平成31年4月から参加させてもらっています。なかなかスコアは上達しませんが、皆さんとスコアは気にせず楽しくプレーし、技術士同士の親睦を深めることが出来ています。今までは年に1～2回の参加でしたが、今後はフル参加（4回）を目指したいと考えています。自然の中でのプレーは爽やかで気持ちがいいです。皆さんも是非参加されたらどうでしょうか。新しいメンバーが参加されることを期待しています。

50年という長い歴史において諸先輩方のご尽力に感謝申し上げます。今後も、技術士としての自覚を持ち、地域社会に貢献できるよう努力していきたいと思っています。

長崎県技術士会のさらなる発展と、今後のますますのご活躍を心よりお祈りいたします。50周年、誠におめでとうございます。

何故雲仙・普賢岳大火砕流で犠牲者多発したのか？

(株) サンコー技研 技術顧問

(建設) きしぞの ひとし
岸園 人司



平成3年(1991)6月3日の大火砕流では、43名もの多くの命が失われた。その大きな原因を作ったのはマスコミの行動にあったと言える。なぜそう言えるのかを、令和3年(2021)6月3日付け「長崎新聞」記事と長崎県「雲仙・普賢岳噴火災害誌」を参考にしつつ考える。

最初の火砕流が発生したのは5月24日であった。その後、5月29日の時点では、更なる火砕流の危険性が高まっていた。そのため、九州大学島原地震火山観測所長の太田一也先生(令和7年(2025)1月15日、慢性呼吸不全のため逝去)から、島原市災害対策本部を通じて消防団員の北上木場農業研修所からの退去要請があった。この要請を受けて、消防団員は同研修所より300m下流の白谷公民館へ退去したのである。この研修所は日頃から消防団員が活動の拠点としていた場所である。

しかしマスコミは、無人化した同研修所を休憩所代わりに使用し、無断で長距離電話をかけていたこともわかった。また、住民が避難して無人となった民家に入り込んだ某テレビ局の取材陣は、電源や電話を無断で使用するという不祥事(窃盗事件)を起こしていたのである。

そのような状況にあったため、消防団員は留守宅の警備も兼ねて、火砕流に飲み込まれた北上木場農業研修所に戻ってしまった。しかも、亡くなった警察官2人は、報道陣らを避難誘導して戻る途中、同研修所前で火砕流に巻き込まれてしまったのである。

このようにして、6月3日の大火砕流で、消防団員と警察官が命を落としたのだった。また、この時の火砕流による報道関係の犠牲者は、タクシー運転手4人を含めて20人であった。

太田先生は、大火砕流発生から30年の節目にあたり、新聞で次のように話をされ、大いに悔やんでおられた。

『報道陣が避難勧告さえ守っていれば、少なくとも消防団員と警察官は死なずに済んだはず。住民にも犠牲者はでたが、報道陣が避難勧告に従っていれば、危険を感じて無断で入域を控えたと思う』と。

このようなマスコミの身勝手な行動によって、多くの犠牲者がでてしまったことは34年以上経過した今でも忘れてはならない。

島原でのCPD見学会の思い出

長崎県水産部漁港漁場課

(総監・建設・水産) なかせ 中瀬 さとし 聡



長崎県技術士会が創立50周年という輝かしい節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。50年前と申しますと、私が生まれる以前のことであり、私自身が長崎県技術士会に入会してから、まだ10年に満たない年月しか経っておりません。私が業務で携わっているインフラの寿命も基本的には50年とされていることを踏まえると、改めて「50年」という歴史の重みを実感するところです。

技術士会での思い出として特に印象深いのは、平成29年10月25日に開催された島原半島のジオパークに関するCPD見学会です。島原半島が約400万年前の海底火山の噴火を起源としていることなど、地質の成り立ちを現地で学ぶことができ、大変貴重な経験となりました。当時、私は長崎市から島原市へ転勤したばかりで、土地勘もなく、地域の歴史にも疎い状態でした。私の業務は主に港湾や漁港など海に関わるインフラ整備であり、施設設計において地質条件は非常に重要な前提となります。通常の業務では地質調査を通じて「現在の状態」を把握することが中心ですが、この見学会では「地質の起源」や「過去の経緯」に触れることができ、新たな視点を得ることができました。

また、インフラの寿命がせいぜい50年であるのに対し、地質の時間軸は数百万年というスケールであることに圧倒された記憶も鮮明です。さらに、私が担当する施設の多くは海中に基礎があるため、地質を直接確認する機会はほとんどありません。そのような中で、地質に直接触れ、専門家の説明を聞くことができたことは、非常に有意義な学びとなりました。

さて、技術士は科学技術の専門家ですが、現在の技術士制度は更新制ではありません。科学は常に進化しており、かつての地動説のようにパラダイムシフトが起こることもあります。今の常識が将来には「昔の考え方」となる可能性もあるため、私自身も科学の進展に遅れることなく知識をアップデートし続ける必要があると感じています。今後も継続的な自己研鑽に努めるとともに、職場などで若手技術者向けの研修を開催するなど、技術士の知名度向上や技術士人口の増加に、微力ながら貢献してまいりたいと考えております。

改めまして、長崎県技術士会の創立50周年、誠におめでとうございます。

技術士登録当時を振り返って

(株) 工藤測量設計

(建設) こんどう 近藤 かおる 薫



長崎県技術士会が創立50周年を迎えます。これまで県内関係部門との共同活動や技術力向上のための研究・研修会等を通じ、技術士会の啓発や活性化に携わってこられた先輩方のご努力に心から敬意を表します。私は平成12年に技術士登録を行ったものの当会へ入会しておりませんでした。民間への転職を機に入会させて頂きました。定期的開催されるCPD研修会には出来る限り参加させて頂き、自己研鑽に努めることとしています。寄稿にあたり登録当時を振り返ると共に、現在の仕事についてもふれてみたいと思います。

私が登録を行った平成12年前後は、長崎県土木部の予算規模は補正も含め現在でも最大で、離島架橋や女神大橋など大型公共事業が目白押しでした。

私は平成9年から県庁で新西海橋のデザイン検討に携わりました。今や国指定重要文化財である西海橋に併設される橋梁であり、シビックデザインの先駆者である東大の篠原教授を景観委員長として、模型や操船シミュレーションを駆使し、景観設計を先行し、その結果を基に技術的検討を進めました。現在の基準を適用すると繊細で構造美に優れた西海橋に見劣りするため、アーチリブは現橋をオマージュしたトラス構造とし、鋼管内にコンクリートを充填するなど景観はもとより技術面にも新旧の調和に配慮した工夫がなされています。

この後、女神大橋建設事務所に異動し、中央径間480mの3径間連続鋼斜張橋の建設に携わりました。長崎湾東部にある大久保山を起点とする地形乱流が、バランス架設閉合前、桁や主塔基部に多大な影響を及ぼすことから、耐風安定性の確保が課題でした。当時の三菱の技術者の方々と風洞模型実験を繰り返し、3P側直ベントの追加や主塔基部補強等を行い、安全に完成させることが出来ました。課題の多かった桁下65mでしたが、後に私が港湾課長在任中、大型クルーズ船をめぐる国内の誘致競争で大きな強みとなりました。

この2橋は令和7年度に完成20年を迎え、今後の維持管理が課題となっています。

現在の会社では主に品質管理を担当しています。これまでの経験や知識に加え、発注者との橋渡しを通して目的に合った良質な成果を目指しています。

また当会を通じて技術力の向上を図りつつ、若い技術者の指導・育成に努め、信頼ある楽しく長く続けられる職場環境づくりに微力ながら役に立てればと考えています。

長崎県技術士会入会までの道のりについて

三菱重工業（株）

（総監・建設）

や の とおる
矢野 亨



長崎県技術士会（以下本会）が今般50周年を迎えるにあたり、これまでご尽力いただきました諸先輩方へ敬意を表すとともに心よりお祝い申し上げます。私自身はまだ入会后3年あまりと、新参者の部類に入りますが、技術士資格挑戦から本会入会までの道のりを少し振り返ってみたいと思います。

私は平成6年に三菱重工業(株)に入社し、以降12年間橋梁の設計・現地工事・製作部門を渡り歩き、それぞれの立場での業務を行ってきました。その後発電事業部門に異動となり、風力発電、火力発電に携わってきており今に至っています。技術士について名前は知っていましたが、若い頃にはあまり意識することなく時間が過ぎ去ってしまい、40歳くらいで周囲の方々、特に私の後輩などが受験し見事合格をつかみ取り、よりレベルの高い仕事に取り組んでいる事を羨ましく思ったものです。そのようなこともあり、私も一念発起し仕事の合間を利用し猛勉強を開始し、建設部門（鋼構造）を取得することができました。当時筆記試験よりもプレッシャーのかかる口頭試験で非常に緊張しており、終了後試験会場のビルから出たときの解放感は今でも忘れられません。

その後10年ほどたち、先輩方から総監部門受験を勧められ、チャレンジすることになりました。専門分野とは異なり、時事問題含めた幅広い知識の習得が求められ苦労はしましたが、物事を複数の視点で見ることにより優先順位をつけて最適解を見出すという管理手法を改めて体系的に勉強することができ非常に有意義な資格であることが言えると思います。

資格取得後はしばらくCPDに関しても積極的ではなく外部団体の講習会などにも参加することはなかったのですが、本会に触れる機会があり、早速入会してみました。これまで意識したことはなかったのですが、県内にこれだけの技術士の方々が各方面に活躍されているのを間近に感じる事が出来、まだまだ自分は名称こそ技術士といえども先輩技術士に追いつける様切磋琢磨しなければならないことを痛感したものです。今後はこのような素晴らしい会に入会できたことを誇りに思い、更なる研鑽を積むことにより社会への恩返しができるように頑張っていきたいと感じております。更に若い世代に技術士の魅力を伝え、1人でも多くの資格取得、本会入会を勧め、地域の活性化に微力ながら貢献していきたいと考えております。

創立50周年を祝って

(株) オリエントアイエヌジー

(環境) さとう よしたけ 佐藤 (吉武) くらら



長崎県技術士会の創立50周年、おめでとうございます。また、本記念誌への寄稿の機会を頂き、大変光栄に思います。

～長崎県技術士会との関わり～

長い歴史をもつ長崎県技術士会であるが、私が技術士に合格し、本会に加入したのは3年前の2022年度である。会員としての年数は浅いが、長崎大学工学部での講義の講師を2度も務めさせていただき、貴重な経験ができた。

～専門性を活かして～

大学生と接したことで、自分の大学時代を思い出したので、そこから今日までのキャリアを振り返ってみたい。当時、理学部の地理学科にいた私は2か所の地理・地質系コンサルでアルバイトをした。作業の地味さ・膨大さ等に疲れ、「自分はコンサルには就職しないぞ」と思いながら大学院に進んだ。

しかし、大学院で環境計画学を学ぶかたわら就活で業界研究などを行い、「自分が学んだことを活かして働くにはコンサルだな」と思ったので、結局環境コンサルに就職した。大学での専攻に近い分野の仕事を、自分で考えながら進められることはやりがいがあったが、業務を通じて狭い世界にしか関われないと当時は感じており、それが不満で一度観光業界に転職した。

その後、やはり専門性を活かして働きたいと思い、建設コンサル業界に戻ることを決め、現職に至り、まちづくりや道路関連などのコンサル業務に携わっている。より技術力を高めるために技術士資格も取得することができた。

そして現在、育休取得により、また業務からは遠ざかっている。幼い我が子と過ごす日々は楽しく貴重であるが、仕事に復帰して、技術者として自分の専門性を活かして社会に貢献できる日が待ち遠しいとも感じる。

～終わりに～

いくつかのキャリアの節目を見つめ直すことで、専門性をもった技術者として働くことができることのありがたさを実感する。今後も、社会の変化や技術の進歩に対応しながらさらに専門性を高め、技術者として活躍していきたい。また、自分や業界全体が、多様なバックグラウンドにより仕事の質を向上し、幅を広げ、AI時代に必要とされる技術者にならなければならない。それにより、長崎県技術士会の60年、70年、ひいては100年に繋げていきたい。

長崎県技術士会 50周年に寄せて

(公財) 長崎県建設技術研究センター

(建設) まちなが 待永 まさひろ 正浩



このたび長崎県技術士会が創立50周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。私は建設部門の技術士として、昨年の令和6年5月に入会したばかりではありますが、この記念誌に寄稿の機会をいただけたこと、大変光栄に思います。私が長崎県技術士会やその活動を知ったのは、私が所属する公益財団法人長崎県建設技術研究センター内に、ホームページを開設することになった時です。平成18年度から平成27年度の10年間、長崎県技術士会のホームページが設置され、担当の技術士の先輩が運営・管理を行っておられました。そこで技術士会の活動や、技術士の豊富な知識や知見を知り、感銘を受けました。私が技術士を目指すきっかけになったのも、技術士会のおかげといっても過言ではありません。

昨年の年間4回のCPD研修会では、技術者倫理をはじめ、地球温暖化、防災・復旧、環境、半導体、衛生等の科学技術に関する講義を受講しました。自分の技術士の分野ではない他分野の内容は大変刺激になっています。また、懇親会などを通じて、先輩方の知見や経験に触れる機会を得て、技術者としての視野が大きく広がったと感じています。日々の業務だけでは得られない社会的責任や倫理観、そして技術について考える場があることは、私にとって重要です。技術士のコンピテンシーでは、継続研さんで「CPD活動を行い、コンピテンシーを維持・向上させ、新しい技術とともに絶えず変化し続ける仕事の性質に適応する能力を高めること」とあります。DX(デジタルトランスフォーメーション)が進み、仕事のやり方が変わろうとする時代、専門技術や多分野の技術、最近の生成AI、ICT、ビッグデータなどの技術を使いこなせるように、継続研さんを重ねていきたいと思っています。

この50年という節目は過去を振り返るだけでなく、それを礎として、現在の会員と未来の会員への新たな一步を踏み出す機会になると考えます。今後、時代の移り変わりとともに社会の価値観やニーズが変わるでしょうが、技術分野の重要性は更に増していき、更なる複合的な技術や新しい技術を求められることになるかと思います。その中では、多分野の技術士が集まる技術士会は大きな役割を果たすのではないのでしょうか。これからの長崎県技術士会がさらに多様な分野と世代の技術者が結束し、より発展していくことを願うとともに、私もご一助できればと考えております。

まつばら君も目指す 技術士人生50年

(株)九州建設計画エンジニアリング
長崎事務所長

(建設) まつばら 松原 たけし 武志



【まつばら君の概要】

工業高校を卒業後、地元の建設会社で土木工事の施工管理に従事していました。その後は建設コンサルタント会社に転職し、九州管内のダム・河川の土木工事発注に関する積算技術業務に従事しています。その間、働きながら4年制大学の法学部を卒業し、大学院の経営学修士（専門職）を修了しました。

【これからの技術者に求められること】

これまで学んできた様々なことのうち、他分野と考えていた技術が、時代の変化に伴い、自己の分野でも強く求められるようになってきました。例えると、狭い脇道を歩いていたら、車線が多い大通りに合流したような感覚です。

他分野からの技術流入が加速化していく中で、他分野の専門部会に積極的に参加し、専門家に対しても堂々と質問をする勇猛果敢さを備えた、分野の垣根を横断する学際的な技術者が求められていると感じます。

【変わらないまつばら君】

社会人の学び直しは、自発的に一步を踏み出すところから始まります。表出化・言語化が求められる令和において、背中で語るということは時代に合わないかもしれません。しかし、学びや挑戦を続ける姿勢を、寡黙に墨守し続けるまつばら君でありたいと考えます。また、それによって得ることができた技術力と学識は、最大限社会に還元されるべきである、と考えます。

【まつばら君は挑戦し続ける】

他部門の技術士取得に併せ、技術と法が互いに強く結びついていく相乗効果を期待して、司法試験の予備試験ルートに挑戦したいです。

さらには、小中学校などで、理科教室等支援があります。身近に使われている自己の専門技術について、子供たちにわかりやすくプレゼンテーションや対話をすることで、科学技術に興味を持ってもらうことにも、挑戦したいです。

最後に、社会人が学ぶことに遅いということは無い、と強く申し添えます。

受験勉強と合格後の取り組み

扇精光コンサルタンツ株式会社

(建設) やまぐち まさひろ
山口 昌紘



この度は創立50周年を迎えられたとのこと、おめでとうございます。私は2023年度に合格し、本会に入会させていただきました新米技術士です。そこで、これから受験される皆様に向けて、「1. 受験勉強の内容」、「2. 合格後の取り組み」について投稿させていただきます。

1. 受験勉強の内容

私は筆記試験に向けて、まず過去問の分析から始めました。直近5年分の問題を一覧表に整理し、出題傾向や頻出テーマを掴むことに注力しました。その上でそれらテーマを自分の業務内で意識し、理解を深めました。重要なのは、資格のための勉強とならないよう業務と資格を結びつけることだと思います。次に、「骨子法」と呼ばれる論理的に筋道を立てる勉強方法を取り入れました。例えば選択科目の設問3では、現状、課題、解決策、新たな懸念、波及効果という骨子をつくり、各テーマで整理しました。また、試験当日の時間配分や設問の字数を事前に計画し、効率よく解答できるよう準備しました。

口頭試験では、リーダーシップ、コミュニケーション、マネジメント、評価の4項目に対応する業務経験を整理し、30秒以内で説明できるよう準備しました。先輩技術士の方に模擬面接を3回実施していただきましたが、緊張感のある模擬面接の場で自分の言葉で伝えられる力を養うことができたと思います。

2. 合格後の取り組み

現在、私は熊本地震で被災した熊本城石垣の復旧設計に従事しています。そして、その一貫として北陸地方のある大学で振動台模型実験に取り組んでいます。この取り組みにおいて、口頭試験で理解に努めたコンピテンシーの重要性を感じています。教授、学生、材料メーカー等の多くの関係者の意見をまとめる「リーダーシップ」、そして、限られた時間、予算、人員の中で目的を達成するための「マネジメント」。これらはいずれも技術士として欠かせない能力であり、私は今まさにその力を鍛えている最中です。合格後は技術士会での講演の機会をいただいたり（山口支部長ありがとうございます。）、土木学会の学術講演会にチャレンジしたりと一歩ずつ研さんを積むことができています。

最後に、筆記試験対策で丁寧に添削をしてくださった先輩方、口頭試験で模擬面接や助言をくださった先輩方に心より感謝申し上げます。

技術の灯火を絶やさぬよう

扇精光コンサルタンツ株式会社

(建設) おおき しんたろう
大城 進太郎



はじめに

私は、令和6年度技術士第二次試験に受験・合格し、令和7年度から長崎県技術士会に入会させていただきました。新参者で大変恐縮ですが、「創立50周年を祝って」、技術士としての今後の抱負について、記したいと思います。

技術士としての今後の抱負

私は、平成24年度から建設コンサルタントとして働き始め、道路橋の新設設計、耐震設計、点検・補修設計、撤去設計、長寿命化計画の策定支援など、橋梁に関連した幅広い業務に携わりました。その過程において、先輩方がこれまで培われてきた「技術」を分け与えていただきながら、業務上の課題を乗り越え、技術者として成長させていただきました。しかしながら、今後、経験豊富な技術者の高齢化、退職が差し迫り、また、少子高齢化による担い手不足も懸念されており、技術継承に大きな危機が迫っていると感じております。さらに社会保障費の増大や物価高騰等による公共事業量の減少なども想定され、技術者としての経験の機会も少なくなっていくものと思われます。

そのような過渡期において、先輩方から受け継いだ「技術」を守り、将来に繋いでいくためには、貴重な経験の機会を大切に、先輩・後輩技術者と「技術」を共有していく体制・仕組みが必要であると考えます。「技術は見て盗め」という時代から、聞いたら先輩方もAIも親切丁寧に答えてくれる時代です。しかしながら、経験工学とも言われる土木分野における「技術」は教えてもらって身につくほど単純なものではないと感じています。地域の担い手としての役割を持続的に果たしていくことができるよう、追いつけ・追い越せの精神で先輩方に引き続き喰らいついて精進して参りたいと思います。

おわりに

先日、女性初の内閣総理大臣に高市氏が就任されました。総裁選後に「働いて、働いて、働いて参ります」というコメントがありました。時代に逆行しているように思える発言でしたが、私はその覚悟が滲み出た発言に心を動かされました。このような時代だからこそ、今踏ん張らないと、失われてしまう技術があると思います。私も覚悟を持って、技術継承という課題に正面から向き合い、一つでも多くの技術を受け継ぎ、伝えていけるよう努めたいと思います。

「鳥居型人材」を目指した自己研鑽

三菱重工業（株）総合研究所

（総監・応用理学） 土橋 晋作 どばし しんさく



長崎県技術士会の創立50周年、まことにめでとうございます。

私は、長崎県に暮らし始めてから20年以上となります。これまで一貫してリサーチエンジニアとして研究開発業務に携わり、レーザによる光計測技術を適用し、発電プラントや廃棄物処理施設向けのオンライン監視技術およびその製品化技術を構築してまいりました。現在、OI（オープン・イノベーション）を推進する業務に従事しています。

一方、自己研鑽にも積極的に取り組んでいます。慶應義塾大学経済学部では社会科学の基礎を学び、「産学官連携促進の規定要因」をテーマに卒業論文を執筆しました。また熊本大学の履修証明プログラム「産学連携教育イノベータ育成プログラム」を履修し、産学連携のあり方について教育学の観点から研究を深めました。放送大学では、長崎大学工学部の教授3名にインタビュー調査を行い、その結果を「社会と産業」コースの卒業論文にまとめました。継続入学後は、科目群履修認証（エキスパート）を6つ取得しています。

また、2017年に技術士登録して以来、技術士会主催のCPDに積極的に参加しています。CPD講演では10回の発表を行い、長崎県技術士会のCPDでも2回発表する機会をいただきました。また、九州本部ものづくり部会の幹事や登録グループ「IT21の会」の運営役員を歴任するなど、技術士会の運営にも携わっています。技術士会の活動に参加するたびに、継続的な研鑽に励んでいらっしゃる諸先生方にお会いし、その学びの深さに触れることが、私自身の研鑽の大きな原動力となっています。

以上のような自己研鑽を通じて、私は「鳥居型人材」となることを目指しています。図に示すように、私の考える「鳥居型人材」とは、理工学と社会科学という2つの専門分野を深く掘り下げ、それらを連携させる「OI推進力」を備えることで、新たな「知（産学連携）」を創造できる人材です。まだ道半ばではありますが、着実に研鑽を重ねていきたいと思えます。



図：鳥居型人材

【9】長崎県技術士会の将来像、今後への期待

長崎県技術士会 会長 山口和登 P 9 2

日本技術士会九州本部長崎県支部 支部長 山口昭光 P 9 3

長崎県技術士会の将来像と今後への期待

長崎県技術士会 会長 やまぐち かずと 山口 和登 (応用理学)



長崎県技術士会の将来像を考える前に技術士自体の将来像を考える必要があります。今、技術士に必要なものは社会的貢献の拡大、それには更なる知名度の拡大が必要と判断します。日本技術士会の発足が昭和26年、技術士法の成立が昭和32年、技術士本試験の開始が昭和33年、日本技術士会九州支部創立が昭和40年、長崎県技術士会の創立が昭和50年とそれぞれ50年から74年とそれなりの歴史があります。同じような資格のうち、医学とか事務系の会計士等の多くの資格がありますが、同じような技術部門で建築の部門は技術士の部門にはありません。しかし、建築士の知名度は技術士より大きく、それなりに社会貢献も大きいものと思われます。建築士の歴史も全国建築士会が設立されたのが大正3年(1929)で、建築士法が制定されたのが昭和25年と日本技術士会の創立、技術士法の成立よりそれぞれ37年、7年古いことになりますが、資格の登録者数は1級建築士が38万人(現役は14万人位)と技術士の登録者数の10万人よりかなり多いと思われます。この差も知名度の差でもあると思います。この為、歴史の拡大はできませんが、知名度の拡大は技術士資格者数の拡大が大いに貢献するものと思われます。ただし、質を落としての拡大は意味がなく、質を落とさず、資格者数を拡大する、この点は日本技術士会の大きな使命と思われます。

長崎県技術士会の目的の一つとして「地域に貢献すること」としていますが、そのためにも知名度の拡大は必要不可欠と思われます。この50年の地域での活動は、この為の活動に外なりません。特に後半の活動は地域に貢献することにより、会員数の拡大に貢献したものと思われます。長崎県技術士会の将来像としては更に地域への貢献を推し進める事にほかなりません。この為にはさらに技術士試験の受験者数を増やし、合格者数を増やし、そして長崎県技術士会の会員数を増やすことが地域に貢献することに繋がると判断いたします。

今後への期待としては、前述した全国の技術士資格保持者の増加、日本技術士会の会員数の増加、それによる年会費の低廉化が進み、その結果、日本技術士会の会員数が更に増えることにあります。日本技術士会の会員数の増加には会費以外に入会のメリットの増加が期待されます。技術士部門のうち、建設部門はそれなりにメリットがありますが、他の部門はそれほどない様に思われます。この為、他の部門も更にメリットが増える仕組みが望まれます。

長崎県技術士会の夢を実現する

公益社団法人日本技術士会九州本部長崎県支部

支部長 やまぐち 山口 あきみつ 昭光 （農業）



長崎県技術士会（以下「県技術士会」という。）創立５０周年おめでとうございます。長崎県支部を代表してお祝いを申し上げます。

県技術士会の活動を把握するため平成１５年４月創刊の機関紙「APREN」を読み返してみました。創刊号から第４７号までは技術士試験体験記、技術士を目指す人へなど「技術士」をテーマとした記事が多数を占めています。第４８号から第８７号までは講演会、見学会の報告が多数を占めています。県技術士会の活動に触れた記事はあまり見あたりません。

平成２６年６月、日本技術士会九州本部長崎地区を母体として長崎県支部が創立され、県内に２つの技術士会が存在することになりました。県技術士会は地域社会貢献活動を主とし、長崎県支部はＣＰＤ活動を主とする役割となりました。しかし、地域社会貢献活動はあまり推進されているとは言えない状況です。

長崎大学名誉教授の故岡林隆敏先生から常々「県内でこれだけの人数の技術者集団は他にない、一丸となったら何でもできるのではないか」とアドバイスをいただいていた。

故大橋義美さんが機関紙第４号（平成１６年１月）に「技術士会の夢」を述べておられます。１)会員の増強で県内技術士登録者の加入率８０％以上、２)総会研修会への参加者の増員で６０名以上の参加、３)研修会開催回数の増加で５～６回、４)機関紙ページ数の増加で３～４ページ、５)県技術士会の社会参加で一般社会人も参加する研修会等の開催など。

２０年後の現在の状況は、１)について、年々会員は増加していますが４０％程度です。２)について、研修会への参加は５０名程度です。３)について、研修会４回見学会１回の５回開催しています。４)について、４ページ程度です。５)について、取組みが遅れています。

県技術士会の活性化のためには会員のために何かをやるというのではなく、会員一人一人が県技術士会の看板を背負って自分の技術力を高めるために努力することだと思います。それを実現するためには会員同士が協力し運営する県技術士会であり魅力ある会であることが重要です。県技術士会の発展のためには社会的役割と技術士の地位向上に向けた活動が必要だと思います。それを実現するためには会員同士が話し合う場を数多く設け、会員の全員参加の活動が重要です。さらには、多くの会員に日本技術士会へ入会していただき継続した活動により地域に開かれた貢献する県技術士会に繋がっていくのだと思います。

【10】機関紙APRENの軌跡・目次一覧

1. 機関紙APRENの軌跡		P 9 5
2. 目次一覧		P 9 6

【10】機関紙APRENの軌跡・目次一覧

1. 機関紙APRENの軌跡

平成15年(2003)4月に長崎県技術士会の機関誌として創刊された「IPEJ-NAGASAKI-」は、平成18年(2006)4月発行の第13号より「APREN だより」と改称し、以来、毎年4回の発行を一度も途切れることなく続けてまいりました。令和7年(2025)10月には、通算第91号を迎えるに至っております。

誌面には、行事や各種活動の報告をはじめ、専門分野における研究成果、さらには、技術士としての思いや提言など、多くの会員の皆様による貴重な寄稿が掲載されております。創刊以来の全号を以下に掲載しておりますので、ぜひご覧いただき、長崎県技術士会が歩んできた50年の歴史に思いを馳せていただければ幸甚に存じます。

なお、誌面の都合上、掲載内容は縮小白黒版にしておりますため、読みづらい場合には、ホームページ内の「会報」メニューより、創刊号から最新号までの全てをご覧いただけます。今後発行される会報も随時掲載いたしますので、併せてご利用ください。

ホームページのアドレスおよびQRコードを下記に記載しておりますので、ご参照いただければと存じます。

長崎県技術士会アドレス：<https://apren.jp/>

QRコード



2. 目次一覧

<創刊号～第12号>



-NAGASAKI-

(社) 日本技術士会九州支部 長崎県技術士会

表8 IPEJ - NAGASAKI- 執筆者・記事一覧（創刊号～第12号）

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<創刊号> 平成15年 (2003) 4月1日 P108	犬束 洋志	創刊号に寄せて	会長
	黒瀬 正行	顧問団を代表して	顧問
	永濱 伸也	環境カウンセラー登録応募に関して	藤永地建
	山口 和登	最近の「温泉」事情	ニチボー
		役員について	事務局
<第2号> 平成15年 (2003) 7月1日 P109	犬束 洋志	平成15年度の活動にあたって－総会における会長挨拶－	会長
	小松 和彦	技術士CPDについて	(財)長崎県建設技術研究センター
	平原 宏志	長崎地区広報委員として思うこと	大栄開発(株)
	樋口 敏明	官庁技術者の技術力向上と役割について	長崎市役所
	大橋 義美	総合技術監理部門を受験して	西日本菱重興産(株)
		平成15年度定期総会報告	事務局
		研修委員会便り	
<第3号> 平成15年 (2003) 10月1日 P110	柏原公二郎	青年技術士に期待する	(株)昭和ボーリング
	上戸 好美	技術士になって考えること	三菱重工業(株)長崎研究所
	中村 昇	技術士になって	長崎県諫早農村整備事務所
	黒田 智	長崎県技術士会に望むこと	長崎市役所
		研修委員会便り	
<第4号> 平成16年 (2004) 1月1日 P111	犬束 洋志	新しい年を迎えてのご挨拶	会長
	久保田栄士	私の技術士業務	久保田技術士事務所
	古賀 政治	技術者として考えること	藤永地建(株)
	大橋 義美	「技術士会の夢」事務局便りに替えて	長崎地区代表幹事
<第5号> 平成16年 (2004) 4月1日 P112～P113	藤村 幹治	技術士への登竜門をめざす新たな挑戦！実践記	扇精光(株)
	久原 俊之	私の受験動機	(株)ワイビーエム
	竹岡 伸一	総合技術監理を学習して	扇精光(株)
	桐原 敏	技術士を目指す人達に	大栄開発(株)
	平原 宏志	もう一つの技術士受験	大栄開発(株)
	大橋 義美	事務局便り	代表幹事

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第6号> 平成16年 (2004) 7月1日 P114		平成16年度総会報告	
	草野 哲朗	受験を通して得たもの	古賀建設(株)
	大橋 義美	事務局報告	西日本菱重興産(株)
<第7号> 平成16年 (2004) 10月1日 P115～P116	松村 昇	技術コンサルティングとコミュニケーション	松村技術士コンサルティング事務所
	平原 宏志	平成16年度広報委員会報告	長崎地区広報委員
	大橋 義美	事務局便り	西日本菱重興産(株)
<第8号> 平成17年 (2005) 1月1日 P116～P117	犬束 洋志	平成17年新年のご挨拶	会長
	松尾 稔	ベトナム事情	松尾技術士事務所
	山田好之助	変動帯日本に住む(台湾集集地震をとおしてみたわが国の自然災害)	藤永地建(株)
	大橋 義美	事務局便り	西日本菱重興産(株)
<第9号> 平成17年 (2005) 4月1日 P118～P119	犬束 洋志	平成17年度の始めに当たって	会長
		長崎県技術士会会則(案)について	
	大橋 義美	事務局報告	西日本菱重興産(株)
<第10号> 平成17年 (2005) 7月1日 P120～P121	犬束 洋志	平成17年度通常総会を終了して	会長
		平成17年度通常総会・研修会報告	
		長崎県技術士会の略称(ネーミング)の募集について	
	大橋 義美	事務局たより	西日本菱重興産(株)
<第11号> 平成17年 (2005) 10月1日 P122～P124	大橋 義美	技術士会の現状と活動及び課題等について	地区代表幹事
	大橋 義美	事務局たより	西日本菱重興産(株)
	犬束 洋志	長崎県技術士会(会員数:100名)の活動	会長
	大橋 義美		地区代表幹事
<第12号> 平成18年 (2006) 1月1日 P124～P125	犬束 洋志	平成18年新春を迎えて	会長
	大橋 義美	総務・広報委員会	委員長
	西村 博崇	IT委員会	委員長
	松永 光司	災害・技術支援委員会	委員長
	小松 和彦	CPD委員会	委員長
	山口 和登	修習技術者支援委員会	委員長
	藤村 幹治	後に続く技術士育成のために	
		本田圭助技術士(機械部門)が「平成17年度長崎新聞文化賞」を受賞される	
	大橋 義美	事務局たより	西日本菱重興産(株)

<第13号～第91号>



表9 APRENだより 執筆者・記事一覧（第13号～第91号）

掲載号 発行年月日 掲載ページ	氏名	タイトル	備考
<第13号> 平成18年 (2006) 4月1日 P126	犬束 洋志	平成18年度のスタートにあたって	会長
	西村 博崇	ホームページの開設にあたって	IT委員長
	橋口 茂	「川に学ぼうかい」の活動紹介	
	大橋 義美	事務局だより	西日本菱重興産(株)
<第14号> 平成18年 (2006) 7月1日 P127～P128		平成18年度通常総会報告	
	川村 昭宣	技術士の技術力向上について思う	
		九州支部・技術士センター合同役員会報告	
		ミニ研修会の開催計画について	
<第15号> 平成18年 (2006) 10月1日 P129～P130	大橋 義美	事務局だより	西日本菱重興産(株)
		平成18年度(1)研修会報告	
	平原 宏志	佐世保地区ミニ研修会報告	副会長
		平成18年度後半の研修会開催等について	
	宇土 和彰	環境と暮らしを支える森林・林業の再生に向けて	長崎県長崎林業事務所
<第16号> 平成19年 (2007) 1月1日 P130～P131		技術懇話会の開催について	
	大橋 義美	事務局だより	西日本菱重興産(株)
	犬束 洋志	新しい年を迎えて	会長
	柏原公二郎	海洋地下資源「メタンハイドレート」開発への期待	(株)昭和ボーリング
<第17号> 平成19年 (2007) 4月1日 P132	松尾 稔	我が国における発電の現状	松尾技術士事務所
	大橋 義美	事務局だより	西日本菱重興産(株)
	大橋 義美	平成18年度の活動と反省	事務局
<第18号> 平成19年 (2007) 7月1日 P133～P134	若杉 泰昭	若者の理科離れについて思う事	(株)大島造船所
		平成19年度の通常総会について	
	犬束 洋志	会長続投ご挨拶	会長
	大橋 義美	平成19年度の通常総会・研修会報告	事務局
<第19号> 平成19年 (2007) 10月31日 P134～P135	松尾 稔	三菱技術士会の開催について	
	桐原 敏	事務局だより	大栄開発(株)
	山口 和登	副会長就任ご挨拶及び最近の話題について	副会長
	大橋 義美	九州支部便り	長崎地区代表幹事
<第20号> 平成20年 (2008) 1月10日 P135～P136		平成19年度(2回目)研修会・懇親会について	
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
	犬束 洋志	新年のご挨拶	会長
<第21号> 平成20年 (2008) 1月10日 P135～P136	高山 能博	最近のISO状況とエコアクション21について	
	桐原 敏	機関紙発行担当者より 平成19年度2回目研修会報告	大栄開発(株)

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第21号> 平成20年 (2008) 4月17日 P136～P137	久保田英士	81歳で工学博士号を取得して	
	高木 辰治	水の不思議について思う。	藤永地建(株)
	木原 真	平成19年度技術士試験の体験記	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第22号> 平成20年 (2008) 7月20日 P137～P138	松田 明德	大島造船所の紹介	
		長崎県技術士会会員の活動状況(平成19年度)	
		平成19年度通常総会・研修会・交流会報告	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第23号> 平成20年 (2008) 10月10日 P138～P139	久原 俊之	魚の健康診断で学んだこと	(株)久原水産研究所
	西村 博崇	長崎での5年間を振りかえって	
		研究発表会・研修会のご案内	
		技術者情報提供のお願い	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第24号> 平成21年 (2009) 1月10日 P139～P140	犬束 洋志	平成21年の新春を迎えて	会長
	山口 和登	研究発表会、研修会の開催・出席報告	副会長
	西村 博崇	長崎県技術士会ホームページご利用のお願い	
	大橋 義美	(社)日本技術士会九州支部の動き等	長崎地区代表幹事
		技術者情報提供のお願い	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第25号> 平成21年 (2009) 4月10日 P141～P142	山口 昭光	農業土木技術者の技術力(現場力)向上について	長崎県農林部
	小松 和彦	横断歩道橋が消えた！(ひょうたんから駒)	日鉄鉦コンサルタント(株)
	田口美菜子	技術士試験体験談	大栄開発(株)
		平成21年度「防災実務セミナー」開催について	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第26号> 平成21年 (2009) 7月10日 P142～P143	犬束 洋志	技術者倫理	会長
	松永 光司	まちづくり雑感	
	安井 広宣	地域とともに歩む	西日本菱重興産(株)
	小松 和彦	平成21年度防災実務セミナー(概要報告)	日鉄鉦コンサルタント(株)
		平成21年度長崎県技術士会総会の開催	
		佐世保工業高等専門学校での講演	
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第27号> 平成21年 (2009) 10月2日 P144	毎熊 元	平成21年度長崎県農村振興技術連盟夏期研修会に参加	(株)高崎総合コンサルタント
	松浦 恭千	政権交代と社会資本整備	(株)マリタイムプランニング
		事務局より	
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)
<第28号> 平成22年 (2010) 1月15日 P145～P146	犬束 洋志	夢よ再び	会長
	本田 圭介	日欧の環境対策とサステナビリティ	
	大橋 義美	日本技術士会及び九州支部の動向など	長崎地区代表幹事
		平成21年度技術懇話会(NPO法人技術フォーラム主催)の開催	
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第29号> 平成22年 (2010) 4月10日 P147～P148	岡崎 研児	長崎県技術士会は地域社会のために何が出来るか？	復建調査設計(株)長崎支社
	古賀 政治	平成21年度技術士試験の体験記と最近の話題	(株)シビルテック
	田口美菜子	機関紙第28号「日欧の環境政策とサステナビリティ」を読んで	大栄開発(株)
	山口 和登	九州支部技術士論文発表会報告	副会長・(株)長崎地研
	桐原 敏	機関紙発行担当より	大栄開発(株)

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第30号> 平成22年 (2010) 7月10日 P148～P149	林 誠治	卓話” あなたは技術者に会ったことがありますか？”	
	松本 直弥	「あかつき」と「はやぶさ」	(有)プラネット・エム
		(社)日本技術士会の表彰について	
	犬束 洋志	日本技術士会会長表彰を受けて	会長
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第31号> 平成22年 (2010) 10月5日 P150～P151	神田 昭夫	海外でのコンサルタント活動のお奨め	
	松本 守	長崎大学公開講座『安全安心工学入門』サステナブルな社会を目指して－安全安心は長崎から－を受講して	(有)創拓エンジニアリング
	大橋 義美	支部の動向など	長崎地区代表幹事
	山口 和登	長崎県技術士会の活性化の一環として	副会長
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第32号> 平成23年 (2011) 1月31日 P151～P152	山口 和登	新しい年を迎えて(最近思うこと)	副会長
	大橋 義美	新年を迎えて(平成22年の活動と23年の活動計画)	長崎地区代表幹事
	平原 宏志	新春の夢	大栄開発(株)
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第33号> 平成23年 (2011) 4月10日 P153	上戸 好美	企業内技術士の活動の概要近況報告	
	高木 辰治	20周年を迎える地すべり学会九州支部の活動紹介	学会九州支部幹事
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第34号> 平成23年 (2011) 7月12日 P154	山口 和登	会長就任の御挨拶	会長
	毎熊 元	副会長就任ご挨拶及び長崎県農業土木技術士会の紹介	副会長
	大橋 義美	公益法人日本技術士会九州支部の活動	長崎地区代表幹事
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第35号> 平成23年 (2011) 10月10日 P155～P156	山口 和登		会長
	毎熊 元	鹿児島県技術士会と会の活動・運営に関する意見交換会	副会長
	大橋 義美		理事(長崎地区代表幹事)
	白石 善暢	森林への遷移と人為の関わり～雲仙普賢岳山腹斜面の植生遷移～	島原振興局林務課
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第36号> 平成24年 (2012) 1月12日 P156～P157	山口 和登	平成24年の新しい年を迎えて	会長
	大橋 義美	年頭のご挨拶	長崎地区代表幹事
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第37号> 平成24年 (2012) 4月10日 P157～P158	毎熊 元	平成23年度日本技術士会九州本部技術士論文発表会に参加(聴講)して	(株)高崎総合コンサルタント
	田崎 敏昭	長崎県の道路施設維持管理計画について	前長崎県道路維持課
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第38号> 平成24年 (2012) 7月10日 P158～P160	山口 和登	平成24年度通常総会を終えて	会長
	毎熊 元	平成24年度長崎県技術士会、研修会報告	副会長 (株)高崎総合コンサルタント
	大橋 義美	公益法人日本技術士会関係事項について	長崎地区代表幹事
	園田 直志	長崎県技術士会に入会して	
	尾崎 泰	技術士試験への挑戦	尾崎泰建築設計事務所
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第39号> 平成24年 (2012) 10月10日 P161～P162	清水 正明	技術士受験の薦めと平成25年試験制度改正のポイント	理事
	松尾 大介	技術士試験を振り返って	
	大橋 義美	前長崎県技術士会会長犬束洋志様の叙勲のお祝い	理事
	桐原 敏	－行事の御案内－ 機関紙発行担当者より	大栄開発(株)

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第40号> 平成25年 (2013) 1月10日 P162～P163	山口 和登	平成25年の新しい年を迎えて	会長
	大橋 義美	平成25年 新年を迎えて	長崎地区代表幹事
	福田 光博	バランス感覚	
	本田 直幸	技術士の資格試験を終えて	扇精光(株)
	桐原 敏	機関紙発行担当者より	大栄開発(株)
<第41号> 平成25年 (2013) 4月15日 P164～P165	毎熊 元	平成24年度日本技術士会九州本部技術士論文発表会に参加(聴講)して	副会長 (株)高崎総合コンサルタント
	佐々 典明	社会資本整備に思うこと	長崎県県央振興局建設部
	桐原 敏	平成24年11月ジオラボ現場見学会	大栄開発(株)
		機関紙発行担当者より	
<第42号> 平成25年 (2013) 7月10日 P165～P167	山口 和登	平成25年度通常総会報告及び会長再任ご挨拶	会長
	犬束 洋志	NERCを活かして	
	大橋 義美	公益社団法人日本技術士会関連(長崎地区代表幹事退任に当たってのお礼)	
	園田 直志	新役員の役割分担について 機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第43号> 平成25年 (2013) 10月10日 P168～P169	川村 昭宣	副会長就任ご挨拶	副会長
	清水 正明	技術士と議会活動	
	毎熊 元	公益社団法人日本技術士会関連(長崎地区代表幹事就任ご挨拶)	長崎地区代表幹事
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第44号> 平成26年 (2014) 1月10日 P169～P172	山口 和登	平成26年の新しい年を迎えて	会長
	岡林 隆俊	長崎県技術士会と大学の連携	顧問、長崎大学名誉教授
	曾我 忠治	安全・安心な社会を目指してー継続は力なりー	
	岡林 隆俊	松尾稔著『現代の築王・紂王』(・人質体験を通して見た世界・)のご紹介	顧問・長崎大学名誉教授
	毎熊 元	平成26年 新年を迎えて	長崎県地区代表幹事
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第45号> 平成26年 (2014) 4月10日 P172～P174	川村 昭宣	長崎県技術士会の発展に向けて	副会長
	有吉 正敏	つしまみらい計画	前 長崎県対馬振興局建設部長
	毎熊 元	日本技術士会九州本部ー長崎県支部設立状況報告	長崎県地区代表幹事
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第46号> 平成26年 (2014) 7月10日 P174～P176	山口 和登	平成26年度通常総会報告	会長
	毎熊 元	日本技術士会九州本部長崎県支部創立年次大会報告と御礼	県支部長
	園田 直志	長崎県技術士会現場見学会報告	
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第47号> 平成26年 (2014) 10月10日 P176～P177	大橋 義美	長崎県技術士会の設立と歩み	監事
	毎熊 元	第41回技術士全国大会(福岡)への参加お願い	県支部長
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第48号> 平成27年 (2015) 1月10日 P178～P180	山口 和登	平成27年の新しい年を迎えて	会長
	中村 聖三	エンジニアリング・デザイン教育と技術士会の連携	長崎大学大学院工学研究科 教授
	蔣 宇静	地域貢献を目指す「長崎地盤工学会」と長崎県技術士会の連携	長崎地盤工学会 会長 (長崎大学大学院工学研究科 教授)
	園田 直志	機関紙発行担当者より	N.ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第49号> 平成27年 (2015) 4月10日 P180～P182	川村 昭宣	長崎県技術士会の歩み（その2）－設立年について－	副会長
	岡林 隆敏	針尾無線送信所（無線塔）跡の見学会報告	顧問
	園田 直志	長崎県技術士会お知らせ・編集後記	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第50号> 平成27年 (2015) 7月10日 P182～P185	山口 和登	平成27年度通常総会報告	会長
	毎熊 元	(公社) 日本技術士会九州本部 平成27年度長崎県支部年次大会 報告	県支部長
	大橋 義美	平成27年度第1回CPD見学会報告	監事
	園田 直志	長崎県技術士会お知らせ・編集後記	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第51号> 平成27年 (2015) 10月10日 P185～P187	岡林 隆俊	「モダン長崎展」の紹介－地図と絵葉書で見る長崎市の変遷－	顧問
	清水 正明	技術士としての議員活動	理事
	本田 圭介	持続可能な地域づくりに貢献しうる市民参加による地域政策評価枠組みの開発	
	園田 直志	長崎県技術士会お知らせ・編集後記	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第52号> 平成28年 (2016) 1月10日 P188～P190	山口 和登	平成28年の新しい年を迎えて	会長
	山口 昭光	長崎県支部第2回CPD見学会の報告	県支部広報委員
	山口 昭光	長崎県支部第2回CPD研修会の報告	県支部広報委員
	園田 直志	機関誌発行担当者より	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第53号> 平成28年 (2016) 4月10日 P190～P192	毎熊 元	日本技術士会九州本部 平成27年度長崎県支部活動報告	県支部長
	園田 直志	長崎大学のJABEE認定プログラム協力	理事
	山口 昭光	近代化遺産（近代水道・ダム）めぐり	県支部広報委員
	園田 直志	機関誌発行担当者より	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第54号> 平成28年 (2016) 7月10日 P193～P195	山口 和登	平成28年度通常総会報告	会長
	毎熊 元	(公社) 日本技術士会九州本部 平成28年度長崎県支部年次大会 報告	県支部長
	山口 昭光	平成28年度第1回CPD見学会報告	県支部広報委員
	園田 直志	機関誌発行担当者より	N. ソノダ技術士事務所
	松本 守		(有)創拓エンジニアリング
<第55号> 平成28年 (2016) 10月10日 P195～P197	松尾 稔	日本技術士会会長賞を受賞して	理事
	安武 昭典	技術士登録を経て	MHIソリューションテクノロジーズ(株)
	山口 和登	長崎県技術士会のホームページのリニューアルについて	
	古賀脩一郎		
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第56号> 平成29年 (2017) 1月10日 P197～P200	山口 和登	平成29年の新しい年を迎えて	会長
	山口 昭光	平成28年度第2回研修会報告	県支部広報委員
	園田 直志	長崎大学－JABEE認定プログラムへの協力	理事
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第57号> 平成29年 (2017) 4月10日 P200～P202	毎熊 元	日本技術士会九州本部 平成28年度長崎県支部活動報告	県支部長
	岡林 隆俊	「石橋の歴史から見る諫早眼鏡橋－日本を代表する美しい石橋－」の講演会のご紹介	顧問 長崎大学名誉教授
	若林 嘉幸	長崎県技術士会に入会して	三菱日立パワーシステムズ(株)長崎工場
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第58号> 平成29年 (2017) 7月10日 P203～P205	山口 和登	平成29年度通常総会報告	会長
	岡林 隆俊	「石橋の歴史から見る諫早眼鏡橋-日本を代表する美しい石橋-」の講演会のご紹介 (2) 諫早眼鏡橋の重要文化財としての評価	顧問 長崎大学名誉教授
	古賀脩一朗	新入会員の紹介	情報配信局
	園田 直志	機関誌発行担当者より	
<第59号> 平成29年 (2017) 10月10日 P205～P208	園田 直志	災害ボランティアに参加しよう	理事
	山口 昭光	平成29年度第1回CPD研修会報告	県支部広報委員
	古賀脩一朗	新入会員の紹介	情報配信局
	園田 直志	機関誌発行担当者より	
<第60号> 平成30年 (2018) 1月10日 P208～P210	山口 和登	平成30年の新しい年を迎えて	会長
	折田 定良	平成29年度日本技術士会 長崎県支部第2回CPD見学会報告	県支部
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第61号> 平成30年 (2018) 4月10日 P210～P213	川村 昭宣	大橋義美さん（元長崎地区代表幹事、元九州支部副支部長）を偲んで	副会長
	曾我 忠治	平成29年度第3回CPD研修会報告	
	中瀬 聡	長崎大学での講演を終えて（1）	前 島原振興局建設部河港課
	田代 大樹	長崎大学での講演を終えて（2）	大日本コンサルタント(株)
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	理事
<第62号> 平成30年 (2018) 7月10日 P214～P216	山口 和登	平成30年度通常総会報告	会長
	毎熊 元	（公社）日本技術士会九州本部 平成30年度長崎県支部年次大会 報告	県支部長
	折田 定良	平成30年度 日本技術士会九州本部長崎県支部第1回CPD見学会報告	
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	理事
<第63号> 平成30年 (2018) 10月10日 P217～P219	清水 富夫	九州本部倫理委員会の活動について	理事
	久保 竜誠	平成30年度第2回CPD研修会報告	
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第64号> 平成31年 (2019) 1月10日 P219～P222	山口 和登	平成31年（2019年）の新しい年を迎えて	会長
	川下 敏雄	平成30年度日本技術士会九州本部長崎県支部第2回CPD見学会報告	
	川口 昭博	平成30年度 第3回研修会報告	(株)実光測量設計
		機関誌発行担当からのお知らせ	
<第65号> 令和元年 (2019) 4月10日 P222～P225	園田 直志	長崎県技術士会の広報活動～長崎大学社会環境デザインコースの学生へのPR活動～	理事
	岡本 政大	長崎大学での講演を終えて（1）	県央振興局建設部
	中川 剛樹	長崎大学での講演を終えて（2）	扇精光コンサルタンツ(株)
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第66号> 令和元年 (2019) 7月10日 P225～P227	山口 和登	令和元年度通常総会報告	会長
	毎熊 元	支部長（副会長）退任のご挨拶	県支部 前支部長
	山口 昭光	支部長（2019～2020年）に選任されて	県支部長
	古賀脩一朗		情報配信局
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	理事

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第67号> 令和元年 (2019) 10月10日 P228～P231	折田 定良	令和元年度 日本技術士会九州本部 長崎県支部第1回C PD見学会報告	県支部
	久保 竜誠	令和元年度第1回C PD研修会報告	
	曾我 忠治	令和元年度長崎県支部第2回C PD研修会報告	
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	理事
<第68号> 令和2年 (2020) 1月10日 P232～P234	山口 和登	令和2年(2020年)の新しい年を迎えて	会長
	折田 定良	令和元年度 日本技術士会九州本部 長崎県支部 第2回 C PD見学会報告	県支部
	中司 龍明	令和元年度第3回研修会報告	(株)長崎地研
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第69号> 令和2年 (2020) 4月10日 P235～P238	折田 定良	日本技術士会九州本部 長崎県支部 令和元年度活動報告	県支部 事務局長
	比良 章吾	長崎大学での講演を終えて(1)	長崎市まちづくり部都市計画課
	園田 直志	第5回 長崎大学社会環境デザインコースの学生への広報 活動	理事
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第70号> 令和2年 (2020) 7月10日 P238～P240	山口 和登	令和2年度通常総会報告	会長
		情報配信局よりお知らせ	
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第71号> 令和2年 (2020) 10月10日 P240～P242	河口 基興	令和2年度 第1回C PD研修会報告	(株)微研テクノス
	折田 定良	ゴルフコンペAPREN会について	理事
		情報配信局よりお知らせ	
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第72号> 令和3年 (2021) 1月10日 P242～P244	山口 和登	令和3年(2021年)の新しい年を迎えて	会長
	竹添 光郎	令和2年度 第2回C PD研修会報告	(株)イーエムトラスト 工事部
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第73号> 令和3年 (2021) 4月10日 P245～P247	山口 和登	令和3年度の長崎県技術士会の総会について	会長
	園田 直志	第六回長崎大学(社会環境デザイン工学コース)学生への 講演会報告	理事
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第74号> 令和3年 (2021) 7月10日 P248～P249	山口 和登	令和3年度通常総会報告	会長
	折田 定良	「技術士C PD活動実績の管理および活用の仕組み」につ いて	県支部 幹事
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第75号> 令和3年 (2021) 10月10日 P250～P252	山口 和登	長崎県下における令和3年8月の豪雨災害について	会長・(株)長崎地研
	久原 正也	令和3年度第1回C PD研修会報告	理事・三菱重工業(株)
	園田 直志	令和3年度日本技術士会九州本部防災委員会報告から	理事・県支部防災担当
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	
<第76号> 令和4年 (2022) 1月10日 P253～P256	川村 昭宣	令和4年新年のご挨拶	副会長
	中村康一郎	令和3年度第2回C PD研修会報告	(一社)九州建設技術管理協会
	折田 定良	令和3年度 第3回C PD研修会報告	県支部
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第77号> 令和4年 (2022) 4月10日 P256～P259	山口 和登	令和4年度の長崎県技術士会の総会について	会長
	園田 直志	第7回長崎大学（社会環境デザイン工学コース）学生への講演会報告	理事
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第78号> 令和4年 (2022) 7月10日 P259～P262	山口 和登	令和4年度通常総会報告	会長
	有吉 正敏	令和4年度第1回CPD研修会報告	(公社)長崎県建設技術研究センター
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第79号> 令和4年 (2022) 10月10日 P262～P264	清水 富夫	「倫理は儲かる」！？	九州本部倫理委員会
	兒玉 英治	令和4年度第2回CPD研修会報告	兒玉技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第80号> 令和5年 (2023) 1月10日 P265～P268	山口 和登	令和5年（2023年）の新しい年を迎えて	会長
	兒玉 英治	令和4年度第3回CPD研修会報告	兒玉技術士事務所
	川村 昭宣	長崎県技術士会の改革について	副会長
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第81号> 令和5年 (2023) 4月10日 P268～P272	山口 和登	令和5年度の長崎県技術士会の総会について	会長
	園田 直志	第8回長崎大学（社会環境デザイン工学コース）学生への講演会報告	理事
	岩崎 尚道	令和4年度第4回CPD研修会報告	岩崎技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第82号> 令和5年 (2023) 7月10日 P273～P276	山口 和登	令和5年度通常総会報告	会長
	岩崎 尚道	令和5年度第1回CPD研修会報告	岩崎技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第83号> 令和5年 (2023) 10月10日 P276～P278	山口 和登	長崎県技術士会顧問 岡林隆敏先生を偲ぶ	会長
	園田 直志	岡林隆敏先生の思い出（追想）	理事
	川村 昭宣	岡林隆敏先生を偲んで	副会長
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第84号> 令和6年 (2024) 1月10日 P279～P281	山口 和登	令和6年（2024年）の新しい年を迎えて	会長
	中村康一郎	令和5年度第2回CPD研修会報告	(一社)九州建設技術管理協会
	横山 知充	令和5年度第3回CPD研修会報告	横山技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所

掲 載 号 発行年月日 掲載ページ	氏 名	タ イ ト ル	備 考
<第85号> 令和6年 (2024) 4月10日 P282～P285	山口 和登	令和6年度の長崎県技術士会の総会について	会長
	園田 直志	第9回長崎大学（社会環境デザイン工学コース）学生への講演会報告	理事
	佐藤（吉武）くらら	講演を終えて	(株)オリエントアイエヌジー
	兒玉 英治	令和5年度第4回CPD研修会報告	兒玉技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第86号> 令和6年 (2024) 7月10日 P286～P288	山口 和登	令和6年度通常総会報告	会長
	兒玉 英治	令和6年度第1回CPD研修会報告	兒玉技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第87号> 令和6年 (2024) 10月10日 P289～P291	山口 和登	長崎県技術士会創立50周年記念事業について	会長
	安武 昭典	2024年度 第2回 防災委員会拡大委員会報告	安武技術士事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第88号> 令和7年 (2025) 1月10日 P291～P295	山口 和登	令和7年（2025年）の新しい年を迎えて	会長
	岩崎 尚道	令和6年度第3回CPD研修会報告	岩崎技術士事務所
	浦瀬 俊郎	令和6年度第2回CPD研修会報告	東亜建設技術（株）
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第89号> 令和7年 (2025) 4月10日 P295～P299	川村 昭宣	令和7年行事予定と副会長退任のご挨拶	副会長
	園田 直志	第10回長崎大学（社会環境デザイン工学コース）学生への講演会報告	理事
	佐藤（吉武）くらら	講演内容及び感じたこと	(株)オリエントアイエヌジー
	山本 奉彦	令和6年度第4回CPD研修会報告	扇精光コンサルタンツ(株)
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第90号> 令和7年 (2025) 7月10日 P300～P303	山口 和登	令和7年度通常総会報告	会長
	山本 奉彦	令和7年度第1回現場見学会報告	扇精光コンサルタンツ(株)
	安井 広宣	令和7年度第1回CPD研修会報告	三菱重工交通・建設エンジニア（株）
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所
<第91号> 令和7年 (2025) 10月10日 P304～P306	川村 昭宣	創立50周年記念誌の編集状況報告	顧問
	吉村 賢一郎	令和7年度第2回CPD研修会報告	吉村技術士事務所&行政書士環境事務所
	園田 直志	機関誌発行担当からのお知らせ	N. ソノダ技術士事務所

【 1 1 】 機関誌 A P R E N 全号

「長崎県技術士会創立 5 0 周年記念誌」の P108～P306 に掲載しています機関誌「APREN」全号につきましては、ここでの掲載を省略しております。なお、創刊号から最新号までの全ての号を長崎県技術士会ホームページ内の「会報」メニューに掲載しておりますので、そちらをご覧くださいませうお願いいたします。

【12】協賛広告・寄付金

御 礼

このたび、長崎県技術士会は創立50周年を迎え、記念誌を発行する運びとなりました。半世紀にわたり技術士会の活動を支えてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

本誌の発行に際しましては、多くのご理解とご支援を賜り、特に協賛広告をお寄せいただきました44社の皆様に厚く御礼申し上げます。皆様のご協力により、記念誌が一層充実したものとなりました。

また、故会員の奥様よりご寄付を賜りましたことに、ここに深く感謝申し上げます。

今後も長崎県技術士会は、地域社会の発展と技術の向上に寄与すべく、会員一同努力を続けてまいります。引き続きのご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

＜協賛広告ご芳名（44社）＞

以下に各社名を五十音順で掲載いたします。

(株)アサヒコンサル、(株)アース、(株)アールデ、E-tecs コンサルタント(株)、(株)ウエノ、エム・エムブリッジ(株)、扇精光コンサルタンツ(株)、(株)大島造船所、(株)オリエントアイエヌジー、(株)カミナガ、(株)工藤測量設計、建設環境研究所(株)、(株)五省コンサルタント、(株)三喜工業、(株)サンコー技研、(株)ジオ・ワークス、(株)実光測量設計、(株)昭和ボーリング、西部環境調査(株)、(株)西部試錐工業、(株)第一検査工業、大栄開発(株)、(株)大日ジオテック、(株)長大、東亜建設技術(株)、(公財)長崎県建設技術研究センター、(一社)長崎県建設コンサルタント協会、(一社)長崎県測量設計コンサルタンツ協会、(一社)長崎県地質調査業協会、(株)長崎測量設計、(株)長崎地研、西日本開発(株)、西日本技術開発(株)、(株)ニッソク、(株)ネオグローブ、橋口技術設計(株)、(株)PAL 構造、(株)微研テクノス、藤永地建(株)、(株)ペック、三菱重工業(株)、三菱重工交通・建設エンジニアリング(株)、安武技術士総合事務所、(有)吉川土木コンサルタント

＜寄付金ご芳名＞

故 柏原公二郎氏 ご夫人 柏原恭子様

編 集 後 記

長崎県技術士会創立50周年記念行事として、記念誌を発行する運びとなりました。

本誌のテーマ『技術のあゆみ、未来への架け橋』には、過去半世紀の歩みを振り返りつつ、次世代へ技術と志をつなぐ願いを込めました。

昭和50年(1975)の創立から令和7年(2025)までの50年間にわたる長崎県技術士会の活動を紹介するとともに記録として残し、創立にご尽力された技術士や、今日まで関わってこられた皆様の思いをできる限り盛り込むよう努めました。これを糧に今後の県技術士会の活動がさらに充実していくことを願い、令和7年4月23日に第1回を開催し、令和8年1月22日まで計8回にわたり編集委員会で検討を重ねてまいりました。

発足時の経緯や草創期の資料が少ない中、50年間のあゆみを後世に引き継ぎたいとの思いから、資料収集と関係者からの情報収集に努めましたが、一部推測に頼らざるを得なかった部分もございます。

このようなことから、会員や関係者の皆さまが期待される50周年に十分相応しい記念誌となっているか不安も残っております。構成や順序、表記等においても行き届かない点多いかと思いますが、ご高覧いただき、ご意見やご指導を賜れば幸いです。

最後に、記念誌の発行に際し、ご祝辞を賜りました皆様、ご協賛を賜りました多くの企業・団体の皆さま、さらに編集委員会の会場として県南事務所会議室をご提供くださいました有限会社吉川土木コンサルタントさまに、心より深く感謝申し上げます。

本誌が、長崎県技術士会の歩みを振り返るとともに、未来への新たな一步を踏み出す契機となれば幸いです。

創立50周年記念誌編集委員

委員長 川村 昭宣

山口 和登

園田 直志

横山 知充

山本 奉彦

浦瀬 俊郎

発 行 日	2026年3月
編集・発行	長崎県技術士会
印 刷	(株)康真堂印刷



建設100年を超えた、当時の最高技術を駆使した3本の巨塔

西海橋の近くにそそり立つ、鉄筋コンクリート製の3本の塔。針尾無線塔は大正11年(1922)、旧日本海軍の手によって4年の歳月と155万円（現在の価値で250億円相当！）の巨額の費用を投じて建設されました。いずれも高さ約136m、周囲38m、塔の底面積115㎡（畳74畳分）の無線塔3本が300mの間隔において正三角形に配置されています。

映画「山本五十六」でも描かれた、昭和16年(1941)12月8日の太平洋戦争の勃発の口火を切った真珠湾攻撃の暗号電文「ニイタカヤマノボレ1208」は、この無線塔でも中継されたともいわれています。終戦後は海上保安庁が管理し、平成9年(1997)にその役割を終えました平成25年(2013)3月に国重要文化財（建造物）に指定され、施設の一部公開を開始し、平成28年(2016)には日本遺産に認定された「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」の構成文化財の一つにもなっています。現地では「針尾無線塔保存会」がガイドや管理を行っています。令和4年(2022)5月に放送されたNHK土曜ドラマ「17才の帝国」では無線塔が作中において重要な存在であるAI「ソロン」として登場、電信室は閣議室として登場しました。

（ながさき旅ネットより引用）